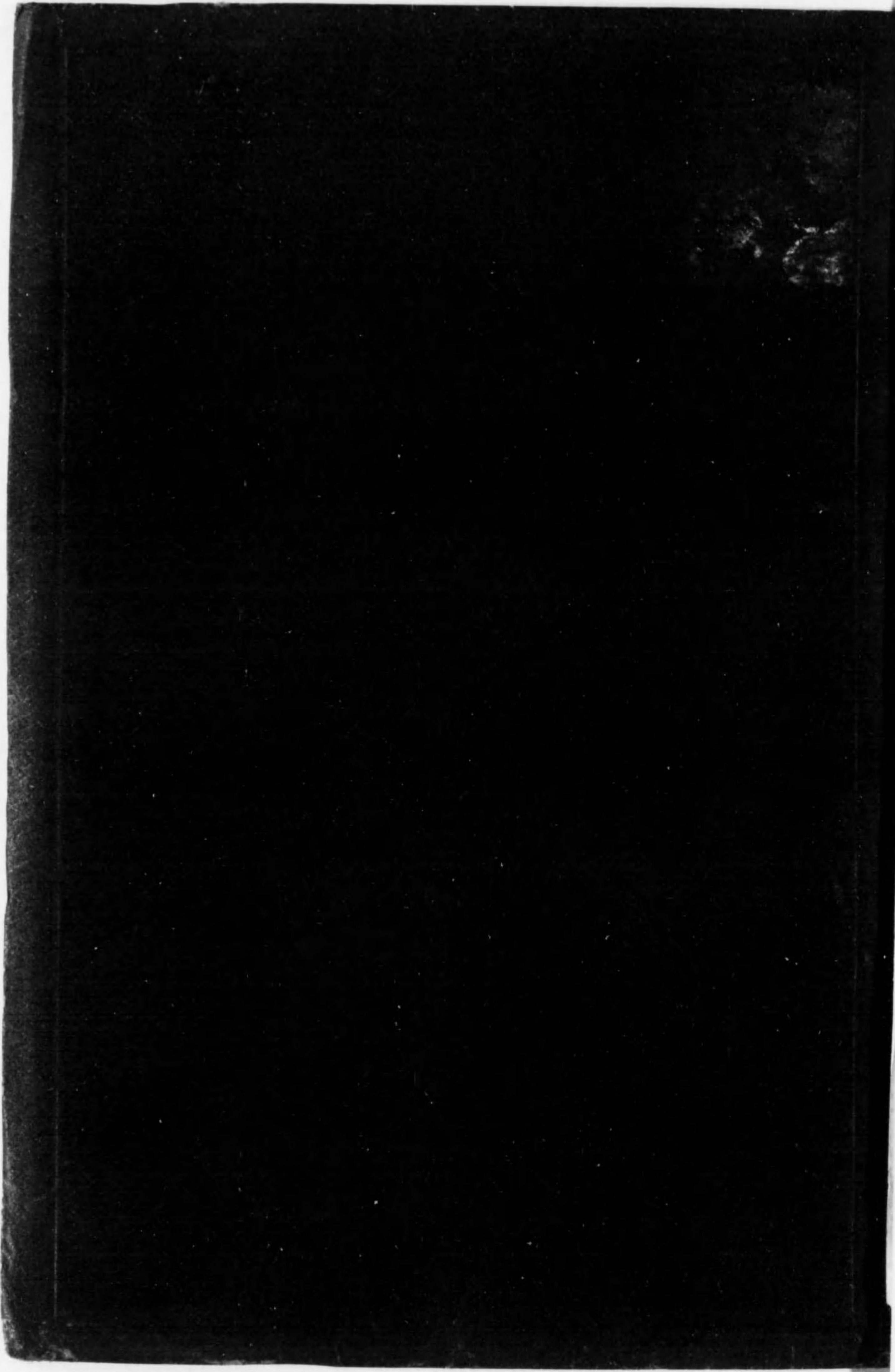


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

始



特223
741



平林治德著

新國文大綱
備考

卷五

立川書店發行



はしがき

一、備考は編者が各作品について、教授者の立場に立つて調べた所を試に書き記して教授者諸君の机邊に呈して参考に供するものであるから、一家言に過ぎないのではあるが、併し場合によつては本書活用の上に重要な役目を演ずる事もあるから、勝手な氣焰をあげるよりは、親切に調べ、念入に考へるといふ事を根本方針とした。

一、要旨 に於ては採擇の趣旨を述べた。

一、解釋 の部は特に出来る限り調査を正確にする事に努めた。そしてなるべく詳しく記述する方針にした。教授者諸君が参考せられるか否かは勿論隨意であるから、簡に過ぎるよりは詳に過ぎる方が備考としては適當であらうと考へたからである。

一、字句の解釋については手頃の辭書の説をそのまま、或は要約して掲げた。引用辭書には略符を示した。これによつて或場合には一々辭書を参照される手數

を省くことが出来れば幸せである。略符左の通り。

大日本國語辭典 (上田・松井)

大國

言海 (大槻)

言海

廣辭林 (金澤)

廣辭

大字典 (上田外四氏)

大字典

詳解漢和辭典 (服部・小柳)

詳漢

康熙字典

康熙

辭源 (上海商務印書館)

辭源

故事熟語大辭典 (池田)

熟語

諺語大辭典 (藤井)

諺語

日本百科大辭典 (三省堂)

百科

大日本人名辭書 (經濟雜誌社)

人名

國史大辭典 (弘文館)

國史

大日本地名辭書 (吉田)

地名

佛教大辭典 (織田)

佛教

哲學辭典 (岩波)

哲學

文藝百科全書 (早稻田)

文藝

文藝辭典 (創元社)

文辭

新式辭典 (藤村)

新式

日本類語大辭典 (志田・佐伯)

類語

故事成語大辭典 (簡野)

成語

字源 (簡野)

字源

言泉 (落合)

言泉

一、小説及戯曲の一部分を採擇したものに對してはなるべくその全篇の梗概を揚げた。

一、鑑賞 に於ては編者の感想を主として述べたが、批評と云つた方が適當な場合もあり、又教授上の注意を加へた事もある。

一、各章の餘白を利用して雑話を記した。前後の章に多少關係のある話を主とし

たが、直接の関係ないものも思付くまゝに入れた。諸書から抜萃したものは筆者を明らかにしておいたが、筆者の名或は書名を記さないものは編者の漫談である。何かの御参考ともならば本懐の至である。

新國文大綱(卷五)備考目次

一 明治天皇御製 一	
作者.....	一
出所.....	一
要旨.....	一
解釋と鑑賞.....	四
備考.....	九
二 殯宮御通夜の記 二	
作者.....	二
出所.....	二
要旨.....	三
段落.....	三
解釋.....	四
鑑賞.....	五
作者.....	六
三 若さ 元	
作者.....	元
出所.....	元
要旨.....	元
段落.....	元
解釋.....	元
鑑賞.....	元
備考.....	元
四 若葉の雨 一	
作者.....	一
出所.....	一
要旨.....	一
段落.....	一
解釋.....	一
鑑賞.....	一
備考.....	一
五 蛙の聲 六一	
作者.....	六一
出所.....	六一
要旨.....	六一
段落.....	六一
解釋.....	六一
鑑賞.....	六一
備考.....	六一

出所	三三
要旨	六八
段落	六八
解釋	七〇
鑑賞	七〇
六 鳳凰堂	八一
作者	八一
出所	八二
要旨	八四
段落	八四
解釋	八五
鑑賞	八五
七 保津川下り	九三
作者	九三
出所	九五
要旨	九五
段落	九六
解釋	九六
鑑賞	九七

鑑賞	一九
備考	三三
八 晩春の別離	三三
作者	三三
出所	三七
要旨	三七
梗概	三九
解釋	三九
鑑賞	四〇
備考	四〇
九 新緑のかけ	四五
作者	四五
出所	五五
要旨	五五
段落	五七
解釋	五七
鑑賞	五八
一〇 大河禮讚	六五
作者	六五

作者	一五五
要旨	一五七
段落	一六六
解釋	一六六
鑑賞	一六九
一一 大河	一六九
作者	一六九
出所	一七一
要旨	一七一
通釋と鑑賞	一七一
参考	一七三
一二 宿かり	一七三
作者	一七三
出所	一七五
要旨	一七五
段落	一七五
解釋	一七五
鑑賞	一七五

参考	二一八
一三 長江湖航	二二二
作者	二二二
出所	二二二
要旨	二二二
段落	二二六
解釋	二二六
鑑賞	二二七
一四 槍ヶ嶽紀行	二四〇
作者	二四〇
出所	二四一
要旨	二四一
段落	二四六
解釋	二四六
鑑賞	二六一
一五 夏	二六四
(一) 新緑	二六四
作者	二六四

出所	……	二六四
要旨	……	二六五
解釋	……	二六五
鑑賞	……	二六七
(二) 小雨		
解釋	……	二六八
鑑賞	……	二六九
(三) 夕立		
解釋	……	二六九
鑑賞	……	二七一
參考	……	二七一
一六 造化の鞭		
作者	幸田露伴	二七三
出所	……	二七八
要旨	……	二八〇
段落	……	二八〇
解釋	……	二八一
鑑賞	……	二八二
一七 一枚の大理石		
作者	西田幾多郎	二八四
出所	……	二八四
要旨	……	二八四
段落	……	二八五
解釋	……	二八六
鑑賞	……	二八七
一八 空行く雁		
出所	(曾我物語)	二八九
要旨	……	二九一
梗概	……	二九二
段落	……	二九三
解釋	……	二九四
鑑賞	……	二九五
挿繪解説	……	二〇七
一九 曾我兄弟		
作者	森 鷗外	三〇八
出所	……	三〇八

要旨	……	三二六
梗概	……	三二六
解釋	……	三二七
鑑賞	……	三二九
二〇 兒獅子		
原作者	(オリソン・ズエット・マーザン)	三三一
譯者	……	三三二
出所	……	三三三
要旨	……	三三五
段落	……	三三六
解釋	……	三三七
鑑賞	……	三三九
二一 俳句評釋		
作者	沼波瓊香	三四一
出所	……	三四五
要旨	……	三四六
解釋	……	三四六
參考	……	三四一
二三 雀		
作者	小林一茶	三六七
出所	……	三七一
要旨	……	三七一
解釋と鑑賞	……	三七二
參考	……	三七五
二三 畫の悲しみ		
作者	國木田獨步	三七八
出所	……	三八三
要旨	……	三八三
段落	……	三八三
解釋	……	三八四
二四 へち		
作者	長谷川如是閑	三八六
出所	……	三八六
内容	……	三八七
要旨	……	三八八
段落	……	三八八

解釋	三九〇
鑑賞	三九〇
二五 熊野落	三九二
出所	三九二
要旨	三九五
段落	三九六
解釋	三九七
鑑賞	四一八
二六 たのしみは	四二〇
作者	四二〇
出所	四二二
要旨	四二二
解釋と鑑賞	四二二
二七 汽車に乗りて	四二五
作者	四二五
出所	四二六
要旨	四二七
段落	四二八

解釋	四一九
鑑賞	四二四
二八 ベニスの商人	四三六
原作者	四三六
譯者	四三七
出所	四三八
要旨	四四六
解釋	四四六
鑑賞	四四八
附 沙翁の墓	四六五
作者	四六五
出所	四六五
要旨	四六五
段落	四六五
解釋	四六六
鑑賞	四七三

目次終

新國文大綱卷五 備考

一 明治天皇御製

作者

【明治天皇】 第二百二十二代の天皇。諱は睦仁、孝明天皇の第二皇子、御母は従一位藤原慶子、權大納言中山忠能の女なり。嘉永五年九月二十二日（陽曆十一月三日）未半刻御降誕、同月二十九日祐宮と命名あらせらる。萬延元年七月十日皇太子に立たせたまひ（實算九歳）九月二十八日親王宣下ありて御名を睦仁と宣せらる。是時に當り、幕府の威力衰頽し、尊攘の論上下に轟しく海内沸騰す。慶應二年十二月二十九日（實は二十五日）父帝崩じ、同三年正月九日天皇踐祚（實算十六歳）十月十四日將軍徳川慶喜内外の形勢を察し、大政を奉還す。直に喜納あらせられ、十二月九日王政復古の大號令を發し、攝政・關白・征夷大將軍以下の諸職を廢し、新に總裁・議定・參與の三職を置き、諸藩の人才を徴し、これを徴士といふ。以て新置の要職に任ず。明治元年正月三日慶喜會津・桑名及麾下の諸兵を部署

し、討薩表を持って入京せんとす。薩長諸藩の兵勅命を以てこれを鳥羽・伏見に防ぎ、遂に干戈を交ふるに至る。四日仁和寺宮嘉彰親王を征夷大將軍に拜して追討せしむ。幕軍敗走し、慶喜は海路江戸に奔る。十三日太政官を復興し、十五日天皇首服を加へ、大赦を令す。二十七日太政官を二條城に移し、二月三日始めて太政官に行幸あり、勅して東征大總督を置き、總裁有栖川宮熾仁親王をしてこれを兼ね、東海・東山・北陸の三道先鋒軍を總轄し、進んで江戸城を攻めしむ。三月十四日天皇神前に五事を誓ひ、御誓文を發布して國是の方針を示す。二十一日親征して大阪に巡幸したまふ。四月江戸城の明渡ありしを以て、京に還幸あらせらる。尋で江戸上野の戦あり。又奥羽諸藩同盟して王師に抗す。七月十七日詔して江戸を以て東京となし、東幸の旨を宣したまふ。八月二十七日南殿に即位式を擧げらる。九月奥羽諸藩平ぐ。二十日車駕京を發し、東京に幸す。これ二千年來未曾有の事たり。十二月還幸、二十八日皇后入内（一條忠香公の女美子姫）二年二月七日再び車駕東京に幸す。其途次を以て伊勢神宮に親詣し、復古の事を親告したまふ。爾來還幸の事なし。六月復古の功臣を賞し、賞典祿を賜ふこと差あり。十七日諸藩に勅して版籍奉還の請を許し、請はざるものは奉還を命す。四年七月十四日勅して藩を廢し、縣を置く。（寶算二十歲）これより全國郡縣制の下に統治せらるることなれり。五年五月西國に巡幸し、七月還幸、十一月太陽曆を行はれ、神武天皇即位元年を紀元とす。六年

三月天皇斷髮を行はせらる。七年七月佐賀の亂あり、五月臺灣征伐あり。八年地方長官會議を開く。又ロシアと千島・樺太の交換條約を結ぶ。九年六月東北に巡幸あらせらる。九月六日太政官に親臨し、憲法取調を命す。七月七日華族令出づ。二十二年二月十一日憲法發布式を行はせらる。（寶算三十八歲）二十三年帝國議會召集令發せられ、十一月二十五日始めて議會を開き、二十九日親臨あらせらる。二十七年八月一日清國に對し宣戰公布あり、九月十三日車駕東京を發して廣島に幸し、大本營に入らせらる。（寶算四十三歲）三十三年五月北清事變起る。三十七年二月ロシアとの國交斷絶し、遂に戰を宣したまふ。爾來我軍は奮闘して、陸には旅順奉天を陥れ、海にはバルチック艦隊を全滅し、三十八年九月に至り、講和の約調ふ。八月更に日英同盟成る。（寶算五十四歲）三十九年韓國に統監府を、遼東に關東都督府を置く。四十三年八月日韓合併成り、統監は朝鮮總督と改めらる。かくの如く天皇の御宇に於て日本は開關以來未曾有の發展をなし、領域大に擴がり、帝國の面目全く一新して世界列強の伍に入り、新日本の稱を以てこれを顯はすものあるに至る。四十五年七月二十日宮内省よりの發表ありて十四日以來天皇不豫の事を公布せられ、爾來滿天下の臣民至誠を盡して回春を祈りしも、遂に七月三十日崩御あらせられ、九月十三日伏見桃山に葬り奉る。寶算六十一歲。天皇天資叡邁、萬古に卓絶し、宏徳四海に普く、夙に維新の大業を完成し、帝國をして千古無比の發

展を致さしめ、常に中興の祖と仰がれたまふのみならず、實に新日本建設の大皇帝として帝國史乘に最上の優位を占めたまふ。又最も和歌に長ぜさせたまひ、御製實に數萬首に上るといふ。全國の臣民其の偉徳を慕ひ、神宮を東京に起して尊靈を奉祀す。(百科・模範最新世界年表)

出 所

「明治天皇御集」宮内省藏版、御製千六百八十七首を宮内省臨時編纂部にて謹撰、大正十一年十二月一日文部省にて縮刷發行。定價壹圓五拾錢。

要 旨

歌人としての明治天皇の御徳を思慕し奉る情を起さしめるのが本課の主眼である。大帝の現神としての御自覺が、その御製によつて一天四海に輝きわたらせられること、即ち王者としての御風格が帝王調となつてあらゆる歌風に超越して光被してゐる有難き大御心を窺はせたい。随つてその御製には、道を御詠みになつたものが多いけれども、また純藝術と拜し奉るべき御作品も多いので、これを各自の道の爲に牽強附會してはならぬ、御製創作の心的御境涯を偲び奉ることも更に大切なことと思ふ。

解釋と鑑賞

【しづがすむ、の御製】 御題は「農家」、明

治三十七年の御製。

「しづ」賤。下の義、賤しいこと。賤しい者。

こゝは農民の義。しづがや(賤家)いやしい者の家。しづのめ(賤女)身分低い女。しづのや(賤屋)賤家に同じ。しづのを(賤男)身分低き男。(天國)

「わらやのさま」藁ぶきの家の粗末なる有様の義。(明治天皇御集謹解)

民をおぼし給ふ深き大御心の發露せるもの。

(明治天皇御集謹解)

【四方の海、の御製】 御題は「正述心緒」、

明治三十七年の御製。

「正述心緒」正に心緒を述ぶ。物に寄せなどもせずして、心をただちに詠める歌共を集めた。り。(萬葉集略解卷第十一) 譬喩などを用ひ

ずして、直ちに感情を吐露した歌を指した部類の名である。(萬葉集新講)

「四方の海」ヨモのウミ。四海。四海の内。

(天國)こゝは、世界の義。(明治天皇御集謹解)

「はらから」同胞。同母の兄弟姉妹。同腹。轉じて、一般に兄弟姉妹の稱。(天國)上句は所謂四海兄弟の意で、論語に、「四海之内皆兄弟也。」蘇武の詩に「四海皆兄弟、誰爲_レ行路人。」とあるに同じ。

「など」何故。(副)何ゆゑ。何とて。なぜ。「なとか」何。(副)何故にか。何とてか。(關關)四海皆兄弟と思召すに、何とて波風の立騒ぎて、平和ならぬことはいで來るぞとなり。大

御心に世界の平和を希ひ給へるに、他國より道に違へることどもの出で来て、國際間に事あるを救かせ給へり。戦時中にしてこの御製あり。まことに尊び仰ぎ奉るべし。この年十月、東京帝國大學講師アアサア、ロイド氏、この御製をはじめ數篇を英譯してインペリアルゾングスと題して印行し、それを世界各國の主權者におくりたるに米國大統領ルーズヴェルト氏拜讀して、いたく心を動かさしきといひ傳ふ。(明治天皇御集謹解)

【おのが身を、の御製】 御題は「道」、明治四十年の御製。

「おのが身を修むる道は」の「は」(助) 事物を分け離して他と區別するに用ふる語。廣辭

「學ばなむ」の「なむ」(助動) (一)過去の助動詞ぬの活用なるなに未來の助動詞むの加はりたる語。未來を想像する意の助動詞。例——行きなん。(二)願望の意の助動詞。例——行かなん。廣辭こゝは(二)の意。
「なりはひ」生業。(一)耕作のわざ。農業。(二)よすぎ。渡世。生活。廣辭
たとひ生計に追はれて暇なき身なりとも、修身の忘るべからざることを述べ給へるなり。
(明治天皇御集謹解)

【子らはみな、の御製】 御題は「田家翁」、明治三十七年の御製。

「もる」守。(他、ら四)もりをなす。まもる。廣辭

こは、この年九月二十五日の御製なりと承る。當時、一人子の召集せられて遠く滿州の野に出征せしかば、殆ど自失せりし田舎の老翁が、この御製を拜し、聖徳に感激して再び業に勤むるにいたりしといふことを聞きたりき。御製の徳は、田野の老翁を感泣せしめしなり。(明治天皇御集謹解)

【ちはやぶる、の御製】 御題は「神祇」、明治三十四年の御製。

「ちはやぶる」千早振(枕)、いちはやぶるの義、強き勢をいふ。神・人などに冠する枕詞。廣辭

「てしがな」動詞・助動詞の連用形の下につき、願望の意をあらはす。ば・やよりも意味遙に強

し。(新編實用日本文典)

神の心を大御心とせさせ給へる陛下にして、はじめてこの御製ありとぞ申し奉るべき。
(明治天皇御集謹解)

【ひとりたつ、の御製】 御題は「親」、明治三十七年の御製。

「生したてし」は、養育して獨立し得られるやうな身にしたのをいふ。
「わすれざらん」は、忘れないでゐたいものだの意。

一國の君主として、「親の恩を忘れてはならぬ。兎角成人すると、自分一人で大きくなつたやうな氣分になり易いものだから」との仰せ、實に千鈞の重みある子弟に對する立派な

御教訓と拜す。

【たらしちねの、の御製】 御題は同じく「親」
明治四十年の御製。

「たらしちねの」は、母とか親に冠する枕詞。

【廣辭】

「たらしちね」は、(一)たらしちめ、即ち生みの女親。(二)兩親の意がある。【廣辭】

一首の意は、忠孝兩全の意を歌はせ給へるもの。(明治天皇御集謹解)これと同時に、たらしちねのみおやの教あらたまの年ふるまに身にぞしみける。といふのがある。

【岩が根に、の御製】 御題は「磯波」、明治三十七年の御製。

「しぶき」は、飛沫。水玉。

剛壯にして純藝術的な御作品と拜し奉る。

【秋はぎの、の御製】 御題は「月照流水」、
明治三十七年の御製。

「遣水」は、流水を堰き導いて庭園などに流しやるものをいふ。秋萩の咲きかくしたると美しく宜ひ、更にその先の流が、月の光に見えりと、美しくお詠みになつた。之も純藝術的御作品と拜し奉る。(明治天皇御集謹解)

【いけみづは、の御製】 御題は「蓮満池」、
明治二十七年の御製。

池の面は、ことごとく蓮の葉に蔽はれ、その葉の上にもろがる露のみ光つてゐる、といふこれも純藝術的御作品。

【むつまじく、の御製】 御題は「梅花盛」、
明治二十九年の御製。

梅花をお詠みになつたのではあるが、親しい者同志にもやはり競争する気分がある、それに對する御注意にも、とりなされる御製である。(明治天皇御集謹解)この年の御製は美しい叙景ものが多いやうに拜する。

【うるはしく、の御製】 御題は「書」、明治三十八年の御製。

上手に書かうが、下手に書かうが、文字はた

備考

1、佐々木信綱博士の「明治天皇御集謹解」の序文を載せて御参考に供する。

「新しき日本帝國の建設者にましまし、古今東西に比ひまれなる英主におはせしわが明治天皇が、同時にまた、わが國風なる和歌の道に御志ふかく、かつ御堪能にあらせられ、吾等國民が精神上の不朽

だ他人に讀み易いやうに書きたいものであるとの御意。

古人も重ね重ね注意してゐることであるがそれを三十一文字で表されたのである。

【よりそはん、の御製】 御題は「机」、明治四十年の御製。

學者日常の心掛を諭させ給へる御製で、五句は、積らせぬやうにしたいものだとの意。御製を通じての鑑賞は、備考の條を参考せられたい。

の教永久の糧たるべき幾多の作品を遺させ給へるこそ、畏くも貴き極みにはあなれ（中略）天皇はかゝる嚴恭緝熙を極めさせ給へる御日常の間にも、ゆたかに大いなる御心よりして、常に御思を言の葉の道に寄せさせ給ひ幾多のすぐれたる御製を遺させ給ひて帝王の詩人といふ御名を、遠く異國の國民の間にも稱へられさせ給へり。天皇の御作歌に於けるやまことに卓越なる御才におはして、ただにその數に於いて比ひなくおはしますのみならず、御秀逸に富ませ給へることも比ひなくおはしまし、こと、明らかなりとす。由來和歌は、吾が國の歴史と共に起り、歴史に伴ひて榮え、随つて和歌と皇室とは最も關係深く、御歴代の天皇中、九十餘代の天皇の御製は、歴史または歌集に遺り居、また御集の傳はれるもの尠ならず、中にも神武・仁德・聖武・醍醐・村上天皇・崇徳・近衛・後鳥羽・土御門・順徳・後嵯峨・龜山・後宇多・伏見・花園・後醍醐・後村上・後龜山・後花園・後土御門・後柏原・後奈良・後水尾・靈元・後櫻町・光格・仁孝・孝明の諸天皇は、數多の御製をのこさせ給ひて、いづれも歌仙にましまし、が、これら御歴代の天皇に並べ奉りても、明治天皇は、明らかに歌人として卓絶の地位に居させ給へり。天皇が歌に就いて抱かせ給ひし御考は、所謂まごころを重んぜられ、それを歌の生命と遊ばされしにて、すなはち、次の御製によりても伺ひ知り奉るべし。

思ふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける

まごころを歌ひあげたる言の葉は一たびきけば忘れざりけり

歌に對してかくの如き御考を抱き給へりしことゝて、天皇の御製は、眞情の流露をもて、その理想とし給ひ、かつ十分にこの旨を得させ給へり。而してこれを御製すべてを通じてのまことに貴むべき根本の御特色として、おのづから御製中の多きを占むるなる叙景の御作に於ても、

足ひきの山の端いづる月かげに大うなばらの波を見るかな

家なしと思ふ方にも燈火のかけ見えそめて日は暮れにけり

高どのゝ窓てふ窓を明けさせて四方の櫻のさかりをぞ見る

の如き、自然眞摯のうちに自ら感情のゆたかなるをおぼゆる御傾向著く拜せらるゝあれば、更にまた、

つかさ人ささぐる書もよみはてゝ夕べ靜かに花を見るかな

朝顔の花の色なるおほぞらに残るもすずしありあけの月

草雲雀鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさされざりけり

の如き、即興即感の作風にもすぐれさせ給へり

更に又、最も吾等の感じ奉るは、天皇が畏き大御心よりして、或は國家をおぼし、或は祖神を敬ひ給

ひ、或は國民をいつくしみ給ひ、或は御修養、はた御訓誡の意を詠じ給へりし御製なり。由來この種の歌は、或は説明に流れ、或は理路に落ち、歌として趣乏しきもの多かるが習ひなれど、御製に至りては、いづこまでも高き調と、雅びかなる趣とを失はせ給はずして、その御意ふかし。これ蓋し、この種の御歌が、天皇の高く大いなる御人格の自然の發表にましまし、が故にして、その高風氣品にいたりては到底、他の學び奉るを得ざるところ、この種の幾多の御製は吾等國民の心に大なる教訓として不朽の價値を有すべきこと、恰もかの古經典の一言一句にも比し奉るべきものといふべし。

例へば、

曉のねざめしづかにおもふかなわが政いかがあらむと

淺みどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

四方の海皆はらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ

さしのぼる朝日の如くさわやかにたまほしきは心なりけり

とる棹の心ながくも漕ぎよせむあし間の小舟さはりありとも

わが園にしげりあひけりとつ國の草木の苗もおほしたつれば

千萬の民とともに楽しむにます楽しみはあらじとぞ思ふ

ありとある人をつどへて春毎に花のうたげを開きてしがな

等、この種に數へまつるべき御製いと多かり。なほ

夢さめてまづこそ思へいくさ人むかひし方のたよりいかにと

子らは皆いくさのにはに出ではて、翁やひとり山田もるらむ

國をおもふ道に二つはなかりけり軍のにはに立つも立たぬも

いかならむ藥あたへて國の爲いたでおひたる人をすくはむ

國のためたふれし人を惜しむにもおもふは親の心なりけり

つばめ飛ぶかけのみ見えて田植時家に人なき小山田のさと

しづのをが一人引きゆくを車の重荷のうへにつもる雪かな

等の如く、戦時の御製に、國民の上をおぼし、田園の御製に、下民の實情に通ぜさせ給へる御作少なからず拜せらる。こはしばしも民草の上を離れさせ給はざりし畏き大御心伺はれて貴き限りなるが、これにつけて思ひ出さるゝは、亡き高崎男爵がかつて語られしところに、陛下の御製は、大演習行幸の度ごとに御上達あらせられ、また大戦役に際して殊にすぐれたる作品をものせさせ給へるやう拜せらるゝとありしことなり。御製を拜誦する人々の爲に、頗る感銘しつべき物語と覺えけるまゝに、こ

に記しおきつ。

終りに、左に掲ぐる數首の例の如きに至りては、神ながら神を祭らし、すめらみことの御製として、ただ人もて伺ひ奉るべからぬ深き御心境を詠み出で給へるものといふべし。

ちはやぶる神ぞしるらむ民のため世を安かれと祈るころは

わが心およばぬ國の果てまでも夜ひる神はまもりますらむ

目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけれ

わが國は神のするなり神まつる昔の手ぶり忘るなよゆめ

とこしへに民やすかれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神

ちはやぶる神の力によりてこそ我をたすくる人も出でけれ

もし、それ御製全體を通じて、我等が感じ奉るところは、一種雄々しく高く豊かに、且つ廣やかなる御調なるたとへば、うらゝかに晴れたる空に高鳴る小松風を聞くが如く、讀む者をして、その朗らかなる御調におのづから引入れられては、知らず識らず大いなる帝王の威徳に身の溶化せらるゝを覺えしむ。これぞまさしく、高貴博大なる御人格の自然の發露にして、天皇が歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特質とたいへまつるべく、讚歎景仰しまつるに堪へざるところなり。

2、「季節の窓」(大正十四年五月アルス發行、定價貳圓五拾錢)にある北原白秋氏の「明治天皇の御製」を載せて御參考に供する。

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。此の神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜すれば、王者の御風格が、大御心を通して、蒼穹の如く、日輪のごとく、一天四海に輝きわたらせられる。歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて、如何ともいたしやうがない。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな
御製はおのづからなる歌調で、御歌所の歌調を遙かに超越しておはせられる。或歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。要するに大帝の御製は實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て評し奉るべきでは無い。形式上の大稜威がそのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすらに欽仰し奉る所以は實に茲に存するのである。

眞の王道こそ大帝の踐ませ給ふ絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが既に一

の宗教でおはせられた。御製を一々拜誦するに、その殆ど總べてが、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を恵み、四海の和平を求め給ふ御聲ならぬはない。是れ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。大帝は、人たるの道、子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に即いて御詠み遊ばされた。その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられたる御製も少なくないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家・宗教家・道學家達は、御製の眞純なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽強附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられるからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかがひ奉つても、私はほとく歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつて余は敢て茲に其の種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

秋 色

茸狩のかへさに見れば山がつか垣根の柚の實いろづきにけり

庭 菊

この秋もところどころにきくの花うゑてたのしむ九重のには

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすすかけの花さく頃となりけるかな

朝 顔

しばがきにまとひあまりて萩の葉の末にもさけり朝顔の花

秋 風 寒

宮のうちもふくかぜさむくなりけり山べはいまや時雨ふるらむ

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ庭の薄もほにいでにけり

をりにふれて

冬がれの芝生の葦さきにける小春の日影さしわたりつゝ

雨 中 萩

すゑまではまださきみたぬ秋はぎの花うちみだり村雨ぞふる

禁 庭 萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の花もこのごろさかりなるらむ

秋 月 明

ともしびをかゝげぬ方に來てみればいよ／＼あかし秋の夜の月
里

うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこゝちこそすれ
堇

をさなごにつませまほしと思ふかな堇の花さく庭をめぐりて

峯 雪

こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねに雪ぞ見えける

小 鳥 馴

餌をまきていざあさらせむわが庭にけふも小鳥のなれて遊べる

山

旅にいでてまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふなりけり

見 花

高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞみる（原歌七十四首中より抄録）

何等の滞りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はよいと思ふ。しかし良寛以上
上に大帝の御製は眞摯で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつたであらう。しかし、かの
思無邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものにちが
ひない。大帝は抑々からそのまゝであらせられる。禪家の悟入やそれに附纏ふいやみが些かもあらせ
られぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇は良寛以上の大帝の御製のある事
に心を留めねばならぬ。太古にして太新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御
心であらせられる。

3、御宸筆「花ぐはし、の御製」

水戸の徳川圀順侯藏。

「花ぐはし」は、美しい花の義で、櫻に冠す枕詞。

「此やど」は、水戸家を指す。

「世々のこゝろ」は、光圀卿以來忠勤を抜んでたことを指す。

一首の御意は、この家には美しい櫻もあつて目を惹くが、それよりも朕は、この水戸家の過去に遡つ
て代々忠勤を抜んでくれたことを考へて見たとの御意。

明治天皇の御製の数は十萬首餘と稱せられる。勅撰集二十一代集を通じて歌の數約三萬、萬葉の大歌集すら尙四千五百首、個人の歌集として十萬首あるは他に類なく、然もこれが政務御繁劇の間に成れるを思へば御歌才の尋常ならざるを伺ひ奉ることが出来る。

二 殯宮御通夜の記

作者

【芳賀矢一】 ハガヤイチ。慶應三年五月十四日福井縣に生れ、明治廿二年七月第一高等中學校文科卒業。進んで東京帝國大學文科大學國文科に入學し、廿五年七月卒業大學院に入る。二十八年三月第一高等學校教授兼東京高等師範學校教授に任ぜらる。三十一年一月兼官を免ぜられ、十二月東京帝國大學文科大學助教授に兼任、博言學講座分擔を命ぜらる。三十二年五月國語學國文學國史第四講座擔任。三十三年六月文學史攻究法研究の爲獨逸に留學を命ぜられ三十五年八月歸朝、九月東京帝國大學文科大學教授に任ぜられ、國語學國文學第二講座擔任。三十六年四月文學博士の學位を授けらる。四十一年九月教科用圖書調査委員會委員を仰付けらる。大正四年三月勅旨を以て帝國學士院會員仰付けらる。大正五年六月歐米各國へ出張、六年歸朝。十年九月東宮職御用掛を仰付けらる。大正十一年三月本官を辭し七月勅旨を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。昭和元年十二月宮内省御用掛を仰付けられ二年一月職を辭し、二月六日東京小石川の邸に歿、年六十一。(國語と國文學、昭和二年四月

芳賀博士追悼號、故芳賀矢一先生略歴)による。

この外博士は大正十一年本官辭職後國學院大學長となつた。博士の人格については博士追悼號を參考せられたい。特に藤村作博士の弔辭などを。

作者學問上の研究に就いては、文學史がその専攻で、年廿三四の頃既に「國文學讀本」の著述がある。(明治二十三年四月富山房出版)これは後來の「國文學歴代選」の基となつたものである。その他二十六歳の時「世界文學者年表」の著がある。一體作家と批評家とは別々になり易いものであるが作者は双方兼ねたなく筆のたつた人であつた。「國民性十論」を書いた時には一日に一論宛を書いて、十日にして出來上つた。「月雪花」(明治四十二年九月、文會堂發行)は、病氣で入院してをたつた時、一冊の參考書もなしに書いたものである。すべての觀察が奇警で、人の意表に出ることが多い。和歌は作らなかつたが、狂詩などは突差の間に五篇十篇をつくるといふわけで、蜀山人にも劣らない天分をもつてゐた。漢文にも相當熟達してゐて、大學で日本漢文學の變遷を講義したこともある。書物を読むのにも一讀すると、人の思ひつかぬ點まで觀察が及んで、學生に講義する際に多くの暗示を與へた。宴會などからの歸り途に自分の宅などに寄つて、書物を六七冊も持つて行かれるので、「どうするのか」と聞くと、「明日の講義の材料をしらべるのだ」といつて、翌日には立派な講義をするといふ位で、外の人のやうに精讀しなくてもその要點を得るのが特色である。いつも言ふには、「後世の人から、明治大正の學者がこんなつまらんことをしてゐたといはれては恥辱だ」といつて、始終さういふことを念頭においた。(松井簡治博士の芳賀博士追憶)による。

この他著書には前述の外に、「今昔物語集」「國文學史概論」「國文學史十講」「日本人名辭書」「座右年表」「日本家庭百科事彙」「筆のまに／＼」「筆にまかせて」等甚だ多い。氏の父は眞咲といつて多賀神社、湊川神社等の官司として令名のあつた人で、氏の國學者としての素養は少時この父翁に負ふところが尠くないと思ふ。

出 所

- 「筆のまに／＼」大正四年五月二十五日富山房發行。定價壹圓。作者の緒言に
- 一、書き散らしたものを一わたり集めて、はづかしげもなく「筆のまに／＼」と名づけた。
 - 一、筆で書いたものが大多數であるが、中には講演の速記もある。談話を人の筆記したのもある。
 - 一、しかし講演の多くは之に載せてない。
 - 一、大部分は青年に向つての談話である。
- とある。本課は卷頭第一を採録したのである。

要 旨

明治四十五年八月二十八日、作者が、明治天皇殯宮の御通夜に侍坐した時の感想文である。殯宮殿の御状況を窺ひ奉ると共に、作者の心境を味ひ、特に「御不例中六千萬の國民が熱誠をこめて御平癒を祈り奉つた。この貴い真心は明治天皇の稜威の下に我が帝國をして今日あらしめた原動力で、獨り日本國民の胸裡にのみ潜んでゐる真心である。宗教の感化から來たのではなくて我等の遠い祖先から受傳へたものである。その美しい貴い真心が、明治天皇の御不例に際して遺憾なく發揮せられたもので、まのあたり我が國體の美しさを示した生きた教訓である。」といふ作者のこの感想は、とりもなほさすその當時の國民の聲であり真心であることを十分に味はせたいのである。この真心は大正十五年十二月二十五日に神去りましゝ大正天皇の御不例中にも同じく發揮せられたことは國民お互に昨日のこととしてその感未だあたらしいことに屬するから、その心持をもととして大帝崩御當時を振り返らせたいと思ふ。

段 落

本課は作者の感想を思ひ出づるまゝに記した文であるから、強ひて段落を切るべき性質のものでもなからうが、便宜上切つておく。

一、八月二十八日……森嚴の氣身に迫る心地がする。(初から六頁の終りの行まで)

作者が自宅から東溜の間に落着くまでの叙述と感想追憶。

二、殯宮殿は……交代の時刻は移る。(八頁の一〇行目まで)

殯宮殿の御有様と作者の感想追憶。

三、東溜の間に……首肯かれる。(九頁の八行目まで)

東溜の間に休憩中の状況と、作者の恐縮した感想。

四、再び殯宮殿に……直に熱涙を催すのである。(一一頁の七行目まで)

再び殯宮殿に侍坐した時の殿内の御有様と、作者の感想追憶。

五、かくて交代すること三度……(終りまで)

御通夜を終へ宮闕を辭して歸路につくまで。

解 釋

【殯宮】 ヒンキユウ。又はアラキノミヤ。君

王の靈柩を假葬してある所。【廣辭】

【秋たつと】 「たつ」は、來る、到るの意があ

る。【廣辭】こゝは秋になるとの意。

【潔齋】 ケツサイ。ものいみ。きよまはり。

【廣辭】こゝでは身を清めて位の意。

【御夜伽】 オンヨトギ。夜中の伽侍坐。「伽」(一)相手となりて機嫌をとり徒然をなぐさむること。又、そのつとめの人。(二)看護すること。又、看護人。(三)寢所にはんべること。又、そのつとめの人。【廣辭】

【諒闇】 リョウアン。亮陰とも書く。天子の喪に服し給ふこと。みものおもひ。【廣辭】

【御車寄】 ミクルマヨセ。御車を寄せて昇降すべく張り出して設けたる口。【廣辭】

【煌々】 クワウクワウ。光り輝くさま。【天字】

【溜の間】 タマリノマ。(一)徳川時代に、江戸城中にあつた間、諸大名などの詰めて居た所。(二)諸人の詰所。【廣辭】こゝは(二)の意。

【名立たる】 名に立ちてあるの約。名に聞え

て。名立ちて。名に負ふ。【廣辭】

【豊明殿】 ホウメイデン。朝廷で御宴會を行はせらるゝ御殿。大宴會場。もと豊樂殿で行はせられた。

【しぶき】 重吹・繁吹とも書く。しぶかれて飛び散る細かい水玉。みづたま。【廣辭】

【大内山】 オホウチャマ。おほうち。御所。【廣辭】

【朝拜】 テウハイ。朝賀。(一)侯伯臣僚の朝参して天子におよろこびを申すこと。(二)古昔、正月一日辰刻に天皇大極殿に出御ましまして行はせられし公事、群臣皆禮服を着してその位に列し、天皇の高御座につかされたまふとき、侍従宣命を宣して、群臣再拜す、奏賀

者拜禮の旨を奏し、奏瑞者國々に於ける嘉瑞を奏す、群臣復た再拜す、次に舞蹈すれば、武官旗をふりて萬歳を稱し、めでたく儀式を終ふ、儀終りて後群臣を豊樂殿に召して宴を賜ふを例とせり。【廣辭】

【天顔】 テンガン。天子のお顔。龍顔。【廣辭】

【咫尺】 シセキ。八寸と一尺との義。(一)近きこと。短きこと。狭きこと。(二)わづかばかりなること。いさゝかなること。【廣辭】こゝは(一)の意。

【正殿】 セイデン。(一)おもて御殿。(二)紫宸殿の異稱。【天國】

【神供】 シング。(一)神の供物。(二)護摩を焼く時、道場外に壇を設けて十二天並に諸鬼

神を祭ること。【廣辭】こゝは(一)の意。

【不例】 フレイ。いたづき。やまひ。(貴人にいふ。【廣辭】)

【大故】 タイコ。(一)父母の喪。うれへ。(二)おほいなる事故。(三)すておきがたき罪。【廣辭】こゝは(一)の意。

【現事】 ウツシゴト。意識してなすわざ。正氣のわざ。【廣辭】

【輦轂の下】 レンコクノモト。主上のまします都下。おひざもと。「輦轂」は、てぐるまのこしき。【廣辭】

【津々浦々】 ツ、ウラ／＼。到る處の邊土。

【神去る】 カムサル。かみ去るに同じ。高貴の人の死去すること。【天國】

【原動力】 (一)物體又は器械をして運轉を起

さしむるエネルギー、水力・風力・電力等これなり。(二)すべて物事を活動せしむる勢力。

【廣辭】こゝでは根本の力位の意。

鑑賞

極めて敬虔な文である。眞情が遺憾なく流露され拜しては偲び、偲びては泣いた作者の心持がまのあたり髣髴する。皇室を敬ひ奉る心は作者の家庭のあらはれである。「數ならぬ身のこの上なき光榮、潔齋して家を出ようとすれば、年老いた母を始として、幼き兒等までも、今夜は眠らずに御夜伽仕らうといふといふ」のでもわかると思ふ。

【民草】 タミグサ。民のつきつきに蕃殖する

さまを、草にたとへていふ語。あをひとぐさ。

【廣辭】人民。

【宮闕】 キユウケツ。宮門。又、禁中。【廣辭】

三若さ

作者

【高村光太郎】 タカムラクワウトラウ。明治十六年三月東京市下谷に生れた。彫刻の大家高村光雲

氏の男で藝術的天分を豊かにうけた人である。東京美術學校彫刻科を卒業し、後歐米に遊んだ。氏は彫塑家であると同時に、詩人文士としても有名である。詩集「道程」の外「印象主義の藝術」翻譯「ロダンの言葉」續「ロダンの言葉」等の著並に彫刻の製作が多い。「ロダンの言葉」は文そのまま、詩であり、大藝術家ロダンの眞を傳へたものとして高評を博した。

氏は又新譯ホイットマン「自選日記」(スペインマンデイズ)を金尾文淵堂から刊行して窘蹙状態にある米詩人トラウベルに捧げたことは近來の美談である。氏の近作は文藝雜誌「明星」に殆ど毎號載せられてゐる。

出所

「帝國新讀本」 芳賀矢一篇。東京富山房發行。

要 旨

「若き人々におくる言葉」である。生命の泉を掬めるだけ掬みとつて、自然のまゝにすい／＼成長させて行くところに、若さがある。よき個性の芽ばえは、一度傷つけると二度とは出ない。芽ばえが最も大事である。それには各己の自覺に訴へる外はないのだ。他日大きな人物になるのも、萎縮した人物になるのも若い日の心の持方、それは自覺一つにあるのだ。若い人々に親しみ深く物言ひかけた作者の意圖はそこにあると思ふ。

段 落

- 一、若いのはいゝ……あゝ、かういふ無自覺はほんたうに貴い。力強い。(一三頁の初に行まで)
- 若いといふことはよいものだ。常人はそのよいといふことにすら無自覺であるが、かやうに無自覺で居れる所こそ貴く力強い生活力を有してゐる證據なのだ。この文の前提。
- 二、若さの美德を痛感するのは……立身出世したリンカンは、決してそんな教を奉じたのではない。(一五頁の六行目まで)
- 1、若さの美德を痛感するのは寧ろ年とつてからである。若い時にはわからないのであるのだ、随つ

て若さの美德のみならずすべてに無頓著なだからとて自覺を促がしたのである。先づ自己の良心に問うて疚しくない清淨な道に進め。畢竟この世の中は清淨を望んでゐるのだから、自分の淨さを守ると同時に、人の淨さをも守れといふのである。(一四頁の三行目まで)

2、他人に過つたものがあつたら恕してやれ、自己の過は良心にあやまれ。尤も良心に恥ぢぬ行のみで進むとすれば色々のものと戦はねばならぬ時がある。その時の勝敗は良心に問うて見てわかることで相手を仆すか否かは問題ではないのだ。(一四頁の二行目まで)

3、立身出世や成功熱のみに憧れると排他的になり心がねぢける場合がある。これも氣をつけるべき事である。(一五頁の六行目まで)

三、若い人よ……(終りまで)

若い人よ、君達は自分の腕を十分に伸して明るい所を闊歩したいものだ。時には悩みもあらうが要するに清淨に向つて苦闘せよ、苦闘しても尙且つ永遠に明朗でゐられる純眞な心の持主となるには、若い時の精神的鍛錬が必要なのだ。

解 釋

【休息であるほど】 この「ほど」は、「くらゐ」の意。

【心が腕を伸す】 心を擬人し、人が歡喜に満ちると、両手を前にぐつと伸したくなるやうに、心がじつとしてゐられないで、その腕を思ひきり伸すといふのである。胸が躍動する形容。

【みづみづしさ】 瑞々しい。生氣に溢れて、生き／＼とうるはしく、つや／＼かなさま。「みづみづし」才徳・勇威あるさまなり。一説、「みづみづし」にて若く美し。古事記「美都美都斯くめの子らが。」萬葉集「見津見津四久米の若子がい觸れけむ、磯のかや根の枯れまく惜しも。」天國

【この世を救ふ】 この濁つた疲れた世に生氣を與へる。

【若さの美德】 若さそのものが持つてゐる美しい徳。「色々な意味でこの世を救ふ」點をさす。

【無自覺】 ムジカク。自分の位置や價値を自分で認めないこと。自分で自分の價値を意識しないこと。こゝは無心くらゐに解してよい。自知の反對。

【痛感】 ツウカン。痛切に感ずること。

【自分の内からの疚しくない慾望の云々】 良心に訴へて後暗くないやうな慾望であるならば、引込思案はよして、すぐさま實行に移るがよい。他に律せられるのでなく、自分自らよいと確信したことを、實行するところに若い人の特權があるのである。それでこそ、

始めて力強い生活力を有することになる。「疚し」ヤマシ。心中安からず。心なやまし。うしろぐらし。廣辭

【内の聲を聴く】 良心の命に従ふ。

【道德律】 法律に對する道德方面のおきて。

【淨さに敏感】 キヨさにピンカン。正義觀念の鋭いこと。清淨潔白に對する感受性の鋭敏なこと。

【人間本能】 人間が生まれながらに有してゐる性能。即ち經驗又は教育によらずして自然に要求し自然に行動する順應的性能、その反射運動と異なるは、比較的複雑にして且意識的なるにあり。廣辭 尙「日本百科大辭典」所載のものを記して見ると、「經驗又は教育に

よらずして生來生物に具はれる一定の順應的傾向。其の反射運動と異なるところは比較的複雑にして且意識的なることに存すと見るべし。例へば、瞬間の運動の如きは反射運動にして、吾人はこれに就いて殆ど何等の意識を有せず。僅に瞬したる後に於て其の結果を意識するに止まる。然るに生殖の本能の如き、吸乳の本能の如き何れも意識的にして且多少其の目的をも自覺す。動物の本能的動作に於ても、例へば鳥の巢を作り蜂の蜜を貯ふるが如き、其の動作全體の目的に就いてはこれを意識せざるも、其の複雑なる動作を組立つる一々の動作に於ては、瞞げながら其の目的に就いて多少の意識を有す

るものゝ如し、學者の中には本能的動作を以て比較的簡單なる反射運動の結合して一體となれるものに過ぎずと解する者あれど、かくの如きは寧ろ事實を誤れるものと見ざるべからず。本能の起原に就いては、從來神の生物に授與したる一種の能力にして、初めより完成せる定形を有するものと解釋したることありしも、かくの如き見解の非科學的なるは固より論を待たず。本能は生物進化の長き時日の間に漸次形成せられたるものなり。但しかにして完成せらるゝに至りしかに就いては、學者の間に異論ありて未だ定説を見るに至らず。其の主なる解釋を別ちて三となす。其の一は、本能的動作は生物進化の最初に於

ては睿智によつて行はれしも、反覆と遺傳との結果漸次神経系統の傾向として固定せらるるに至り、其の結果として何等の經驗をも待たずして目的に合へる動作を機械的に行ひ得るに至りしものと解す。これを睿智失跡説 (Theory of lapsed intelligence) と稱す。生物學者コープ (Cope) 心理學者ヴァント (Wundt) の如きは斯説の代表者なり。其の二は、本能を以て外圍に對する反射的順應の漸次蓄積せられたるものにして、自然淘汰の理によりて保存せられたるものとす。之を反射説 (Reflex theory) と稱す。スペンサー (Spencer) 及びヴィスマン (Weismann) の如きは斯説の代表的主張者たり。其の三は、第二説を多少變更したるもの

にして有機的淘汰説 (Theory of organic selection) と稱す。モーガン (Morgan) ボルドウィン (Baldwin) グロス (Gross) スタウト (Stout) 等の主張するところなり。其の要旨は意識的たると無意識的たるとを問はず。或種類の調節は極めて不完全のものと雖も、本能の確立せらるゝに至るまでは、其の種の生命を維持する役目をなすものにして、かくして其の間に於て構造上に於ても、機能上に於ても、其の生物の永久的屬性即ち完全なる本能となるべき機會を與へらるゝものなりとす。故に此の説によれば有機體の本能の形成せらるゝに當りては睿智の助を借ることを認むと雖もすべての有用なる順應的動作がかゝる睿智より出づるもの

となさず却つて偶然の生理的調節よりも生ずることを認むるものなり。

本能の形式は、一旦固定したる以上は絶対に變化せざることを説く者あれど、かくの如きは事實に反するものにして、偶然の影響によつて本能そのものゝ抑壓せられ、助長せられ若くは變形せらるゝことあるは否定すべからず。例へば、雛鶏は食物を啄む本能を有すれど、常に苦味を帯びたる食物を與ふるときは該本能は抑制せらるべく、又雛鶏は常に運動する物體を追跡する本能を有し、而して其の運動する物體は普通の場合に於ては其の母たる牝鶏なるが、もし始めより母鶏を遠ざけ置く時は人の足跡に追隨する事ともなるべく

もし又全く運動するもの皆無なる場合には、其の本能は全く消失するに至るべし。而して人類の本能は動物の本能に比較する時は、一層融通性に富み偶然的影響又は睿智のために變形せられ易きが故に、本能の發現する時期に於て、適當なる指導を要すること大なり。】

【**敏感さを守るがいゝ**】 敏感な性質を失はないやうに痲痺させないやうに守つてゐよ。

【**自然の植ゑた本能**】 自然の與へた本能。

【**人の淨さを守る**】 自分の清淨さを失はないやうにするのは若い人々の自分自身に對する第一の務であるが、同時に他人の清淨さを失はせないやうに、これを尊重する必要がある。

【**自分の過を知つたら云々**】 過は、人間の本性ではない。一種の通り魔であるから、さういふ場合は、本能に對してあやまらねばならぬ。こゝの「自然」は本性と解すればよい。

【**氣力**】 物事に堪へ得る精神の力。元氣。根氣。生氣。

【**心おきなく**】 心遣ひすることなく。心配なく。遠慮なく。

【**君獨得の特質**】 個性。

【**良心**】 リヤウシン。吾人が物事の道德的價値を辨別し、これを善とし又は惡とする本來の心。吾人が自己行爲の道的價値を自覺し、これを善とし又は惡とする心。廣辭「日本百科大辭典」には、「道德的行爲に關して是非正

邪を辨別する能力。かゝる特種の能力の存在は、常に一般人類に共通なる後悔の感情を以て證明するを普通とす。而して此の能力の存在は、殆ど人類共通の事にして、古今未だ絶對に良心的發作を見ざるものなしとせらる。唯一方に於て、良心の性質が其の社會的環境によりて左右せらるゝこと、例へば現今文明人の道德とするものも偶々未開人にありて不道德の如く直覺せらるゝことによりて知るべきなり。而して以上の良心に關しては、古來倫理學上、其の説區々として一樣ならず。これを大別すれば、一は先天説又は生得説、他は經驗説とす。前者の生得説として、例へば道德的感官説を唱へて善惡是非は

特種の内部的感官によりて知らるゝとなすものあり。又單に獨斷的に良心の先在を主張し、仁愛・正義・秩序・誠實等を直覺的に認定し得るものなりとするあり。或は亦特に道德的判斷能力の普遍的法則を直覺するものなりとなすカント(Kant)の如きものあり、其の學說種々なりと雖も、要するに、良心を非經驗、同時に生得的又は先天的と見做す點に於ては皆相一致せり。これに反して後者經驗説は、前者の如く良心の獨斷的存在を許さず。すべて良心及其の作用を以て經驗の結果なりと見る説なり。此の經驗説に屬する學說も亦區々なりと雖も、強いて區分すれば二となす。一は良心も心理的に解して觀念聯合より生ずる

ものと見るもの、いはゆるイギリスの聯想學派説の如きそれなり。他は進化論的立脚點より良心の遺傳を主唱するもの是なり。」

【君が君の良心に従へば云々】 良心の命するまゝに清淨な道に進まうとすれば一方には邪道に陥れようとする誘惑其の他正義を曇らせる色々の障碍と戦はねばならぬといふのである。

【後楯】 ウシロダテ。(一)後へこだてに取るもの。後方の防禦。(二)うしろみ。うしろおし。(後援)こゝは(二)

【自然がついてゐる】 障碍と戦ふ場合に、自然が後ろに控へてゐて力添をしてくれる。さう思つて居れば必ず障碍に壓倒される事な

く、ほんたうの勝利が得られる。

【立身出世教】 かくすれば立身し、かくすれば失敗するといつたやうに唯榮達のみを目標として、人間としては他にもつと大きな、人間らしい仕事のあることを忘れた個性も何も無視した杓子定規な處世の教。世間にはこの教のみを金科玉條とする向が實際に多い、あまりに物質主義に囚はれたあさましい考へ方であるが、現代には殊にこれが多い、情ない事である。少くとも自由な若い人々にはこんな考へ方を起させたくないものだ。

【成功熱】 成功したい〜と熱に浮かされたやうになること。一種の熱病に譬へていふのである。

【進展意思】 進歩發展したいと思ふ心。

【罨】 ワナ。(一)禽獸を捕ふる一種の装置。

(二)詭計を設けて人を陥るもの。罨辭

【魂を傷つけられる】 立身出世教や成功熱の捕虜になると、排他的になり、くだらない競争意識に燃え、名利にのみ汲々として純真な心を荒ませ、終にねぢけた人間になる。

【リンカン】 (Abraham Lincoln) 北アメリカ合衆國第十六代の大統領。ケンタッキ州に生る。初め父と共にオハイオ州にて農業に従事し、後、出でて書記、店員、郵便局長等の職に就きしが、遂に政事家たらんとして法律を研究し、漸くその名を知らるゝに至る。この頃合衆國に於ては奴隸廢止問題に就て國論沸騰し

【美しい心事】 リンカンの家は極めて貧しかつたが、勞働の餘暇に地理・歴史・聖書の類

を読み、二十三歳の頃には、すでに相當の常識が出来てゐた。その後義勇兵となり、商人となり、測量技師となり、田舎の郵便局長となり、州會議員となり、最後に辯護士となつて始めて頭角をあらはした。彼は、その人物が眞面目で率直で、同情哀憐の心が深く、夙に奴隸廢止説を主張してゐたので、彼が大統領に就職したら、いかにしても憐な奴隸を自由の身にしてやるだらうと誰も信じてゐた。

鑑賞

平易明瞭で、しかも教へられるところの多い文である。陋習に捉はれないで、自分の信ずる道を敢に進んで行く、そこに青春の意義がある。青春はくすぶつて通るべきでない。勉強のしどき、修養のしどき、運動のしどきである。いやにませた小柄巧な立身出世教などにかぶれる時ではない。三年生と云へば最も生氣の溢れた時である。新學年のこの期に於ける學生における言葉として最もふさはしい文であらう。若さの尊さ、純眞の價をしみじみ飲み込ませ度い。

(國民西洋歴史)

【惱む時には】 いはゆる「明日の惱は明日
惱まん」である。

【明朗】 メイラウ。あきらか。ほがらか。

【廣辭】

【永遠に若い魂となるには】 永遠に純眞な
心の持主となるには。老年までもかはらぬ眞
直ぐな心の持主となるには。

四 若葉の雨

作者

【薄田泣菫】 ス、キダキフキン。大阪毎日新聞社員。名は淳介、明治十年五月岡山縣淺口郡連島町に生れ、殆ど獨學自習によつて新詩人・新文士となつた。詩集「暮笛集」「ゆく春」「二十五絃」「落葉」「白羊宮」「子守唄」「泣菫詩集」等の外、近來は「茶話」「新茶話」等の隨筆を出したが、いづれも上品なしやれに富んだ作である。輕快なしやれに缺けてゐる我が國の今日、かゝる上品でしかも輕快な諷刺諧謔に富んだ作品のあるのは我が純藝術界に喜ばしいことである。
岩城準太郎氏曰く、

泣菫の詩風は大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其の可憐なる情緒を抒ぶる一面のみを傳へて、「天馬」「鶯の歌」「深林の逍遙」の高渾なる情調に及ばず。唯、「石彫獅子の賦」の一篇長鬣背に巻き、廣胸強く張りて、夏の日盛り、光を浴びて立ち、威風百獸を憎伏すべき石彫獅子の雄姿

を寫し、進んで藝術の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が「一葉舟」の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試みをなし、「暮笛集」の八六調以外、種々變化ある格律を用ひぬ。但し一句一行概ね短く、晚翠の漸く長からんとするに反し、漸々短からんとする傾あり。之を學ぶ者、青年の間に少からざりき。

と、こは明治三十二三年頃に於ける氏の作風であつた。

又曰く、

翻つて思ふ。我が新體詩の本流は何所をかける。曩に空想的戀愛に酔ひ、中頃官能的戀愛に耽りしもの、急速なる文明の進歩に伴ふ現代人の複雑なる心情に適合すること能はず。暫く理想の満足を過去世界に求めて鈔事詩史を試み、或は之を現在のまゝの娑婆世界に求めて逍遙の「新曲浦島」露伴の「出廬」に見えし如き理想即現實の思想を歌ひしも、強烈なる自意識の壓迫に苦める現代青年、最近西洋文明の新潮に知己を見出でたる現代讀詩社會にとりては、前者は美しき夢の世の如く、自己と相距ること餘りに遠く、後者は諦め過ぎ悟り了れる聖者の如く、自己と相背くこと餘りに甚し。是に於てか、憧憬煩悶、遂に靈を呼び神を呼び、一種の神秘的冥想的の詩風を形作るに至

れり。「二十五絃」(三十八年)の作家泣菫、「獨絃哀歌」(三十六年)の作家有明、「夏花少女」(三十八年)の作家林外、「夕潮」(三十七年)、「悲戀悲歌」(三十八年)の作家泡鳴の如きはこの作風を代表せる者なり。

又曰く、

思想界の激變に附隨して必然的に起る最初の現象は、文藝界に於ける主觀主義なり。抒情主義なり。……新體詩に在りては叙事の一體遂に發展するを得ずして、泣菫・有明・林外・泡鳴、皆主觀冥想の抒情的詩調を取り、特に最近の述作に於て神秘空靈の新詩境に突入せるを見る云々。

又曰く、

海外最近文學輸入の結果三十七八年の交に至りて遂に象徴主義の形を取りてその新面目を現し來れり。……曩に暗中摸索唯漠然と神秘を戀ひ空靈を慕ひ、求めて得ざる動搖の聲を揚げたりし人も、茲に至りて稍明かなる道途を見るを得、聊か之に安住して向ふ所を定めぬ。こゝに於てか詩界は、從來模倣したりし「暮笛集」(三十二年、泣菫)の詩風を棄て、一轉して「春鳥集」(三十八年、有明)の新傾向に就き、泣菫の如きも、從來の古典的情緒的作風より、漸く轉じて象徴派的色彩を帯ぶるに至れり。之を當時の詩集「白羊宮」(三十九年、泣菫)に徴するに、自然物特に動植物

に感興を寓せて、其の中おのづから人間生活の趣致を象徴せんとし、色香味觸の官能印象を其の上に見出でて、各々の特色を感覺的に表現せんとする傾向著しきものあり、所謂自然の中に我を感じ我の中に自然を見んとする象徴詩派の面影を存す。「零餘子」「日さかり」の如きは蓋し此の方面の代表的作品なるべし。(明治文學史)

出 所

「太陽は草の香がする」

一冊。大正十五年十二月十五日アルス發行。定價貳圓貳拾錢。著者の序に曰く、

この集には、大正十四年の春から同十五年の春にかけての私の述作を収めました。

談話室で親しい友達と語つてゐるやうな氣持で書きたいと思つて、こんな文體を試みました。手が不自由なので、筆記に家族の者達を煩はしましたから、文字の使ひ方に前後同じでないところがあります。この間始終外光に親しみ、露西亞のある詩人が言つたやうに、太陽に草の匂を嗅ぐことが出来たのは、私の幸福でした。

とある。凡て六十一の述作から出来てをる。本課はその中の「若葉の雨」と題するものゝ一部である。

要 旨

上品な談話のやうな調子をもつた輕妙な筆致で、晩春・初夏の雨の對象として、ひき蛙や蟹や雨蛙や蝸牛を奇警な譬喩と巧妙な形容とをもつて、面白く描寫してゐる所を味はせたい。又自然觀察にあつて特色ある一種の見地を暗示し、いかにも文學者らしい行届いた觀察と繊細な感情が、文を貫いて閃いてゐることに注意させたい。その他自然描寫を擬人法で試みた爲に文が非常に主觀味を帯びてゐることや、想像の巧みさ、比喩の新鮮さにも注意させたいと思ふ。

段 落

一、最初の一行。

この課の前提である。

二、この頃の雨は……味はれない快活さです。(一七頁の三行目まで)

若葉の頃の雨、春さきの雨、梅雨時の雨、晩春の雨とを比較してその感じを書いた。

三、この快活さとこの明るさに……雨はいつ霽上らうかもわからないのを知つてゐますから。(一九頁の終りの行まで)

心なく降る雨、そこに季節のもたらす明るい快活な感じがある。そしておのづからそのかされて

這出るひき蛙・蟹。雨蛙・蝸牛、かくて美しい詩的興味を起させるのである。

四、夜がふけて……(終りまで)

浴槽で聞く夜の雨。

解 釋

【梅雨】 ツユ。我が國夏期に於ける霖雨。毎年六月中旬より七月上旬に亘り、奥羽以西の地は連日陰曇にして雨勝ちなるを常とす。これを俗に梅雨と稱す。支那南部にては梅實の黄熟する頃に降り始むるゆゑに梅雨と稱すと云ひ、又梅は微なり、この霖雨に會せば物みな微るを以てかく名くと云ふ。或は梅は霏に通ず。この陰霖に遭へば霏敗するもの多きが故なりともいふ。いづれが眞なるか遽に断定すべからず。梅雨のある地方は、西は九州よ

り東は奥羽南部に至るまでにして、奥羽以北はこの現象顯著ならず。朝鮮にては南半にこれを見る。琉球列島と臺灣とには梅雨なく、支那北部及滿洲にてもこれを見ず。唯、支那長江域には稍、顯著なり。勿論年によりこの區域に多少の狂ひを生じ、奥羽北部及北海道にも梅雨がかれる現象を見ることあり。ばい
ろ。さみだれ。【百科】
【憂鬱】 イウウツ。氣の晴れやらずむすぼるること。きふさぎ。【廣辭】

【充溢れて】 ミチアフれて。

【濡れ】 ヌれ。

【空の靈と草木の靈とのさゝやぎで】 隱喩法を用ひた書き方である。直喩法にする
と、恰も空の靈と草木の靈とが低い聲で話し合つてゐるやうで、となる。「靈」は、たましひ・靈魂の意。何れも空や草木に靈魂のあるものと見た擬人法である。「さゝやぎで」の次に、「随つて」の語を補うて解すべきであらう。

【さゝやぎ】 は、聲低く言ふ。耳語す。【大國】
【肌さばりの柔かさ】 身にふりそゝいだ雨の感じを想像して書いたのである。

【溜息のかぐはしさ】 擬人法。若葉のはく

ためいきの香のよさ加減。これは若葉の中を逍遙すると一種のよいかをりが放たれてゐるのを彼の溜息と見たたのである。

【溜息】 タメイキ。うれふる時又はもだゆる時などに、溜めて後につく息。(大息)【廣辭】
「かぐはし」 香細^{カク}しの義か、香ひよし。かうばし。かんばし。【大國】

【首筋】 クビスヂ。頸筋とも書く。頸の後部。えりくび。【廣辭】

【腋の下】 ワキのシタ。

【滑り】 スベリ。

【揺ぶつて】 ヌスぶつて。

【そゝのかされて】 (一)その氣になるやうに勧めこまれて。誘ひすゝめられて。慫慂せ

られて。(二)おだて悪しき方へ勧め導かれて。教唆せられて。**天國**こゝは(一)。

【ひき蛙】 ひきガヘル。蝦蟇ガマのこと。

【どうかした拍子に】 どうかしたヒヤウシに。どうかしたはずみに。「拍子」(一)音楽にて、楽曲進行の時間を測定する単位、又、均等に反覆する楽曲進行の小區分。(二)音楽にて、笛・大小鼓・太鼓の奏樂、又、謡曲を謡ふ聲音の節度。(三)音樂の節を助けて調子を取ることに。(四)しほ。をり。(五)はずみ。とたん。こゝは(四)(五)。

【酔ひどれ】 エひどれ。酒に甚しく酔ふこと。又その人。

【不器用】 ブキョウ。わざのつたなきこと。器用ならざること。てぎはのよからぬこと。

きはめのしるし。證據。(三)あばた(痘痕)の隠語。こゝは(一)。

【自尊心】 ジソシカ。(一)自ら尊大にかまへる者。自らたかぶる者。(二)自尊する者。己の品位を維持する者。**天國**こゝは(一)。

【孤獨性】 コドクセイ。衆と離れてひとりであたる性質。

「孤獨性をもつてゐるところはよく似てゐるやうです」(一九頁の一行——二行目)の次に原文には「むかし厭世哲學者のシヨベンハウエルは、イタリイの都に旅をして、ところの人達——わけて美しい婦人達が自分に對しては一向冷淡なのにひきかへて、同じ時同じ都に來てゐた厭世詩人のバイロンに對しては、

【廣辭】 不細工な。

【昔馴染の一茶】 一茶に關する詳細は二十課參照のこと。一茶の句に「瘦蛙負けるな一茶こゝにあり」等があるので昔馴染と言つたのである。

【彼の魂は長年の悲しみと苦しみとの爲にねぢけてゐる】 一茶は幼少の頃繼母に苦しめられ、その後も不遇の爲、一生苦しみ通し、自然心のひがんだやうな句を多く残した。

【甲羅】 カフラ。「羅」は、接尾語。

【横柄】 ワウヘイ。驕り高ぶること。**天國**傲慢なること。**天國**

【極印】 コクイン。(一)金銀・器物等の偽造を防ぎ、且つ品質證明のため、物品に打記する印影、又は文字。こつくい。こくい。(二)

まるで王侯をもてなすやうな歡迎ぶりなのを見て、ひどく機嫌を損じて、そこそこに旅をひきあげたといひますが、蟹とひき蛙とはどちらも癖もの揃ひで、不器量なことにかけてはいゝ取り合はせですから、お互に機嫌を悪くしあはないですむことです。」とある。

【聞えた】 有名な。

【獨唱家】 ドクシャウカ。自分一己の肉聲で歌曲を歌ふ者。ひとりで歌ふ者。

【沈黙家】 チンモクカ。おちついて口數をきかぬ者。だまりこみて言を發せざる者。**廣辭**

【靈場】 レイヂヤウ。靈地に同じ。神社佛閣などある尊き地。靈驗あらたかなる地。**天國**

【巡禮】 ジュンレイ。順禮とも書く。(一)**天國**

國を巡りて、處々の靈場に參詣すること、印度より支那を経て我が國に傳はれる風俗にして、これ等の靈場に參詣せば、功德を受け冥福を得べしとの信仰より出でしものといふ。印度は佛教の發生地なれば殊に盛んにして、西洋の昔時にも、亦キリスト教徒の間に盛んに行はれたりといふ。(一)處々の靈場を順禮する人、我が國に於けるものは、古來その行

鑑賞

この文は、題の示すごとく「若葉の雨」を描いたもので、若葉の頃の雨の特色である。靜かな親しみのある感じを出すことを主眼とした文章である。そしてこの點に於て成功してゐる。故に文全體の氣分もゆつたりとして輕快な散文詩の觀がある。最初に、

「野も山も、青葉・若葉となりました。」とぼつとり十四字だけ簡單に書き出して行を改めた所など、これだけで全體の氣分を髣髴させる何物かが含められてゐるやうに思ふ。物は對照することによつて

一層特に云はうとする事が明瞭になる。こゝでも若葉の雨を味ふにはどうしてもその前後の雨の情趣と比較する必要が起つて来る。

「晩春の頃の雨は、明るさと、快活さと、また暖さとに充溢れて、銀のやうに光りかがやいてゐます。」

銀のやうに光りかがやいてゐる、といふ所に晩春の頃の感じがはつきりする。「明るさと、快活さ」とあるのが特に若葉頃の氣分を表すにふさはしいことは云ふまでもない。次の「ひそ〜と聲を立てて」といふのがこの頃の雨を表すに最もふさはしいのと同じである。

「この頃の雨は……たまらなさうに身を揺ぶつて笑ひくづれてゐるらしく見えるのも、この頃の雨でないとい味はれない快活さです。」

何といふ巧な表情のしかたであらう。この擬人法を用ひて、遺憾なく若葉の頃の雨を云ひつくしてゐると思ふ。そしてこゝは非常に感覺的な觀方である。

次には作者獨得の諧謔的な筆でこの季にふさはしい無心な生物を點じて一層詩的興味をそよつてゐる。「ひき蛙」を酔ひどれに擬人した所は特に滑稽味がある。その他蟹であらうが、雨蛙や蝸牛であらうが、巧な擬人法のうちに各自の個性が浮び出て面白いと思ふ。

装殆ど一定し、普通に笈摺オヒズリを背にし菅笠スゲガサを戴き、脚絆・甲掛カウカケを着け草鞋を穿ち、詠歌などをうたひて人の門に錢を乞へり。西洋にても中世以後は一定の制服を着し、一定の記章を帯び、頭巾・外套・杖・水筒を携へ、帽子の前面の縁を折りたるものを戴くを常とせりといふ。廣辭 こゝは(一)。

【浴槽】 ヨクサウ。ゆあみするゆぶね。廣辭

「夜がふけて……」といふ最後の一節は、よく全體をひきしめた非常に力のある文字である。この一節によつて、靜に雨を味ふ氣分があらはれてゐる事と思ふ。

参 考

一、修辭法について

修辭學の中心骨髓をなすものは、凡そ基礎論・修飾論・文體論・組織論の四通りあるが、こゝには修飾論だけを述べることにする。

修飾論の中心は詞姿の論である。詞姿とは平凡普通の言表法以上に出でて、趣味・光彩・勢力を添へる言表法をいふのである。

詞姿の數は一定して居らぬ。ギリシヤ、ローマ以來東西の學者の説いた詞姿を細かに擧ぐれば三百餘種にもなるであらうが、試みに古今に通じて重要視された最も主なる詞姿を擧げて見ると、

1. 直喩、喩へる物と喩へられる物とを別けて比較するもので、「譬へば」「恰も」「如し」「似たり」等の比較語の附くのが普通の形式になつてゐる。例へば

人生朝露の如し。

富貴浮雲に似たり。

2. 隱喩、表面上譬喩の形式を没して、譬へるものと譬へられるものとを一つにした修飾である。形から云へば「如し」「似たり」の關係を「なり」にして了つたので、そこから「煎じつめた直喩」とも云はれる。例へば

艱難汝を玉にす。

三界は火宅なり。

百姓を魚肉にす。

額には志賀の浦波を疊み、頭には都の富士の雪を戴く。

借金は儉約の鋒を鈍らす。

3. 諷喩、文字の表面には本旨を全く隠してただ譬喩のみを現はし、譬喩を透して本旨を察せしむる所に味はひのある修飾である。例へば

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らむや。

鷓鴣林シヤウイに巢ふ一枝に過ぎず、偃鼠ハツカクシ河に飲む腹に滿つるに過ぎず。

4. 擬人、或は活喩ともいふ。生命の無いものに生命を與へ、動かぬ物を動かしめ、言葉なきものに物いはしむる文飾、言ひかへれば、無生物を生物化する文飾である。例へば

月は雲井に寝しづまり、松は嵐に斬して……。

白露や無分別なるおきどころ。

初めには慾心の誘惑することく後には良心の呵責恐ろし。

源五郎鮒・土用三郎・坂東太郎(非情物に人間の名を與へたもの)

秋風心して吹け。

本課について云へば、

春さきの雨は無言のまゝ……。

この頃の雨はひそくと聲を立て……。

その他一々枚擧に違がない。

5. 誇張 事物を實際より誇張して、過度に大きく、或は過度に小さく言ひ做すもの、聞く者、思ふ者の感じを主として、情の眼に映つた通りをそのまゝに言ひあらはす文飾である。例へば

燕山の雪片大さ蓆の如し。

涙が瀑布のやうに流れる。

青天を展べて紙となし、海水を硯にそぐとも、我が情を盡くすべからず。

日月に鞭つて星辰を叱す。

蚤の足音蟻の囁きまで聞く。

白髪三千丈。

6. 現寫 過去に起つた事、將來に起るべき事を現在目前の如く言ひなす文飾で、形式から云へば「き」「けり」「ぬ」「つ」等の過去の動詞、「らん」「べし」等の未來動詞を用ひるべき場合に現在の動詞を用ひて、遠きを近くし、薄きを濃くし、隔世或は未現の朧ろなる事柄を活躍せしむるものである。例へば過去の戦を記すに現寫法を用ひるもの

天明けたり、曉氣清し、全軍肅々として敵壘に向ふ、午前五時を報ず、進め撃て！の命令あり、喇叭の聲起る。

未來を現在に言ひ做すもの、

首尾よく露國を破りおほせようか、西洋人は日本を研究し初める、我れの長所を見出す、我れを學ぶ、遂には我れを凌駕せんとする、是に至つて吾等の使命は一段と重くなる。

7. 抑揚・頓挫 一本調子に平靜に書かないで、文勢を揚げてはおろし、張つては弛め、抑へては放つて、變化をつける文致である。漢文家の好んで説くもので、對照の味はひを現はす一種の趣致であ

る。

8. 引用 故事・古語などを引いて我が文に重みをつけ、文章の内容を富まし、趣致を豊かにする文飾である。

9. 舉隅 一隅を擧げて四隅を知らしめ、一部分を示して全體を察せしめて、文章に餘裕あらしめるもので、提喻、換喻などいふ語も用ひられる。例へば

ハイカラを着けた男をハイカラといひ、簪を着た男と笠を冠つた男とが並んで行くといふ事を「五月雨や物語りゆく簪と笠」といふ類。

船こぞりて泣く。

チヨン鬻がかうくした。

10. 反語 あてこすりの爲めに眞意の反對に言ひなすもの。例へば お利巧様。(愚者に對して)

御目出度くなる。(死ぬること)

呆れもしねえ。(呆れること)

11. 漸層 小より大に、低きより高きに、弱きより強きに、淺きより深きに、次第に調子を高めて行

くもの。例へば

一人奮死せば以て十に對すべし、十以て百に對すべし、百以て千に對すべし、千以て萬に對すべし、萬以て天下に冠たるべし。

蓋し吾人が今日憂ふる所は、力の不足にあらず、力を養ふの不足なり、力を蓄ふるの不足なり、力を旺にするの不足なり、力を一にするの不足なり。

12. 反覆 同じ語句を繰返して趣味を高め、感興を添へるもの。例へば

松島やあゝ松島や〜。

雀の子そこのけ〜お馬が通る。

梅の花赤いは赤いは赤いのは。

13. 對偶 調子の反覆ともいふべきもので、調子の似よつた文句を並べて並行・對立の美を成すもの。例へば

好事門を出でず、悪事千里を走る。

花は櫻木人は武士。(五十嵐力氏中等新作文)

二、作者の詩集について、

暮笛集 明治三十二年大阪金尾文淵堂發行。
ゆく春 明治三十四年同上。

巻頭の「牧笛」は、作者がテオクリトスやキルギルの牧歌を愛讀してゐたから、あのやうな草の香と、野の悲しみとを歌つたのである。「あゝ杜國」九首は、當時の時事に憤つた詩で、若い時によくある、物に激して拳骨をふり廻すといふ氣持の表現。

「南畝の人」は、農夫の生活の平和と苦闘と悲哀とを歌はうとした試み。

「石彫獅子の賦」は、大阪横堀に近い、某石彫工場で落想を得ての作。

二十五、 明治三十八年、春陽堂發行。大阪・京都・郷里岡山の三地方に關聯した作品を輯めてある。

巻頭の「公孫樹下に立ちて」は、三十四年十月、作州津山に旅した折、近郊の大銀杏が風に吹かれて突つ立つてゐるのを見て出來たもの。「雷神の歌」は、三十六年一月、作者が大阪内本町の文淵堂の二階に病臥してゐる時、激しい雷鳴があつたのに感情が動いて、京都加茂神社の傳説と結び合せて出來たもの。「金剛山の歌」は、大阪谷町法華寺に住んで居る頃、葛城山の山顛が朝日をうけて金色に輝いてゐるのを見受けての作。「天馳使の歌」は、伊弉諾・伊弉冊の黄泉比良坂の傳説と、橋立傳説と、比治山の羽衣傳説とを結び合せて、永遠の女性の慈悲を歌つたもの。

しら玉姫 明治三十八年文淵堂發行詩文集で、詩は七篇、何れも民謡體のもの。

白羊宮 明治三十九年同上。

白羊宮といふのは、日が春の白羊宮に位する時、天地開闢したといふ言ひ傳へによつてなづけられた。ブラウニングの("Oh, to be in England")ではじまる例の絶唱を想ひ浮べながら生れた作品。とりわけ奈良の西の京や、法隆寺、龍田のあたりは作者の已み難い憧憬の地である。「望郷の歌」は、ゲーテのウキルヘルム・マイステルにあるミニヨンの歌を想ひ浮べながら、京都の四季のうつり變りを歌つたもの。

十字街頭 白羊宮の出版後から明治四十一、二年へかけての作品。街頭は、京都四條寺町で見た小景。「をけら詣」は、極月大晦日の夜、京都八坂神社に、元朝の齋火を貰ひに參詣するものが、道の摺違ひに互に見ず知らずの男女に、口を極めて悪態を吐き合ふ事實を辨へてゐないと、何を歌つたのか見當がつかかねる。「葛城の神」は、明治三十九年七月頃の早稲田文學に載せられたもの、役の小角が葛城山へ石橋を架けようとして、海内山神の合力を求めた時、たつた一人、葛城の女神が容貌のみにくいのを他にみられるのを恥ぢて、晝間出合はなかつたので、結縛したといふ傳説に因つて作意を構へたもの。

子守唄 明治四十一年頃の作。クリスチナ・ロゼチの「しんぐ・さんぐ」を読んで試みたもの。大正六年十二月短いお伽話と一緒に取纏めて富山房から發行。

泣、葦、詩、集 大正十四年二月二十五日大阪毎日新聞社發行。「十字街頭」「白羊宮」「二十五絃」「白玉姫」「ゆく春」「暮笛集」「子守唄」の七篇を載せてある。定價五圓。

奥繁三郎氏の母親は九十近くの老齡で、今だに達者であるが、孝行者の奥氏は、東京へでも旅をする時には、一番に母親へ挨拶に往く事を忘れない。すると母親はきまつたやうにいふ。

「東京へお行きやす言うて、誰ぞおつれでもおすのかいな。」

「いゝえ私一人です。」

「あんた一人で東京までようお行きやすか。」

と母親はもう涙を一杯に浮べて、

「繁もかあいさうに、おつれがちつともでけよらんのかいなあ」とそつと溜息をする。

(中 略)

親といふものは有難いもので、神様が人間を罪人扱ひにするのに比べて、親はいつ迄もその子を子供扱ひにする。親が神様になつてはいけないやうに、神様も親になつては可けないが、親には神様が眞似の出来ない長所がある。それは子供の爲には「馬鹿」になるといふ事で、神様より人間の偉いところは確にこゝにある。丁度「愚痴」を持つてゐる女が、それを持合はさない男より強いやうなものだ。

——薄田泣葦茶話——

五蛙の聲

作者

【長塚節】 ナガツカカカシ。明治十二年四月三日、茨城縣下總國結城郡岡田村國生に生る。三歳にして「百人一首」を誦誦し、「いろは歌」を確實に讀む。五歳にして國生小學校に入學す。十七歳の頃より腦神經衰弱にかゝり翌年水戸中學校を退く。この頃より和歌を作る。明治三十一年(二十歳)二月より五月に亘りて、竹の里人正岡子規「歌よみに與ふる書」「人々に答ふ」「百中十首」等を新聞「日本」に連載す。節、後に當時の事を自ら記して曰く「歌よみに與ふる書といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でたまらないので、丁寧に切り抜いておいて頻りに人にも見せびらかした……百中十首が出ると初めは變なものだと思つたが段々面白く感じて來てたうとう眞似て見るやうになつた……」と。明治三十三年(二十一歳)三月二十八日初めて東京根岸に正岡子規を訪ふ。三十日再び子規を訪ふ。席上「竹の里人をおとなひ」十首を作り、「日本」に掲載せらる。以後年數回

上京して時に月餘滞在、その頃殆ど隔日に子規を訪ふ。三十四年(二十三歳)萬葉集及記紀の歌を研究し、多く長歌を作る。作歌は「日本」に發表す。三十五年四月より「心の花」に「うみ芋集」を連載す。五月、四月末には京に上らむと云々。九首を「日本」に掲載。九月十九日正岡子規逝く。三十六年(二十五歳)一月、「狂體十首」を「日本」に發表す。六月より根岸短歌會にて雜誌「馬醉木」を發行す。伊藤左千夫・香取秀眞・結城素明・岡麓・平子鐸・蕨眞・安江秋水・森田義郎等共に編輯員たり。「馬醉木」創刊號に「萬葉卷の十四」を發表す。三十八年(二十七歳)五月二十二日發程房州を一周し、六月五日歸郷、途中、清澄山八瀬尾の谷に炭焼を見一週日を送る。八月十八日發程、房州より甲斐・諏訪・木曾・美濃・近江湖畔・京都・丹波・丹後・攝津・伊勢に遊び九月十三日歸郷。三十九年(二十八歳)七月「馬醉木」に青果の號を以て寫生文「炭焼の娘」を發表す。八月より九月、松島金華山より出羽最上に出で、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り、新潟に至り佐渡に航す、還りて彌彦山に登り、中津川の上流秋山の郷を探り、信越の國境苗場山を越えて上州沼田に出づ、この行程四十日。四十年(二十九歳)十月陸中平泉より羽後象潟地方に遊ぶ。四十年(三十歳)九月榛名山を越え、草津の奥山より切明温泉に遊ぶ。十二月、陸中平泉に遊ぶ。四十二年(三十一歳)十月平泉・淺蟲温泉・弘前地方より十和田湖に遊ぶ。四十三年(三十二歳)六月より東京朝日新聞に長篇

小説「土」を連載す。冬岐阜及京都に遊ぶ。四十四年(三十三歳)七月頃より咽喉に痛みを覺ゆ。十一月上京岡田和一郎博士の診察を受け、喉頭結核と診斷せらる。十二月五日博士の紹介で根岸博士の根岸養生院に入院す。大正元年(三十四歳)三月、福岡九州大學にて久保博士の診察を受く。五月春陽堂より「土」を出版す。(この年各地に旅行す)大正二年(三十五歳)三月十九日再び久保博士の診察を受く。七月三十一日伊藤左千夫逝く。八月「芋掘」を春陽堂より出版す。十一月上京神尾友修氏の金澤病院に入院す。大正三年(三十六歳)五月より「アララギ」に「鍼の如く」を連載す。六月二十日九州大學病院に入院。九月久保博士の治療を受く。大正四年(三十七歳)一月「アララギ」に「鍼の如く其五」を發表す。一月四日九州大學病院に入院。二月七日夜昏睡状態に陥り、八日午前十時死去。(長塚節全集、長塚節略年譜)による。

出 所

「土」一冊。明治四十三年東京朝日新聞に連載した二十八篇から成る長篇小説で、後纏めて單行本として明治四十五年五月十五日東京春陽堂から出版した。定價壹圓八拾錢。

作者の郷里なる鬼怒川沿岸に住む勤次といふ赤貧の小作人を中心とした百姓生活の描寫で、郷土藝術として殆ど空前の作と云はれ、作者はこの作によつて、その生命は永久であらうとまで推稱せられ

た作である。

この作については、初め之を朝日新聞に紹介した夏目漱石氏が、その刊本の巻頭に長文の序を寄せてゐるが、それは實にこの作に對する最も正しい批評である。今その一節を左に掲げて、その價値と、その作の内容との一斑を示さう。

……余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を讀み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此の「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

尤も誰にも書けないと云ふのは、文を遣る技倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ文の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を擔ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になるばかりである。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり、天然なりが、まだ長塚君以外の

人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土に生み付けられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活状態を、一から十迄誠實に此の「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆ど余等(今の文壇の作家を悉く含む)の想像にさへ上りがたい所を、あり／＼と眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の最も獸類に接近した部分を、精細に直敘したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同様の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ濟まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や、風を綿密に研究してゐる。蟲の物、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音、苟くも彼の郷土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る迄悉くその地方の特色を具へて敘述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨得である。其の獨得な點を、普通の作家の手になつた自然の描寫の平凡なものに比べて、余は誰も及ばないといふのである。

余は彼の獨得なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の観察者である。

作としての「土」は、寧ろ苦しい読みものである。決して面白いから読めとは云ひ悪い。第一に作中に人物の使ふ言葉が余等には餘り縁が遠い方言から成り立つてゐる。第二に結構が大きい割に、年代が前後數年にわたる割に、周圍に平たく發達したがる話が、筋をくつきりと描いて深く入りつゝ前へ進んで行かない。だから全體として讀者に加速度の興味を與へない。だから事件が錯綜纏綿して纏れながら讀者をぐいぐい引込んで行くよりも、其の地方の年中行事を怠りなく丹念に平敘して行くうちに作者の拵へた人物が斷續的に活躍すると云つた方が適當になつて来る。其處に聊か人を魅する牽引力を失ふ恐が潜んでゐるといふ意味でも読みづらい。然し是等は單に皮相の意味に於て読みづらいので、余の所謂読みづらいといふ本意は、篇中の人物の心なり行なりが、ただ壓迫と不安と苦痛を讀者に與へるだけで、毫も神の作つてくれた幸福な人間であるといふ刺戟と安慰を與へ得ないからである。悲劇は恐しいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償ひがあるので、讀者は涙の犠牲を喜ぶのである。が「土」に至つては涙さへ出されない苦しさである、雨の降らない代りに生涯照りつこない天氣と同じ苦痛である。ただ土の下へ心が沈むだ

けで、人情から云つても道義心から云つても、殆ど此の壓迫の賠償として何物も與へられてゐない。ただ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行くだけである。

「土」を読むものは、屹度自分も泥の中を引き摺られるやうな氣がするだらう。余もさう云ふ感じがした。或者は何故長塚君はこんな読みづらいものを書いたのだと疑ふかも知れない。そんな人に對して余はただ一言、斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んで居るといふ悲惨な事實を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の是から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として利益を與へはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に憧憬する若い男や若い女が、読み苦しいのを我慢して、此の「土」を読む勇氣を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になつて、音樂會がどうだの、帝國座がどうだのと云ひ募る時分になつたら、余は是非此の「土」を読ましたいと思つて居る。娘は屹度厭だといふに違ない。より多くの興味を感じる戀愛小説と取り換へて呉れといふに違ひない。けれども余は其の時娘に向つて、面白いから読めといふのではない。苦しいから読めといふのだと告げたいと思つて居る。参考の爲だから、世間を知る爲だから、知つて己の人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる爲だから我慢して読めと忠告したいと思つて居る。何も考へずに暖かく生長した若い女(男で

も同じである)の起す菩提心や宗教心は、皆此の暗い影の奥から射して來るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何處迄も沈着である。其の人物は皆有りのまゝである。話の筋は全く自然である。……(明治四十五年五月)

本課はその第六篇の初めの鬼怒川沿岸の田圃の春を寫した箇所を採擇したのである。

要旨

春の田圃の精細な寫生である。「春は空からも、土からも微かに動く」その動きに促された生物の、むく／＼ともたげた頭を、作者は一つ残らず捉へて來て鮮かに描寫したのである。成長、生息さういつた活き／＼した自然の快さを味はせたい。

前課と比較する時、その自然觀察の態度が非常に異つてゐる。前者は主觀的である、後者は客觀的、現實的である。併し客觀的、現實的な態度で筆を運びながら、自然に對する愛着心や浪漫的なもの、見方が字句の間に動いて居る。その特質は觀察の鋭敏・緻密さと相映つて、自然主義の盛な時代に出た詩人肌の作家の態度を知ることが出來ようと思ふ。

梗概

鬼怒川河畔に住む水吞百姓勘次一家を中心とする作である。お品が勘次と知り合ひになつたのは十六の秋で、十九の秋におつぎが生れた。おつぎが十三の時に弟の與吉が生れたが、與吉が三歳の秋にお品は死んだ。頑迷で利己の外に何物もなく而も盜癖のある父を持ち、百姓を助け弟を育て、行くおつぎの苦勞は一通りでなかつた。のみならず妻を失うてから淋しみを感じる勘次はおつぎの娘盛りになるにつれて嫉妬の炎をもやす。かてゝ加へてお品の父の卯吉は七十を越えた老體で勘次の内に世話にならねばならぬことゝなつた。勘次と卯平との間をとりもつおつぎの苦心。盜癖をあらはしてはその都度世間から非難された時の彼の女の心。でも廣い世間には鬼はない近所の者の親切、地主のなさけ深い心。やがて與吉も小學校に入る年になつた。勘次とおつぎとは開墾に出掛けた留守に與吉の惡戯から漸く餘裕の見えかけた一家を全焼させ、且つ主人の家をも類焼させてしまつた——といふ筋書である。全く水吞百姓の悲哀な生活の公開である。その中には涙のある近所のもの、なさけある地主のことなども織り込まれてある。

段落

一、春は空から……彼等の騒がしい聲はただ空にのみ響いて快げである。(二二頁の二行目まで)

1、春氣僅かに動くと、その刺戟から蛙は蟄居のまゝで稀に鳴出す。

2、春氣漸く到ると、蛙は全く冬眠から覺めて軟かな草の上で鳴く。

一、彼等は更に春の到つたことを……一時にからりと落させねば止まないとする。(二三頁の終りまで)
蛙は更に春の到つたことを一切の生物に向つて告げ、之を甦らせ、遂には聲の上の敵、雲雀の轉る聲をも壓し去り、いよく鳴きほこつて、大きな常緑木の古葉をも一時に落させねば止まない聲で鳴く。

三、この時すべての樹木や……(終りまで)

1、草や木をよびさました蛙は、更に人間をよびさまして飽くまで働けと促して止まぬ。——晝の蛙。

2、夜の蛙は農夫を安眠に誘ひ、明日の活動の準備をさせる。

3、朝の蛙は農夫の覺醒を促す。かくて目醒めたものは更に勇躍する。萬象は蛙の勇しい行進曲に送られながら、生の伸長をとげる。

解 釋

【春は空から、さうして土から微かに動く】 空の日の光を見ても、又時として浮ぶ白

い雲の様子を見ても、又土が日光を吸ふ有様や、榛の木の蕾の少しづつ伸びて行くのなど

でも、春のけはひが知られるといふ事を説く爲の冒頭。

先づ空が何となく春めいて來て後、大地が次第に活氣づいて春らしくなつて來るといふのである。前田純孝の歌に「おのづから眠り足らひて乳呑兒が、目ひらく如く春は來にけり。」とある。

【毎日のやうに西から云々】 武藏野を始めとして關東の平野は冬の間は多くは晴天続きで、西北の寒風が毎日々々吹く。それが二月から三月中旬頃に於て殊にひどい日が多く、その時には田圃や畠は濛々として、黄塵萬丈天日亦晦しといふ程の土煙が立つのである。

【埃】 ホコリ。

【疾風】 シツプウ。(一)勢とく吹く風。(二)樹木の小枝を動かす程の風。はやて、はやち。 國語 こゝは(一)

【空際】 ソラギハ。原文には「クウサイ」と訓ませている。

【田圃】 タンボ。田のある土地。 國語
【榛の木】 ハンのキ。(赤楊・楡・樺)樺の木科の落葉喬木。北海道・本州・九州等に産す。

「はりのき」「はるのき」「けんばんのき」「やちば」「やちはんのき」「やしや」「つくなべ」等異名多し。幹は高さ五六十尺、周圍七尺に達す。樹皮は帶緑赭黒色にして、長き縦裂目を有し、枝は長大にして揚起す。葉は互生し、長さ三寸五分ばかり、長楕圓形にし

て鋭尖頂をなし、淺鋸齒縁を有し、基部に向ひて漸く尖り、表面は平滑、裏面は褐色にして、柔毛を疎生す。葉柄ありて長さ一寸ばかり、花は單性にして、雌雄同株をなし、二月頃開花し、雄花は圓筒狀の莖莖花序をなして下垂し、色は黒褐色、(その花粉を本文で煤のやうなといつてをるのはよい形容である。)長さ二三寸あり。一雄花は四箇の花被を有し、雄蕊四本ありて花絲は分裂せず。雌花は球狀に相集まりて直立す。一雌花は花被を有せず。苞は厚くして宿存し、花柱は二裂す。果實は長さ六七寸ばかりありて、十月成熟して黒褐色となり、鱗片(苞)密に排列して覆瓦狀をなし、恰も松毬に似たり。種子は扁平な

り。【百科】 この木は東京の近郊に多い。
【地味な蕾】 チミナツボミ。ごくつゝましく小さく目立たない蕾。

【蟄居】 チツキョ。(一)家内にこもりゐること。(二)徳川時代に、武士に科せし閹刑の一、閉門を命じたる上更に一室にこもりをらしめしこと、普通の蟄居と永蟄居とありて、各其の罪狀の輕重に従ひてこれを科せり。

【廣辭】「蟄」は爾雅に「靜也」とあつて、靜かに籠り伏して居ること。こゝは蛙の冬籠りをいふ。

【蘆】 アシ。

【とだしば】 花芝。禾本科、花芝屬の多年生草本。莖の高さ三四尺。葉は細長、莖・葉共に強剛。花は小穂をなし、小穂は集まりて數

多分岐せる五六寸の穂をなし、夏季、淡綠色を呈す。我が國、各地の原野に自生す。牧草として佳良なり。ばれんしば。【因國】
【草が空と相映じて云々】 春めいた青い空の眞下に、緑の芽を地上に伸すといふ意。「相映じて」は、明るい空の光を浴びて生き生きとしてゐるさま。

【擡げる】 モタげる。

【鈍くする】 ニブくする。澁んだやうに重々しく霞ませるさま。

【撒散らして】 マキチらして。

【假死の状態】 外見上死んだのと同じ状態を云ひ、冬籠りをする動物は、その蟄伏中、假死の状態にあつて、運動は勿論、食物も取ら

ず、殆ど無感覺である。

【慌てたやうに】 アハてたやうに。蛙の發聲の突然な所が、この一語で活き／＼と目に見えるやうに描寫せられて居る。

【復活】 フククワツ。(一)いきかへること。

よみがへること。蛙が春の空に親しみを持つて居るやうに見える。

【活力】 活動の力。生活の力。【廣辭】

【朗かな】 ホガラかな。(一)うち開けておほひなきさま。「才智——」。(二)あさやかにして曇りなきさま。「音聲——」。(三)はれわたりにさわやかなるさま。のどか。【廣辭】 こゝは(三)。

【たゆたうてゐる】 原文には「猶豫」の字

を充てゝをる。躊躇。逡巡。ぐづ／＼するこ
と。こゝでは林がまだ冬の眼から覺めきらな
いことをいふ。睡むさうにくろすんでゐる林
と鮮明な色がかつた若葉との對照は油繪のや
うだ。

【偃うて】 ハうて。

【雜木林】 ザフキバヤシ。雜木の生ひしげり
たる林。「雜木」は種々まざりたる粗末なる
木。取りまぜて薪とする散木。【廣辭】

【蠶豆】 ソラマメ。荳科の草本、種子を蒔く
時の如何によりて或は一年生となり或は二年
生となる。莖は方形中空にして直立し、高さ
二三尺、葉は互生し羽狀複葉にして數箇の小
葉より成る、小葉は橢圓形又は卵形にして無

柄多汁軟質なり、葉腋に短き總狀花序を生
ず。花は白質にして黒斑を具し、(その黒斑を
「可憐な黒い瞳」といつたのであらう。)莢は空
に向ふ、種子は食用に供せられ、莖葉は肥料
及家畜の飼料に供せらる。【廣辭】

【可憐】 カレン。あはれげでかあいらしい。

【芒】 ス、キ。尾花。

【硬直】 カウチヨク。かたくてすぐなこと。

こゝは草の葉がすく／＼と突立つてゐるさ
ま。「空を刺さう」の描寫はいかにも鋭い勢を
見せて活動的である。凡てこのあたりの描寫
は深く自然の精神にまでくひ入つたもので、
作者の非凡な心が窺はれる。凡筆の及ぶべか
らざる所を注意したい。

【春が更けた】 春が深くなつたこと。春の始
は過ぎて最中となつたこと。

【眩ゆさ】 マバゆさ。

【鳴鈴つて】 ナキホコつて。

【檉】 カシ。殼斗科に屬する山地自生の常
緑喬木。

【爪立】 ツマダチ。原文には「ツマダテ」と
訓ませている。足の爪さきにて身體を支へ立
つ。【廣辭】 伸びあがらうとするさま。こゝで
は雜草が頭をもたげ伸上ること。

【一切の草木は土と直角の云々】 草とい
ふ草、木といふ木の悉くが、大地から眞直に
突立つてゐるといふことを、もつと嚴密な數
學上の語を用ひて言つたのである。

【冬季の間は土と平行することを好んで
ゐた人】 人が寒さにちぢこまつて寝ころんで
ばかりゐる様を云つたもの。

【鐵の針が云々】 鐵の針の尖端が、磁石に吸
付くやうに、人間の尖端即ち脚が、土に吸付
く——即ち直立に立上ること。

【各自に】 テンデに。

【股引を藁で括つて】 モ、ヒキをワラでク
クつて。百姓が水田などへはいる時にする甲
斐々々しい支度。こまかい寫生で百姓の様が
目の前に躍動する。

【絛絲】 シケイト。スガイト。原文には「ス
ガイト」と訓ませている。
繭の外皮より採取したる絲。わるきいと。く

づいと。廣辭「白い桂絲のやうな雨」は、「絹絲のやうな雨」といふよりも、粒が大きく粗く感ぜられる。

【苜蓿を引返し〜云々】 稻の苜蓿を鋏で打返して、麥を播く下地をつくること。

【聲を呑む】 鳴きやめること。

【雨戸】 アマド。家の縁側の外にあつて、雨を防ぎ夜を戒しむるための戸、常には戸袋の中にいる。廣辭蕪村の句「雨戸たて遠くなりたる蛙かな」

【滅切】 メツキリ。目切。際立ちて。廣辭

【搦つて】 ヨソグつて。クスグつて。原文には「クスグつて」と訓ませてある。「疲れた耳を搦つて」は、蛙の鳴く聲が、耳覺に心地よ

く響いて、(子守唄のやうに)眠を誘ふといふのである。

【消耗】 セウモウ。正しくは「セウカウ」と訓む。(一)消やしへらすこと。つかひなくすること。(二)消えてへること。つひえてなくなること。廣辭。勞働後肉體の疲勞。

【櫟】 クヌギ。栲・榲。櫟。殼斗科の落葉喬木、多く山野に自生し、往々高さ十餘丈、周圍一丈餘に達す。樹皮は暗褐色にして深く縦裂す。葉は長楕圓形又は披針形にして、先端尖り鋸齒を有し、栗の葉に似る。五月頃、花を開き穗状を呈す。花は黄褐色にして雌雄異株、果實は「どんぐり」と名づく。くのぎ。廣辭

【檜】 ナラ、柞・枹。殼斗科の落葉喬木、各地

山野に自生す。幹高六七丈、周圍六七尺に達す。樹皮は赭黒色にして帯黄緑白色の斑點あり、始め平滑にして後に淺き縦裂をなす。葉は長倒卵形にして長さ四五寸、縁邊に齒頭の内向せる粗鋸齒を有す。上面は深緑色にして下面に灰白色の細毛密生す。春日、花を開く。莢葉花序は絲狀にして懸垂す。果實は楕圓形にして鱗片細小なる殼斗内に包まれ十月頃成熟す。こなら。ながし。廣辭

鑑賞

早春の柔い感じのする空に、すく〜と伸びてゆく萬象の快げな成長は、蛙といふ樂器の持主の數を次第に加へて次第に大きく響く複雑な交響樂の中に生命の伸長躍動を感じるのである。本課はかゝる蛙の鳴き聲を中心として、鬼怒川河畔早春に於ける自然の躍動を極めて精細に、極めて忠實に描い

【あさまし〜】 (一)あさはかにてあり。たのみがひなし。(二)興さめたり。あきるゝばかりなり。(三)きもつふる。おどろくばかりなり。(四)さもし。みすぼらし。廣辭 こゝは(一)(二)(三)。
【しと〜】 しとどと同義。雨が細く降りつづくことをいふ。
【力強い深い緑】 活力に溢れた濃緑の青葉の形容。「目に青葉」といつた眺である。

た春の進行曲である。絶間なき生の成長、限りなき「命」の歡喜！ 讀み了つてそこに作者の非凡な才筆に今更一驚を喫するのである。全く作者の敏感な繊細な官能に驚かざるを得ない。

「毎日のやうに西から埃を捲いて来る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふわ／＼とした綿のやうな白い雲が、ぼつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、動きもしないでじつとしてゐることがある。」

「水に近い濕つた土が暖い日光を思ふ一杯に吸うて、その勢づいた土の微かな刺激を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は、目に立たぬ間に少しづつ延びてひら／＼と動き易くなる。」

この空や雲、土や榛の木の蕾の見方に少し注意を與へ、落着いて讀む機會を與へるならば感受性の鋭い神経質になつたこの年頃の少年達は容易にこの細かい鋭い物の見方を學び、それを自分のものとする事が出来るだらう。單なる字句の説明に終れば、修辭上の模倣に陥るかも知れないが、深く味はせる事によつて視野を廣め觀察力を豊かにして、筆をのばす點に於て好材料になるかと思ふ。

「蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで速く聞く時は、彼等の騒がしい聲はただ空にのみ響いて快げである。」

蛙の描寫が如何にも巧妙である。

「岬のやうな形に偃うてゐる 田をかゝへて、周圍の林は漸くその本性のまに／＼、勝手に白つぼいのや赤つぼいのや、黄色つぼいのやいろ／＼と茂つて、それが、氣がついた時に、急いで一つの深い緑になるのである。」

新芽の頃から新緑になる時の有様が生きて書かれてある。

「その麥や芒の下に居を求める雲雀が時々空を占めて、春が更けたと喚びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、その轉る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え／＼鳴立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んで了ふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げば眩ゆさに堪へぬやうに、その身を遙かにきらめく日の光の中に没して、その小さな喉のちぎれるまでは鳴らさうとするのである。蛙は愈鳴矜つて、椋の木のやうな大きな常緑木の古葉をも一時にからりと落させねば止まないとする。」

蛙と雲雀の鳴き方といふ平凡な題材も、かうした見方で見たり、聞いたりする事も出来るのだつたと思ふ。これ等の例をあげると數限りも無からうが、尙この文で注意すべきは修辭の法である。勿論こゝに改めて從來の修辭學に捉はれた批評をすることは作者の氣分を損する事と思ふ。理智の

鋭いメスで解剖して理解すべき材料でなく、直接に一氣に味ふべき性質のものと思ふからである。只従来の修辭學に示された漸層法が文の形式の穿鑿なるに反し、これは、蟄居の状態にありながらかそけく鳴き出す春まだ浅き頃ほひから、櫟や楡やその他の雑木の葉が彼の行進曲に送られて繁つてゆく晩春初夏までの春の漸層的な推移を描寫した文の旋律に注意して、作者の内心律を直接聞きとることに注意すべきだらうと思ふ。如何に敏感な官能描寫も効果ある新鮮な生活も、凡て「土」に親しんだ温い作者の心の反映である以上、従来の修辭學だけで律すべき性質のものでなく、春の流れをうたふ作者の琴線に觸れ、その場面全體に響くりツムを傾聽すべきものだと思ふ。

手をついて歌申上ぐる蛙かな	宗	鑑
古池や蛙飛び込む水の音	芭	蕉
また鳴くか曉過の江の蛙	一	笑
日は日ぐれ夜は夜明よとなく蛙	燕	村
塊の動くものみな蛙かな	一	太
小高みに音頭とりの蛙かな	一	茶
向き／＼に蛙のいとこはとこ哉	同	規
石垣や蛙も鳴かず深き濠	子	子
山吹や喉がふくれて鳴蛙	虚	規

六鳳凰堂

作者

【谷崎潤一郎】 明治十九年七月二十四日、東京市日本橋區蠣殼町に生る。三十八年三月東京府立第一中學校を卒業し、七月第一高等學校英法科に入る。當時既に文學を好み、文學者たらんと志ありしも生活上のことを考へ、法律を以て生活を支へ、傍ら文學者として立つの決心なりしなり。四十年六月英文科に轉ず。四十一年七月東京帝國大學國文科に入る。四十二年八月、小山内薫・和辻哲郎・後藤末雄・木村莊八・小泉鐵氏等と共に文學雜誌「新思潮」創刊の計畫成る。九月、論旨退學となる。雜誌に熱中して月謝を滞納せし爲なり。月謝を納むれば再び通學差支なきも、作家として世に立つ抱負盛んにして、通學の如きは面倒くさく其のまゝとなりたり。十一月、「新思潮」に「刺青」を、十二月、「麒麟」を發表す。同月、戯曲「信西」を雜誌「スバル」の爲に書く、これ原稿料を初めて取りたるものなり。四十三年三月、「新思潮」を廢刊す。四十五年七月京都より歸京して長篇小説「葵」を執筆、「東

京日々新聞」に連載す。大正二年正月、短篇集「悪魔」を榎山書店より出版。同月、長篇「羹」を春陽堂より出版。七月、「戀を知る頃」を植竹書院より出版。四年十月、「お艶殺し」を千章館より出版。「お才と巳之介」を新潮社より、情話新集中の一篇として出版。五年七月、「異端者の悲しみ」、九月、「病褥の幻想」を書く。「人魚の歎き」を「中央公論」新年號の爲に、「魔術師」を「新小説」のためを書く。六年春、「玄井三藏」を中央公論に發表す。九月、「十五夜物語」、十月、「晚春日記」、十一月、「ハッサン・カンの妖術」、十二月「兄弟」を書く。七年春、「鶯姫」「人面疽」を發表。ついで居を相州鶴沼に移す。夏より秋にかけて「金と銀」「小さな王國」「柳湯の事件」等を雑誌「黒潮」「中央公論」「中外」等に發表す。十一月月上旬單身支那旅行に赴く。朝鮮・滿州・天津・北京・漢口・九江その他江蘇浙江地方を遊歴し、十二月末上海より神戸に歸來す。八年三月、「母を戀ふる記」「蘇州紀行」「秦淮の一夜」等を發表。夏より秋にかけて「或る少年の怯れ」「呪はれた戯曲」「秋風」「西湖の水」「富美子の足」等を書く。十二月、相州小田原に轉居。九年正月、「改造」に「途上」を發表。「中央公論」に「鮫人」を連載し始む。半歳ほどにて未完のまま中止す。この月五月、大正活映株式會社脚本部顧問に聘せらる。六月、映畫劇の處女作「アマチュア俱樂部」を脱稿し、七、八、二ヶ月を費して撮影す。十一月、有樂座に於て公開。ついで泉鏡花氏の「葛飾砂子」を脚色撮影す。十年三月、雜祭

りの夜」を撮影。四月・五月・六月・七月を費して、「蛇性の嬌」を脚色製作す。その間に小説「私」不「幸な母の話」「鶴唳」「AとBの話」等を脱稿。九月、横濱本牧に居す。十一月、大正活映との關係を絶つ。十二月、「愛すればこそ」第一幕を「改造」に發表。十一年正月、「中央公論」に「愛すればこそ」第二幕第三幕を「墮落」と題して發表。ついで戯曲「お國と五平」を「新小説」に、「永遠の偶像」を「新潮」に、「本牧夜話」を「改造」に、「彼女の夫」を「中央公論」に寄す。十二年正月、戯曲「白狐の湯」「愛なき人々」を發表。「婦人公論」に「神と人との間」を連載し始む。十一月京都に移り十二月兵庫縣六甲苦樂園に移る。この間に「横濱のおもひで」「港の人々」等を發表。十三年正月、「無明と愛染」第一幕を發表。二月、「腕角力」三月、「無明と愛染」第二幕を發表。ついで大阪朝日新聞に「痴人の愛」を連載。同月武庫郡本山村に轉居す。十一月より「痴人の愛」の續稿を「女性」に連載す。十二月、「神と人との間」完結。十四年四月、「痴人の愛」完結。「二月堂の夕」「羅洞先生」「赤い屋根」「友田と松永の話」「馬の糞」等を續いて發表す。十五年正月、長崎より上海に遊び、二月十九日歸來す。「上海游記」「金を借りに來た男」「青塚氏の話」等を夏までに發表す。昭和二年正月「顯現」「日本に於けるクリップ事件」「九月一日以後のこと」等を發表す。(現代日本文學全集、谷崎潤一郎集、年譜)

高須芳次郎氏曰く、

潤一郎は彼れの耽美的傾向乃至悪魔主義的な色彩を益々發揮して、荷風の行詰つた後は、彼れが獨歩する姿を示した。が、一面から云ふと、彼れが最初私等に見せてくれた「驚異」の創造が次第に魅力を減じたやうな感じがあつた。言ひ換へると、彼れの行く道が固定して、彼れ自身も、其の抜きさしならぬのに困つたと云ふやうなところが見えた。が、「ハッサン・カンの妖術」「嘆きの門」「異端者の悲み」その他、矢張彼れでなければ書けぬものを相當に發表した。そして彼れは小説に行詰つた點から戯曲の方に彼れの新しい世界を展開していつた云々。(日本現代文學十二講)とある。短いが氏の傾向を一瞥出来ることと思ふ。

出 所

「國文新讀本」 至文堂發行。

要 旨

作者は性格が詩人的であり、小説家として特殊な境地を有する文人である。かゝる人がこの名建築を如何に觀賞してゐるか、その特殊な想像・空想の深さを考察させたい。

段 落

一、四月の末……の隱見し始める。(二七頁の三行目まで)

密樹の枝をすかして下の方に鳳凰堂の二重瓦屋の搏風が見えかけた、この文の前提。
二、坂を全く降り切つて……感じを興へる。(二七頁の終りまで)

堂の側面を迂回して正面に出るまでの間に作者の眼に映つた感じ。
三、阿字池の汀を傳つて……寔に喫驚しなければならぬ。(二八頁の七行目まで)

堂の正面に直面した時の感じ。
四、夕闇の池の面は……領分を争ひ續けてゐた。(二九頁の六行目まで)

阿字池の面に映る鳳凰堂を眺めての感想。
五、鳳凰堂は……(終りまで)

黄昏時に見たこの堂の印象は特に深いといふのである、この文の終結。

解 釋

【鳳凰堂】 ホウワウダウ。山城國宇治町の平等院に在る堂。平等院は關白藤原頼通の建立に係る。宇治川の西に位す。もと源融此の地

六 鳳 凰 堂

を相して別莊を建て、陽成・宇多・朱雀の三天皇屢々行幸あらせられたりと傳ふ。爾後頼通に至りて寺に改め、永承七年佛像を安置

し、八年阿彌陀堂を建て、定朝をして丈六阿彌陀像を造らしめ、開眼の供養をなせり。此の阿彌陀堂を鳳凰堂と稱す。其のプランは東に面し、鳳凰飛翔の形に法ると云ふは後世の附會の説にして、事實は當時の住宅はいはゆる寢殿造りにして、正殿・對屋・釣殿・泉殿の配置は即ち鳳凰堂の本堂・尾廊兩翼廊の配置と相照應す。大門を北に開き、堂を東面せしめ、前面に阿字池を作り、全體として形式變化に富み、全く舊套を脱せり。本堂は重層、翼廊其の左右に在りて、其の兩端は前面に突出し、尾廊は本堂の直後に在りて、單層なり。本堂屋蓋は入母屋作、其の他は切妻、翼廊の隅角には寶形作りの樓閣を戴き、寶珠・

露盤を冠す。屋根は悉く瓦葺、唐草瓦及巴瓦ともいづれも當期の特色ある文様を有し、本堂大棟上に銅鳳一對を置けり。これ鳳凰堂なる名稱の起りし所以なり。柱・料拱其の他の細部は木割織細、曲線優美にして視覺の錯誤より來るべき缺點を悉く除去せること、恰もアテネに在るパルテノンの殿堂と相伯仲せり。外部は丹土及綠青を塗り、木には透彫銅板を以てこれを被ふ。鳳凰堂のプランに於て、左右突出部の中心距離一三七尺、此の突出部の前端と尾廊の後端の距離一三八尺、其の差僅に一尺に過ぎず。即ち此の堂は其のプランを正方面の輪廓内に圍むことを得べし。本堂の幅と翼廊突出部の中とは正に二と一と

の比をなし、本堂の幅と翼廊突出部の中心距離との比は一と三との比をなせり。本堂の幅は四七尺、其の高さ地盤より大棟上端までも亦四七尺なり。即ち其の建圖も亦正方形の輪廓内に圍まるゝを見る。本堂柱の徑と其の長さとの比は一と八なる比を有す。これギリシヤ、ドリヤ柱式と一致す。本堂の軒出と軸部とは亦一と二との比をなす。以上は全體として鳳凰堂建築の外観に於ける數的關係の一般を示したるに過ぎず。其の細部の數的關係亦注意に價すべきものあり。柱は悉く上部に至るに従ひ其の直徑を減ずること一割五分、其の外形少しく曲線狀をなし、柱に安定の感を生ぜしむ。本堂に使用せる横材長押上に在る

ものは悉く曲線狀をなし、中央より兩端に至るに従ひ上部に反轉し、軒廻りの曲線と調和を保たしむ。屋蓋の勾配極めて緩にして、最急勾配四寸五分五厘、最緩なるもの勾配二寸五分に過ぎず。屋根の優美に見ゆるは主として此の緩勾配なると軒先の深く突出せるとに起因す。本堂内部の裝飾に至りては諸種の工藝の粹を盡し、其の華麗驚嘆に値す。内部は床面を除くの外悉く寶相華文様を以て彩畫せり。其の工藝の種類に至りては髹漆・螺鈿・彫刻・透彫・毛彫・箔押・金屬象眼・鏡及寶石・玻璃の使用及壁畫等を以てせり。内部天井下小壁には五十三體の飛天像を懸け、雲中供養の體を現はせり。十枚の扉及三枚の板材

目には九品説相及極樂曼荼羅の圖を畫く。畫者は宅間爲成と傳ふ。扉の色紙形觀無量壽經の文字は當時の能書左大臣源俊房の書なりと傳ふ。本堂の中央に須彌壇あり、平塵地に螺鈿を以て寶相華文様を現はせり。壇上には定朝作文六阿彌陀像を安置し、其の上部に方形の天蓋を懸く。天蓋には四方に寶相華紋透彫りの薄板を垂れ、其の下部に鍍金の瓔珞を吊下す。天蓋は内部を格組みとし、漆塗に螺鈿を以て裝飾せり。〔百科本卷卷頭口繪參照。〕

【舊曆】 靈元天皇の貞享二年に頒布された貞享曆のこと。一ヶ月を二十九日又は三十日とし（平年は十二ヶ月。八ヶ年毎に三年の閏年を置いたもので、閏年は十三ヶ月であつた。〕

その「十日ばかりの月」といへば、もうあと五日で満月となる月で、半月よりは稍大きくなつてをる。

【宇治の町】 山城國久世郡宇治河畔。京都の東南四里、人口約三萬五千。平等院其他古蹟が多く、茶の産地として特に有名である。治承四年源頼政平等院に戦死し、元暦元年源義經、義仲を此所に撃破した。

【縣の森】 アガタのモリ。平等院の西にあつて、宇治町の鎮守縣神社（縣の宮）のあるところ。「神祇辭典」に、「アガタのミヤ。往古、大内裏の西方、北の御門附近に在りたる社。除目の際、地方官、此の社に詣でて除位を祈りたりといふ。祭神詳ならず。」とある。

【平等院】 ビヤウドウキン。天台宗の寺。朝

日山と號す。初めこの地は左大臣源融の別業にして、宇治院といひ、陽成天皇の行在となりしことあり。又宇多天皇、朱雀天皇の離宮たりしことあり。一條天皇の時源雅信の領となる。長徳四年御堂關白道長、藤原忠文の富家殿と共に之を得て別業とし、子宇治關白頼通に傳ふ。永承七年三月二十八日頼通、宇治の別業を捨て、寺とし、平等院と號す。治暦二年十月十三日藤原師實平等院内に五大堂を建て、供養す。三年十月五日後冷泉天皇、平等院に臨幸せらる。治承四年五月二十六日源頼政、以仁王を奉じて園城寺より奈良に赴く途次此の寺に入り、平氏の軍と戦ひ敗れ、釣

殿にて子仲綱等と共に自殺す。延元元年正月足利勢を防がんとして楠木正成火を放ち、此の寺の近傍を一字も残さず焼きはらひ、「佛閣寶藏忽ちにやけにけるこそあましましけれ」（太平記）此の兵火にも鳳凰堂・鐘樓・外門は難を免れしに、元祿年中、外門は焼失す。宇治大納言源隆國は暑を此の寺の南泉坊に避け、具に人の談話を聞きて「今昔物語」を著作したりといふ。鳳凰堂の北の「扇の芝」は頼政自殺の舊蹟なりと云ふ。又鐘樓の鐘は印度傳來の古鐘にして、日本三鐘の一と稱せられ、形式の完備なるを以て著名なり。〔百科〕

【築地】 ツイチ。築泥（ツキヒチ）の略。（一）柱を立て、板を心とし、泥土にて塗り堅め、

屋根を瓦にて葺きたる垣。古くは泥土を築き
堅めたる今の土手の如き牆。ついひぢ。つい
がき。ついぢべい。(二)ついがきは昔時堂上
方の邸にのみ用ひたるより堂上方、公卿のこ
とをいふ。菅原傳授手習鏡三「御恩は上なき
ついぢの勤め」(天國こゝは(一))。

【徑】 コミチ。音ケイ。逕に同じ。

【宇治川】 勢多川の下流、伏見を経て淀町に
至り、桂川を合せ西南流して木津川に合す
る。古來瑩狩の名所として知られて居る。千
鳥の聲のよい事も本文で知られる。橋は宇治
町から對岸宇治村に架したるもの。

【窪地】 クボチ。くぼい土地。

【綠蔭の底】 緑の木蔭の深いところ。

とは神明造シノミゾの如く千木チキと破風ヤクフウとは一本の材を
用ひたるを以て破風の形は直なるを本式と
す。よりにて之を本破風ホンヤクフウといふ。その他、流破
風・千鳥破風・唐破風・縋破風ツスガ・切妻破風等
あり。(天國)

【鳳凰】 (一)支那にて古來麟・龜・龍と合せて
四瑞となしたる鳥。聖人天下に王たる時に來
儀すと稱せらる。故に鳳の字直ちに聖人又は
天下の事に用ひらる。鳳また皇に作る「山海
經」に、「五采而文、名曰鳳皇。」とあり。
鳳は雄、凰は雌なり。又鳳よく天時を知ると
なす。(二) Phoenix 十七世紀にバイエルが選
定したる南半球の星座。(三)紋所の名。[百科
こゝは(一)]。

【二重瓦屋】 一寸二階があるやうに見える二
重になつた瓦屋根。

【搏風】 ハフ。破風とも博風とも書く。屋根
の切妻キリツマの合掌形の板。即ち、家の兩側面にあ
る切妻屋根の端、兩下して山形をなす所、も

【均齊的】 均齊は相稱の義。相稱は美的形式
原理の一相として對象の構成が中央の垂直の
線又は面の左右に均等に配せられ、兩半部が
數、位置、大きさ、形式等に於て相照應する
關係に置かるゝ場合を云ふ。「鳳凰堂」の項參
照のこと。

【廻廊】 クワイラウ。長くして折れ曲つてゐ
る廊下。

【楹】 ハシラ。音エイ。大きい圓柱。

【檐】 ノキ。音エン。

【運動の關係を逆にして云々】 觀るもの
が歩を移すに従つて生じてくる堂の姿形の變
化を、今假りに觀者は靜止して堂自身が動い
て起すものと考へる、との意。

【蔓の波】 イラカの名ミ。波形に重つた瓦屋根。

【さす手ひく手】 舞踊に於ける手振りの形容。差手は舞の手のうちで手を前方へ差出す振り。引手はその反対。

【阿字池】 アジイケ。鳳凰堂の前の池。阿字の形に掘られてゐるので名がある。恵心僧都の作といふ。

【相】 サウ。かたち。すがた。人相・骨相・手相・家相などの「相」と同意。

【藤原時代】 平安朝。

【夕闇】 ユフヤミ。夕方の暗黒なること。宵の間に月なくて暗きこと。又、その時。よひやみ。天國

【大理石】 石灰石の一種。雪白のものを普通とする。黒・赤・茶・黄・褐などを交へてゐるものもある。建築用材としたり裝飾用としたりする。質が緻密で磨けば美しい艶と光が出る。

【八百年の星霜】 永承七年三月、藤原頼通がその別業を修築して寺となし、この堂を建て、から今日まで、凡そ八百七十餘年の年月を経てゐる。「星霜」は、年月。歳星は一年に天を一周し、霜は年毎に降るからである。

【生存の力の稀薄になつた】 朽廢に近づいたといふ程の意。

【平安朝の幻】 平安朝は、桓武天皇の延暦十三年、平安京に遷都があつてから、建久三年

頼朝が幕府を創立したまで、前後約四百年間の朝廷。「幻」マボロシは、無きものゝ有るが如く見えるもの。こゝは平安朝といふものゝ面影のやうにの意。

【虚空】 コクウ。そら。

【神秘的な】 人智を超越した不可思議な。

鑑賞

鳳凰堂の寫眞は何時見ても快い感じを與へる。一體宇治といふ土地が既にさびを持つた土地なのである。あそこにふさはしいものはこの鳳凰堂でなければならぬ。吾々はこの一文を讀んでゐる間に恍惚として八百年の昔を辿る、辿るかと思へば現在の鳳凰堂が眼の前にちらつく。全く夢うつゝの境にあるやうだ。作者のこの一文はどこまでも吾等を引きづつてやまぬ、而も引きづられることの快さに酔心地となつてしまふ。

「堂は次第に寫眞で見る通りの端嚴・均齊な姿勢を保ち、踊の手をびたりと静めたやうな淋しい落ちついた相を現する。」

何といふ巧みな表現であらう。さらぬだに端嚴・均齊な建物を夕闇時に眺めた感じは之以上に表現出来るであらうか。客観的描寫を擬人した爲に主観的になつてしまつてゐる。この事は既に前にも説いたが、作者が靜的なものを生かしてゐる所に面白味があるのである。

「夕闇の池の面は、腐つた水が澱んでゐながら、寧ろ硝子を張つてあるやうに冷たく平たく見える。」夕闇の池の面が眼前に想ひ浮ぶではないか。

「大理石の廊下へ物象の映るくらゐの鮮さに、堂の影がさかさまに映じてゐる。」
ぼんやりと池面に映つた堂の影の巧みな表現。

「平安朝の幻の如く立現れて、暫く虚空に樓閣を描き、私がちよいと眼を瞑つてゐる間に消失させてしまふかと危ぶまれる。」

これがまあ、八百年前の建築物かなあ！と作者の念頭に浮んだ瞬間の感じの巧みさ、すべて古典的な風格と匂ひとがある中に新味の溢れた筆致である。印象的な文として確かにすぐれた作である。

七 保津川下り

作者

【夏目漱石】 慶應三年一月、直克・千枝の四男として東京市牛込區喜久井町に生る。明治三年新宿の鹽原家の養子となる。四年鹽原家、淺草諏訪町に移る。種痘がもとで瘡瘡を病む。後に牛込の實家へ歸る。十一年、小學校は一二轉校、この年神田錦華小學校を卒業。一ツ橋中學校に入學する。十七年、大學豫備門に入り工科に籍をおき、後文科に轉ず。同豫備門は十九年に第一高等學校と改稱。鹽原家から復籍する。二十三年、第一高等學校卒業。爾後一年間東京高等師範學校で英語を教授する。二十八年四月、松山中學校に赴任。二十九年四月、熊本第五高等學校に轉任。九月、中根重一長女鏡子と結婚する。三十二年五月、長女筆子生る。三十三年九月、第五高等學校教授のまゝ英國に留學。三十四年一月、次女恒子生る。「倫敦消息」五月六月の「ホト、ギス」に出る。三十六年一月、歸朝。三月、東京市本郷區駒込千駄木町五十七番地に定居。四月、東京帝國大學文科大學講師並びに第一高等學校講師と

なる。七月の「ホト、ギス」に「自轉車日記」をかゝぐ。九月、大學で「文學論」を開講する。三十七年一月の「帝國文學」に「マクベスの幽霊に就て」を、二月出版の「英文學會叢誌」に翻譯「セルマの歌」をかゝげる。十一月、三女榮子生る。三十八年一月の「ホト、ギス」に「吾輩は猫である」を、同月の「帝國文學」と「學燈」とに、それぞれ「倫敦塔」と「カーライル博物館」とを發表する。二月の「ホト、ギス」に「猫」の(二)を、四月の「ホト、ギス」に「猫」の(三)と、「幻影の盾」を、五月の「七人」に「琴のそら音」を、六月の「ホト、ギス」に「猫」の(四)を、七月の「ホト、ギス」に「猫」の(五)を發表する。同月、大學で「文學論」終講。九月から「十八世紀文學」を開講する。九月の「中央公論」に「一夜」を、同月の「ホト、ギス」に「猫」の(六)を發表。十月、「吾輩は猫である」上篇を大倉書店から出版。十一月の「中央公論」に「薙露行」を發表する。十二月、四女愛子生る。三十九年一月の「帝國文學」に「趣味の遺傳」を、同月の「ホト、ギス」に「猫」の(七)(八)を、三月の「ホト、ギス」に「猫」の(九)を、四月の「ホト、ギス」に「猫」の(十)と「坊ちやん」を、發表する。五月、「漾虚集」を大倉書店から出版。八月の「ホト、ギス」に「猫」の(十一)を、九月の「新小説」に「草枕」を、十月の「中央公論」に「二百十日」を發表する。十一月、「吾輩は猫である」中篇を大倉書店から出版。十二月、「鶉籠」を春陽堂から出版。同月、本郷區西片町十番

地ろの七號へ轉居する。四十年一月の「ホト、ギス」に「野分」を發表する。四月、東京帝國大學並びに第一高等學校の各講師を辭任、朝日新聞社に入社する。京都旅行。五月、「文藝の哲學的基礎」を朝日に連載する。同月、「文學論」を大倉書店から出版。六月、長男純一生る。同月、「吾輩は猫である」下篇を大倉書店から出版。同月から十月まで「朝日」に「虞美人草」を連載する。九月、牛込區早稲田南町七番地へ移轉。四十一年一月から四月まで「朝日」に「坑夫」を連載する。一月に「虞美人草」を春陽堂から出版する。六月、「大阪朝日」に「文鳥」を連載する。七月、「朝日」に「夢十夜」を連載する。九月より十二月にわたり「三四郎」を「朝日」に連載する。九月に「草合」を春陽堂から出版する。十二月、次男伸六生る。四十二年一月から三月にわたり「永日小品」を「朝日」へ書く。(大阪朝日には二十四篇。東京朝日にはその中の十六篇のみをかゝぐ。)三月、「十八世紀文學」を「文學評論」と改題して春陽堂から出版。六月から十月にわたり「それから」を「朝日」に連載する。九月、滿韓旅行に出發、十月、歸京する。十月から十二月にわたり「滿韓ところく」を「朝日」にかゝぐ。十一月から「朝日文藝欄」を擔當する。十二月、「それから」を春陽堂から出版する。四十三年三月、五女雛子生る。同月から六月まで「門」を「朝日」に連載する。五月、「近什四篇」を春陽堂から出版。六月十八日、胃潰瘍の疑ひあり、七月三十一日まで内幸町胃腸病院に入院する。八月六日、修善

寺に轉地。十七日・十九日・二十四日に吐血。重態となる。十月十一日、恢復して歸京、そのまゝ胃腸病院に入院する。十月二十九日から、「思ひ出す事など」を「朝日」に連載しはじむ。四十四年一月、「門」を春陽堂から出版。二月、「思ひ出す事など」掲了。二十六日、胃腸病院を出る。同月、文學博士號の授與を拒絶する。七月、「ケーベル先生」と「手紙」とを「朝日」に掲げる。八月十一日、朝日新聞社主催の講演會のため出發、明石・堺・和歌山・大阪で講演する。八月十九日、大阪で再び胃潰瘍を發し湯川病院に入院。九月十四日歸京。八月、「切抜帖より」を春陽堂から出版。十月、「朝日文藝欄」廢止。十一月、五女雛子死歿。四十五年一月から四月まで「彼岸過迄」を「朝日」に連載する。八月、鹽原・赤倉に旅行。九月、「彼岸過迄」を春陽堂から出版。十月、「文展と藝術」を「朝日」にかゝげる。十二月から「行人」を「朝日」に連載しはじめる。大正二年二月、「社會と自分」を實業の日本社から出版。三月の末から胃潰瘍のために就褥。「行人」は四月七日まで掲げて中止。九月十六日から再び連載、十一月完結する。三年一月、「素人と黒人」を「朝日」にかゝげる。同月、「行人」を大倉書店から出版。四月から八月にわたり「心」を「朝日」に連載。十月、「心」を岩波書店から出版。四年一月から二月まで「硝子戸の中」を「朝日」に連載する。三月十九日出發、京都に旅行中、胃潰瘍で就床、四月十七日歸京する。同月、「硝子戸の中」を岩波書店から出版。六月から九月まで「道草」を

朝日に連載する。十月、「道草」を岩波書店から出版。大正五年一月、「點頭錄」を「朝日」にかゝげる。一月二十八日から二月二十六日まで湯河原に滞留する。五月二十六日から「明暗」を「朝日」にかゝげはじめる。十一月二十二日、又胃潰瘍になり、十二月九日逝去、享年五十。「明暗」は十二月十四日まで連載され中斷。(明治大正文學全集、夏目漱石先生年表)
高須芳次郎氏曰く、

漱石は、自然主義全盛の時に反自然主義の旗を押立て、びくともしなかつた。當時後藤宙外・小杉天外・廣津柳浪・江見水蔭等は、新興文學の前に漸く影がうすくなつて、僅かに泉鏡花のみが、いつもの夢幻境に彷徨して、「三味線堀」などを書いて僅かに孤立の姿を根強く保つて居るに過ぎなかつた。生田葵なども伸びさうで存外伸びなかつた。かうした時に、漱石は反自然主義者の泰斗として、旺んに小説や隨筆を書き、一方の巨匠と目せられた。

漱石には禪味・俳味といふことが主となつてゐた。彼は自然主義派が、その作品を頻りに第一義に解觸れて居るといふのを笑つて、「その第一義といふのは生死海中にあつての第一義である。人生觀がこれより以上に上れぬとするとこれが絶對的に第一義かも知れぬ。もし生死の關門を打破して二者を眼中に置かぬ人生觀が成立し得るとすると今の所謂第一義は却つて第二義に墮落するかも知れぬ。」と云

つた。明かに禪的思想だ。自然主義が双對に居り、差別界に居るに對して、漱石は絶對に居り、超差別界を見て居るわけだ。それで彼は晩年に至ると「則天去私」といふ事を頻りに唱へた。「山は青い、水は緑だ。自然についてこの上何を加へようぞ。この世そのまゝに佛の國だ。」とした。それは佛教の大乗的思想である。彼が俳趣味を愛したのも一つは彼が信じた禪的思想と合致したからだ。以上から見ると彼はどうしても純東洋的である。日本的である。ヨーロッパの思想に染まつたところは殆どない。さうした境地は、自然主義の境地にくらべると、遙かに明るく、のびのびしたところがあつた。そして漱石は理想を斥けず、靈性を斥けず、内面的生活を重んじ、主觀を容認した。この點は自然主義と直反對である。が、そこに漱石の優れた見識があつたと云へよう。(日本現代文學十二講)

出 所

「虞美人草」明治四十一年一月、春陽堂發行。すべて十九篇より成る。本課は、その「第六篇」の一部。「虞美人草」は先生が朝日新聞に入社後、京都に遊んで、歸來後直ちに筆を執られたものである。即ち純粹に作家として世に立たれた道程の第一歩で、先生としても比較的この一篇に力を注がれたらしく、想ひを構ふること慎重に、筋の上から云つても一絲亂れず、文章から云つても實に絢爛と精緻を極めたものである。

この作の構造は、大體から云へば渦卷のやうになつてゐて、外側から中心へ近づくにつれて、だんだんその輪が小さくなる。そして作中のあらゆる要素が一點に集中すると同時に、大破綻に到達するといふ仕組である。従つて普通の劇や小説のやうに、直ちに終局を目指して事件が發展すると云ふやうなことはない。輪を畫いて迂迴し、低徊しながら、次第に中心へ近づいて行く。最初比叡山へ登つたり、保津川を下つたり、雨の宿に寝ながら隣家の琴を聞いたりしてゐるあたりは、所謂低徊趣味の作を讀んでゐるやうな氣持で、殆ど事件の發展は見ない。が、舞臺が東京へ移つて、渦卷の輪が小さくなるに伴れて、進展の速度もだん／＼急速になる。終局に近づいた頃は、凄じい勢で一點に集中して、たうとうそこに爆發するのである。そしてその犠牲になるものは女主人公の藤尾に外ならない。かく筋が均整してゐるだけに、多少の無理と思はれる所もある。性格もそれぞれ一つの觀念から出發したやうな傾向があつて——例へば、女主人公藤尾が「我の女」、その母親が「謎の女」、小夜子が「過去の女」、親子が「五本の指を並べたやうな女」と云ふやうに——どこか作爲の痕が見えないではない。が、先生の劃時代的力作として、その作風を窺ふ上には看過すべからざるものであらう。(明治大正文學全集、夏目漱石集)

要 旨

輕快・瀟洒で形容が如何にも奇警な面白味の多い叙景文である。そこに自在に叙述した作者獨得の雅致ある表現記述を翫味させると共に次の事をも知らせたい。

1、物事は平凡のやうだけれども、それに入り込んで見ると随分面倒なものである、又面白いものである。子を育てたものでないと子供のことなり親の事はわからぬのと同じく、保津川に棹さしたものでなくては保津川の眞を説くには足らぬ。岸に立つて眺める川、その景色は實に美しいであらう。併しながら一旦之に棹さして下つて見ると、冷汗をかいたり、をどつたりする箇所もある。それでも危険な處を通りぬけて、始めて目に映つた兩岸の景色なり、水そのものゝ美しさ、壯快さは喻へるにものない程である。吾等の世渡りもこの通りだ。

2、自然は實に偉大だ。併しその偉大だとか、美などを解するのは我々人間にある。つまり人間は自然のお手本である。

といふ事、その外に、自分の身に顧みて眞劍に學習してゐると、色々な周圍の物に目を牽かれないが、氣をゆるすとその方に引きずられる。つまらぬものに限つて色々なものに目をつけて種々の罪惡などを犯すといふことなども注意したい。

段落

一、浮かれた人を……舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。(三〇頁の三行目まで)

保津川下りの大體を述べてある。花に浮かれて現をぬかす人々を知らぬげに、保津川を下る人は已に現世の塵を厭はしく感じて、眞の境地を求めようとするやうに思はれる。

1、丹波に抜ける——までは、俗の人との隔たりを示してゐる。

2、下る掟である——までは、中心人物を點出してその人物が超俗の風のあることを云つてある。

3、客を待つ——までは、眼前の風景を點じて舟に乗るべきあたりの保津川は、まだ平凡な水が、如何にも春らしく長閑に流れてゐることを示してある。やがて展開さるべき壯絶境に對照して不思議の感さへも抱かされる。

二、妙な舟だな……河は漸く京に近くなつた。(三九頁の始の行まで)

保津川下りに於て、二青年はあなやと腰を浮かした瞬間に眞劍な心を感じた。流れ流れる保津川の急流の平凡ではなく、自然が我々に或る眞理を教へつゝあるのだといふこと、そしてこの眞理を悟り得たものにして初めて保津川の美を悟り得るのだといふ暗示を與へてゐる。

1、保津の瀬は是からである——までは、流れは未だ平凡で、物珍しい船頭の姿のみが心に残る。蓋し乗手の心に餘裕があつて緊張してゐないからだ。

2、夢窓國師より此方の方がえらい様だ——までは、第一の瀬を越した時の二青年の感じである。青年の一人は、自然は人間よりも偉大だと感じた。併しこの青年は思索家ではなかつたのである

3、舟は只まともに進む——までは、第二第三と次第に瀬を通過するが、それ等の瀬は第一の瀬を通過した時程の強い印象を青年に與へない。随つて描寫の筆も省いてあるのだ。

4、宗近君は落ちながら云ふ——までは、最大の瀬を越して、自然は人間よりも偉大といふことを更に深く感じたのである。

5、牽綱をわが勢に逆らはぬ程に疾く滑らすための策と云ふ——までは、最大の瀬を経験して、心に餘裕と落着とを得た青年の眼には、再び珍しい曳舟の姿が映つたといふのである。

6、河は漸く京に近くなつた——までは、流れは次第に穩かになつたので、二青年は始めて批評の言葉を發するやうになつた。思索家の青年は、自然の活動は吾々人生の眞理だと斷定した。二人は保津川を下つた爲に、人間の第一義たる眞理を體得した。

三、その鼻を……(終りまで) 流が穩かになつて目を注ぐとそこは物騒しい塵の世界である。

解 釋

【浮れ人を云々】 春といふ時候の勢セイに浮き立たせた人を、嵐山の邊に運んで行く汽車は、嵯峨から山をつきぬけて丹波に出る。

【嵯峨】 サガ。山城國ヤマト葛野郡の地名。京都市の西北にあたりて、今嵯峨村下嵯峨村にあり。古は平安京郊外閑靜の域として、高貴權門の別業あり。幽棲の地をこゝに求むるもの亦少からず。嵯峨野の秋草、嵯峨野の御狩などを詠める古歌多し。有智子内親王の山莊、藤原定家の山莊(小倉山)など有名なり。嵯峨天皇の離宮は後に大覺寺となり、後嵯峨天皇の龜山殿は廢して、足利尊氏アスカヒノノミコこゝに天龍寺を建つ。清涼寺の釋迦佛亦有名なり。高倉天皇の

寵妃コガウノフメ小督局の嵯峨野の隱栖は平家物語によつて殊に世に知らる。[百科]

【龜岡】 カメヲカ。京都府南桑田郡に在る町。丹波高原中の一小盆地の中心に位す。保津川その北を流る。この地と京都市との間は鐵道の便と保津川の水路とを利用して交通すべく、殊に保津川下りは兩岸の奇景送迎に違あらざるを以て、京都より鐵道によつてこの地に來り、更に舟を賃して川を下るもの少なからず。又丹波山中より伐出する材木を筏となして下す者も亦多し。河岸の保津濱には保津川遊船會社あつて、保津川下りの舟を備ふ。龜山城は明智光秀が丹波を治めたる根城

として史上に有名なれど、今は大抵破壊して
天守臺に一株の銀杏の盤踞するを見るのみ。
この地もと龜山と稱せしが、維新後伊勢の龜
山と同名なるを以て現稱に改む。〔百科〕

【保津川】 ホツカハ。京都府丹波國に在る
川。大堰川・園部川の合流にして、龜岡盆地
第四紀層の平野を東南に貫流し、龜岡町の北
方を過ぎて東方に轉じ、愛宕山脈を横斷して
峡谷をなし、山城に入りて桂川となり、鳥
山・嵐山等北麓を繞り、下嵯峨に至り、京都
盆地に出でて淀川に入る。丹波保津より嵐山
に至るまで約二里半の間、古生層諸岩より成
れる峯巒近く河岸に逼り、兩岸の斷崖絶壁削
るが如く、河底亦巨巖・怪石相參差し、加ふ

るに河床急傾斜なるを以て、水勢矢の如く、
かりが瀬・金岐の瀬・小鮎の瀬・犬戻り・鶴
飼の瀬等の急湍あり。丹波保津濱より扁舟に
棹して下るときは二時間を出でずして嵐山の
麓に達すべし。舟師巧に船を操り、奇石懸
崖・瀟潭・奔流相送迎して風景の奇を盡すを
以て遊覽の士少なからず。〔百科〕

【急湍】 キフタン。はやせを云ふ。吳均「急
湍甚湍。」「湍」は、音タン。セン。早し・た
ぎる・めぐる・早瀬・急流等の意味がある。

〔天字〕

【掟】 オキテ。音はタウ・チャウ。「オキテ」
は特訓で、フルヒハルが本來の訓である。さ
だめ・きまりの意。〔天字〕

【碧油】 ヘキイウ。青みどり色の油。

【土筆】 ツクシ。つくづくし。筆頭菜とも書

く。杉菜の地下莖より生ずる子囊群の莖。ふ
ではな。〔廣辭〕

【舟子】 フナコ。せんどう。

【舷】 コベリ。ふなばた。ふなべり。

【尺と水を離れぬ】 舷と水との距離が一尺
とは離れて居らぬ。

【毛布】 ケット。

【よき程の間隔に座を占める】 程よきへ
だてを置いてすわる。

【左へ寄つて居やはつたら云々】 左へ寄
つていらつしやるなら大丈夫です。波はかゝ
りはしません。京阪地方の方言。

【權】 カイ。「かい」は、「かき」の音便、船具の
名、櫂より小さく且つ曲がらず、水を掻き分
けて、船を進むるに用ふるもの。〔廣辭〕

【荒削りに平げたる云々】 荒削りに平たく
した櫂材の權を太い藤蔓で巻いて舷にとりつ
け、それから上の方一尺ばかりの所は丸く削
つてある、それは両手でむんずと握るてづる
のためだといふのである。その舷にとりつけ
た權を操る毎に權は藤蔓と擦れ舷と擦れてぎ
いぎいと鳴るといふのだ。「櫂の頸筋を」とい
ふのは、人間で云へば頸筋に當る所をといふ
ので、權を舷にとりつける邊を指した擬人法
である。

【握る手の節の隆きは云々】 船頭の手の

頑丈な形容である。關節の高く色の黒い船頭の手は恰も松の小枝のやうである。その松の小枝に血を通はせたやうな頑丈な手に青筋を立たせて、うんと水を掻いてをるといふのである。

【藤蔓に頸根を抑へられた權】 藤蔓で舷にとりつけられてゐるのを擬人したのである。

【うねり】 うねること。或は上下に或は左右に彎曲すること。うねくる。うねくれる。

【廣辭】

【停る暇なきに】 舟は瞬間もとどまる暇なきの意。船脚より水が速く進んで行く形容。

【重なる水の蹙つて行く頭の上には】 「蹙

つて」は、「シジマつて」と訓む、ちぢまる意である。段々進んで行く川が狭まつて来る、ふと頭上を見ると、と云ふ位の意であらう。

【山城を屏風と圍ふ】 山城の國を屏風で立て圍んだやうに見える峻しい山が聳えてゐるといふのだ。

【逼つた水は】 セマつた水は。河幅の狭くなつた處を流れる水はの意。

【帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば】 今まで帽子に日があたつてゐたのだが、おやかげつたなと思ふ間にの意。「影を失ふ」は、日影即ち日光が當らなくなる意。

【山峽】 サンケフ(サンカフ)。山と山との間のせまつた地。【因字】

【岩と岩の逼る間を半町の向ふに見る】

半町ばかり向ふの岩と岩と接近した邊を見むと、といふのをかう書いたのだ。

【右側の二人はすはと】 この「すは」は俗にいふ「そりやこそ」と云ふのに當る。坂を下る時の荷馬などの時には車の動きをにぶらせる法をとるが、こゝでは權を持つた二人が波を切る手をゆるめたのである。

【權は流れて舷に着く】 波を切る手をゆるめて水の自由に任せたから、船頭の持つ權は自然舷についたのだ。

【舳】 ヘサキ。船の先頭。みよし。(艦・船首) 【廣辭】 「舳に立つは」は、三〇頁の八行目にある「眞先なるは二間の竹竿」とあるのを

指す。舟の頭の方に立つてゐる船頭はの意。

【壊れる】 コハれる。

【谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我勝に奪ひ合つてゐる】 水泡の一つ一つに、

聳え立つ山頂を洩れる日光が映る。その有様を逆に、泡が無数の珠となつて日の光を奪ひ合ふと形容したのである。作者はかゝる逆な書き方を隨所に用ひてゐる。「萬顆」バンクワ。數の多いのにいふ。「顆」は「つぶ」、字彙に「今言物一顆猶一頭也。」とある。

【壯なものだ】 サカンなものだ。壯觀だ。

【夢窓國師】 ムソウコクシ。臨濟宗の僧。京都天龍寺の開山なり。名は疎石といふ。伊勢の人にて、本姓は宇多源氏なり。弘安元年父

に伴ひて甲斐に移り、六年平鹽山の空阿に従ひて道に入り、正應五年奈良にて戒を受け、永仁二年建仁寺の無隠圓範によつて參叩し、翌年鎌倉に至りて東勝寺の無學、建長寺の葦航道然、圓覺寺の桃谿德悟等に謁し、五年再び京に入りて無隠に就き、また一山一寧に従ふ。嘉元元年高峯顯日（佛國國師）に乾明山萬壽寺に隨ひて參究し、去りて常陸の白庭に庵居せし時、一夜豁然として大悟徹底す。乃ち淨智寺に高峯に謁し、問詰數番、機、辨相合す。甲斐に歸りて父を省し、淨居寺に住す。德治二年高峯より法衣を附せらる。延慶元年更に法語を贈らる。二年那須の雲巖寺の高峯の記室となる。夏畢りて那須を辭し、應長元

年甲斐に龍山庵を營みて居り、正和二年美濃に古谿庵（後虎谿に作る）に移り、文保元年京に入りて北山に寓し、二年土佐の汲江庵に逃る。元應元年北條高時の母覺海夫人の請によりて鎌倉に到り、勝榮寺に止まる。幾もなく横須賀に泊船庵を營む。元亨三年上總の千町莊に退耕庵を開き、正中二年後醍醐天皇の勅命を奉りて京に上り、宮中に禪要を説き、南禪寺に入りて、第九世の席を繼ぐ。嘉暦元年伊勢に善應寺を開き、鎌倉に南芳庵を作る。二年淨智寺の主となり、又瑞泉寺を開く。元徳元年圓覺寺の第十五世を司り、二年にして退き、甲斐に慧林寺を創し、元弘二年瑞光寺を立つ。元弘の亂後勅命ありて臨川寺

に居り、建武元年再び南禪寺の席を董し、程なく臨川寺に還り、臨川家訓を撰みて門人に示し、西方教寺を改めて西芳禪寺とし、曆應二年八月後醍醐天皇吉野に崩御したふや、足利尊氏その冥福を祈らんとため靈龜山天龍資聖禪寺を建て、夢窓を以て開山とす。翌年阿波の細川和氏の爲に補陀寺の開山となり、康永元年高師直の請によりて眞如寺の寺務を視る。三年靈光庵を創す。貞和二年八月二十七日金襴紫衣を賜はり、十一月二十六日夢窓正覺國師の號を賜はる。翌日三會院に退き、三十日寂す、年七十七。【百科】

【夢窓國師より此方の方がえらい様だ】

保津川に来る前に天龍寺のあたりに遊んで夢

窓國師を偲んだ二青年は、夢窓國師を最もえらいと考へた、が併し、その感激よりも、瀬を下つた時の自然の興へた壯觀の感じの方がすぐれてゐるといふのだ。

【行客】 カウカク。旅人。李頎「行客暮帆遠。」
【天字】

【當面】 眞正面。

【疾き】 ハヤキ。

【船を驅つて】 船を追ひやつて。

【奔湍】 ホンタン。急湍に同じ。

【大きな圓い岩である】 一寸變つた書き方である。今度眼前に突如としてあらはれたのは大きな圓い岩だといふのである。

【苔を疊む煩はしさを避けて】 苔の生え

てゐない岩を擬人したのである。「疊む」は、折返して重ね。積みかさぬ。〔言海〕などの意があるが、こゝでは、殊に川でもあるから、苔の衣を着るのも面倒なのでといふのだ。

【紫の裸身】 ムラサキのハダカミ。紫色をした岩の擬人法

【水沫】 シブキ。繁吹くこと。しぶかれて散る水。〔言海〕

【春寒く腰から浴びて】 春とはいふものゝ未だ寒いのに腰から浴びて。岩の胴に飛沫がかゝるのを云つたのだ。

【縁崩るゝ真中に】 逆巻く波の真中に。碧色の水が岩にぶつつかつてくだける真中に。

【矢も楯も物かは】 矢も楯も何の事があら

議だを補うて見るとよくわかる。

【まとも】 正面。眞之面マツマエの轉。正しく向ふこと。〔言海〕

【紫の大岩は、はやくも船頭の黒い頭を壓して突つ立つた】 「當るぜ」と宗近君が一聲叫んでヒヤリとして思はず腰を浮かした時には、既に紫の大岩の下に来てゐた、船頭の黒い頭をあぶなくぶつつけるといふやうなきはどい所までといふのだ。「壓し」は、「アツし」と訓む。

【舳に氣合を入れた】 舳を擬人したのである。船頭は舳に向つて、うんと氣合を入れた。

【舟は碎ける程の勢に】 「勢に」の「に」は

うかといふ勢で。

【一途に】 イチヅに。一筋道に。一筋に。専ら。〔言海〕

【削られて坂と落つる】 今まで見えてゐた水面が、俄に下方に向つて流れ落ちる、その流れ落ちる處を「削られて坂のやうになつて落ちる」と云つたのだ。

【乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である】 舟に乗つてゐる者自身の命が今までながらへてゐるのも不思議のやうだが、それよりも更に不思議な水だ、あの水は全體この先どう落ち着くのか知らといふのだ。「行末」は、「ユクヘ」と訓む。

【どつと落ちて行くか】 この次に「不可思

「で」の意。

【波を呑む岩の太腹に潜り込む】 恰も波を呑むやうなといふので之は、急流の岩をめがけて突進する様である。船はその波の突進してゐる岩の真正面を目掛けて進んだといふのだ。「潜り」は「モグリ」と訓む。

【宗近君は落ちながら云ふ】 瀬を落ちながら。

【急灘】 キフダン。急湍に同じ。崔道融「卻放輕舟下急灘。」〔大宇〕

【空舟】 カラブネ。

【岩角に突張つた懸命の拳を収めて】 下る時には、岩への衝突を避けんが爲め一生懸命に拳を入れたものだが、今ではその姿

も見えずといふ位の意。

【目暗縞】 メクラジマ。經・緯ともに紺色の木綿糸にて織りたるもの。「めくらぢ」ともいふ。【廣辭】「斜に目暗縞を掠めた」は、目暗縞と麻でよつて、所々に目暗縞が見えてゐるほそびき繩を肩に斜にかけたのをいふ。

【根限り】 コンカギリ。

【水行く外に尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を】 水の流れる所以外に僅かな餘地さへ見出しにくい、その僅かな餘地のある岸邊を。「尺寸」は、「セキスン」と訓む。

【穿く】 ハク。

【草鞋】 原文には「ワランヂ」と訓ませてある。

【滅込む迄】 メリコむマデ。穿く草鞋が岩に

すり込む位足に力を入れて。

【うんと踏張る幾世の金剛力に】 保津川を上り下りすることは今始まつたことではない。すつと昔からだ。その何十年かの昔から今日までは等の船頭が上る時には、力を入れて舟を牽くその力の爲にの意である。「踏張る」は、「フンバる」と訓む。「剛金力」コンガウリキ。金剛力士の如き力。強勇無比の力。【廣辭】「金剛力士」は、仁王に同じ。佛法守護の二神の稱。左輔を密迹金剛と云ひ、右弼を那羅延金剛といふ。共に勇猛獯惡の相をなす。【廣辭】

【自然と】 ジネンと。

【牽綱をわが勢に逆はぬ程に】 牽綱の妨

げになるやうに位の意。

【策】 ハカリゴト。

【鈍】 ナタ。刃厚くして、幅廣く、稍弓形をなしたる刀、短き柄あり、薪・柴など斷つに用ひる。【廣辭】

【丁々】 タウタウ。チャウチャウ。物を續け打つ聲にいふ。詩經小雅に「伏木丁々」とある。【大字】

【咽喉佛】 ノドボトケ。俗に喉の中間のたかく出でたる所の稱。(男子に)【廣辭】

【翳して】 カザして。眼の上に陰をなす。

【廣辭】

【のべつ】 「のべたら」と同じ。たえ間なくつづくさま。【廣辭】

【京人形】 京美人を指すのだ。【自然は皆第一義で活動してゐる】 自然界のものはすべて眞劍に活動をしてゐる。決してわき道へそれない。天體の運行の如きもその一例であらう。こゝの水の如きもそれであらう。

【なに人間が自然の御手本さ】 これはあ

【それぢや、やつぱり京人形黨だね】 宗近君は思索家甲野さんの胸中ではわからぬから、こんなことを云つたのだ。「人間が自然の御手本だ。」と云ふ甲野さんの言葉に對して輕率に、「それぢや、やつぱり君も京美人をたゝへる連中の一人だね」と云つたのである。

【京人形はいゝよ。あれは自然に近い。ある意味に於て第一義だ】 前に、都踊りの京美人を見ると殆ど異性の感がない。女もあれ程に飾ると、飾りまけがして人間の分子が少なくなる、と云うてをる。この點から「あれは自然に近い」と云うたので、従つて彼等もある意味に於て第一義だ」と云へるわけである。

【困るのは】 甲野さんの意中は、「前に人間の分子も。第一義が活動するとよいが、どうも普通は第十義位が無暗に活動するから厭になつちまふ」と云つてゐるのでわかる。

【大抵困るぢやないか】 世の中の事は前云つたやうに大抵困るぢやないか、つまらん奴

が活動するのでの意。

【さう困つた日にや云々】 さう困つては手のつけやうがない。人間といふお手本も無視されるわけだから位の意であらう。

【瀬を下つて云々】 瀬を下つて愉快だと云ふのは、それを愉快と感じる人間といふ者があつてからだ。

【瀬を下つてゐるうちは云々】 瀬を下つてゐるうちは、眞剣だから君も第一義だ。

【自然が人間を翻譯する前に云々】 こゝが前の「なに人間が自然の御手本さ」と云つた甲野さんの説明である。自然が人間を美しいとか、壯大だとか感じさせる前に、人間の方から自然を理解し鑑賞してかゝるから、御

手本は矢張り人間にある、人間が主である、自然は客である、と作者の自然觀をにほはしたのである。「第一義の翻譯で、第一義の解釋だ」といふのは同じ事を繰返したに過ぎない。それが絶對の解釋だといふのである。

【肝膽相照らす】 カンタンアヒテらす。兩人互にその心を示して隠す所なきこと。【天字】意氣投合すること。

【默然として】 モクネンとして。だまつた様。

【御互に第一義が】 御互に眞剣な心が。

【言ふものは知らず】 「知者不言」。知つてゐる者は徒に喋々しない。即ち答へないのは知つてゐるからである。

【縈る】 メぐる。音はエイ・ヤウ。めぐりからまること。【天字】

【光琳波】 クワウリンナミ 光琳水と同じ。

畫法の一。尾形光琳の畫中に見る特殊の風致ある水。大小精粗の變化あれど、織物・漆器・彫金・陶器その他裝飾品等に多く應用す。尾形光琳は豊後の豪族緒方惟義に出づ。惟義七世の孫新三郎伊春、足利義昭に仕へて祿五千石を食む。その子新三郎道柏、京都北野天神祠畔なる尾形社に奉仕し、姓を尾形に改むといふ。道柏、本阿彌光二の女を娶りて新三郎宗柏を生む。光二は光悦の養父なり。宗柏、東福門院御所吳服所の用達をなす。その子に主馬宗謙あり、法齋と號し、書を本阿彌光悦

に、畫を光悦の門人兒島宗眞に學べりと云ふ。宗謙は即ち光琳の父なり。光琳幼名は市之丞、長じて藤重郎(一説に藤三郎)、屋號を雁金屋といふ。名は惟富、字は伊亮、法名は方祝、又寂明といふ。既にして日蓮宗に歸依し、薙髮して日受といふ。澗聲・青々・青々齋・堆翠・道崇・長江軒等の諸號あり。家は京都三條通りにありきと云ふ。光琳の師に就きては諸説あり。然れども光琳の私淑したるは實に光悦・俵屋宗達なり。特に宗達を紹述して大成したるものと云ふべし。宗達以外に在りて、土佐派の畫風は光琳の大に研鑽したるものなり。又茶を隨流宗佐に學ぶ。光琳畫を以て業とし、法橋に敍せらる。その家富裕に

して性潤達なりしかば、豪華を衒ひて一時を驚かせり。又意匠の奇抜にして圓様の超凡なるは、時好を追ふ者をして争つてその門に湊らしめぬ。京都銀座の富賈中村内藏之助の依託を受けその妻の爲に衣裳の工夫を案じ、群芳美を競ふ間に立ちて昂然時流を抜きたりと傳ふ。又曾て鞍馬に茶室を作り、庭上に花卉を滿栽して席中に花を挿まず、その挿む時は稀觀の奇花を以てし、又常に庭上の花卉を寫生して自ら益せりといふ。當時の兒女子は光琳團扇を携ふるを誇とし、士君子は光琳印籠を帶ぶるを得意とせりと云ふを見ても、その當世に重んぜられしことを知るべきなり。又或年の春、銀座方と嵐山に遊びて花を賞す。

一行携ふるところ、皆金銀螺鈿を裝したる重箱にして、競ひて華麗豪華を誇れり。而して光琳獨り筍皮に握飯をつむ。之を披くに及び、つゝみに一面の金箔を押し、細に山水花鳥を描きて光彩陸離たり。衆相願みて驚く。しかもその歸るに及び、一行悉く重箱を收めしに、光琳はその筍皮を取りてこれを大堰川に投じて顧みざりしといふ。その後事官に知れて京都を逐はる。光琳乃ちその資財をうりて江戸に下り、深川萬年町の富豪冬木五郎右衛門政親の邸に住す。今冬木の辨天祠はその邸宅趾なりと云ふ。冬木氏の妻女の爲に畫け

りといふ秋草の綾衣は今東京帝國博物館に存す。光琳江戸に在ること一年餘、赦に遇うて京師に還り、謹慎してその晩年を送り、享保元年六月二日歿す。年五十六とも、六十二とも、六十三とも云へど、暫く五十九歳説に従ふ。京都小川頭妙顯寺内本行院に葬る。(百料)

【大悲閣】 嵐山の西方山腹にあつて、千光寺大悲閣といふ。本尊は惠心僧都作の千手觀音。閣中に大井川の疏鑿者として功勞のあつた角倉了以の像があり、又傍にその墓碑(林道春撰文)がある。芭蕉の句に「花の山二町のぼれば大悲閣。」

鑑

賞

紀行文とも見られるが、寧ろ保津川の急湍の動態を遺憾なく寫した文といふべきであらう。「自然は

不言の裡に吾等に一の眞理を訓へてゐる。」といふことを中心人物の口を借りて暗示したものである。

凡そ物は第一義の活動即ち眞剣な活動ほど目ざましいものはない、男らしいものはないのである。曾て誰かの「機關車」と題した小説を毎日新聞で見たことがある。靜止してゐる時の機關車は單なる機械に過ぎないが、非常なる速力で疾驅してゐる時の彼は全く人格者だ、と云ふ意味だつたと思ふ。

これは機關車には限らぬ。雷鳴のはたゞく時にも、それが科學上の智識は別として、或る人格を有した一威力者或は神が猛威を逞しうするのだと考へられるのも當然だ。本課の作中に表はれた二青年は始め夢窓國師の開山たる天龍寺を見て彼の記念として今日まで残つてゐる寺と彼の偉人たることを嘆稱した——國師は生涯眞剣なる生活をつづけた意味から。處が彼等は保津川の急流を下つて更に自然の壯觀なる活動に驚かされた。併し思索家の青年は、やはり人間の方が偉大だと云うて居る。人間が自然を理解して偉大だ、美しいと感じてこそ自然の價値が定められるので、やはり人間がすべての手本だと結んでゐる。思索の方から銓索すると右のやうに考へられるが、教授に當つては、前述べたやうに「自然の與へる暗示」位でよからうと思ふ。

由來著作は、第一義にのみ觸れるのが人生のすべてではないと云ふ主張者である。本課の如きは「虞美人草」といふ長篇小説中に於ける低徊趣味に屬するものである。従つて思索方面のみに捕はれ

てもなるまい。叙景に叙事に作者獨得の筆のはすみを味はせることも大切なことであらう。形式に於て、水の奇・巖の雄を叙して絶景たるを想はしめ、殊に修辭上に於ても注意すべき事が多々あると思ふ。「妙な舟だな」「愈々來たぜ」「なるほど」「あれだ」「當るぜ」「少しは穩かになつたね」等の會話で叙述を進めて行つたのも面白い。又船頭の語を交へて、地方色を表したのも面白く、急湍の通過を叙して「船頭は至極冷淡である」と受けたのも巧みな抑揚である。

すべて作者の文は一通り讀むと面白いと思ふが、考へると考へる程含蓄の多い作である。本課でも作者の人生觀なり自然觀なりが窺へようと思ふ。

備 考

一、本課採擇の第六篇の始に次の文がある。

山門を入る事一步にして、古き世の緑が、急に左右から肩を襲ふ。自然石の形狀亂れたるを幅一間に行儀よく並べて、錯落と平らかに敷き詰めたる徑に落つる足音は、甲野さんと宗近君の足音だけである。

一條の徑の細く直なるを行き盡さざる此方から、石に眼を添へて遙かなる向うを極むる行き當りに、仰げば伽藍がある。木賊茸の厚板が左右から内輪にうねつて、大なる兩の翼を、險しき一本の脊

筋にあつめたる上に、今一つ小さき家根が小さき翼を伸して乗つかつて居る。風^{カゼ}抜きの明り取りかと思はれる。甲野さんも、宗近君もこの精舎を、尤も趣ある横側の角度から同時に見上げた。

「明らかだ」と甲野さんは杖を停めた。

「あの堂は木造でも容易に壊す事が出来ない様に見える」

「つまり恰好が旨くさう云ふ風に出来てるんだらう。アリストートルの所謂^{フオーム}理形に適つてるかも知れない」

「大分六づかしいね。——アリストートルは如何でも構はないが。この邊の寺はどれも、一種妙な感じがするのは奇體だ」

「舟板塀趣味や御神燈趣味とは違ふさ。夢窓國師が建てたんだもの」

「あの堂を見上げて、一寸變な氣になるのは、つまり夢窓國師になるんだな。ハ、、、。夢窓國師も少しは話せらあ」

「夢窓國師や大燈國師になるから、こんな所を逍遙する價值があるんだ。只見物したつて何になるもんか」

「夢窓國師も家根になつて明治迄生きてゐれば結構だ。安直な銅像より餘つ程いゝね」

「さうさ、一目瞭然だ」

「何が」

「何がつて、この境内の景色がさ。ちつとも曲つてゐない。どこ迄も明らかだ」

「丁度おれの様だな。だから、おれは寺へ這入ると好い氣持になるんだらう」

「ハ、、さうかも知れない」

「して見ると夢窓國師がおれに似て居るんで、おれが夢窓國師に似てゐるんぢやない」

「どうでも、好いさ。——まあ、ちつと休まうか」

と甲野さんは蓮池に渡した石橋の欄干に尻をかける。欄干の腰には大きな三階松が三寸の厚さを透かして水に臨んでゐる。石には苔の斑が薄青く吹き出して、灰を交へた紫の質に深く食ひ込む下に、枯蓮の黄な軸がすい〜と、去年の霜を彌生の中に突き出してゐる。

宗近君は燐火を出して、烟草を出して、しゆつと云はせた燃え残りを池の水に棄てる。

「夢窓國師はそんな惡戯はしなかつた」

と甲野さんは、腰の先に、兩手で杖の頭を丁寧^{テイジン}に抑へてゐる。

「それだけ、おれより下等なんだ。ちつと宗近國師の眞似をするが好い」

「君は國師より馬賊になる方がよからう」

「外交官の馬賊は少し變だから、まあ正々堂々と北京へ駐在する事にするよ」

「東洋専門の外交官かい」

「東洋の經綸さ。ハ、ハ、ハ。おれの様なのは到底西洋には向きさうもないね。どうだらう、夫とも修業したら、君の阿爺位にはなれるだらうか」

「阿爺の様に外國で死なれちや大變だ」

「なに、あとは君に頼むから構はない」

「いゝ迷惑だね」

「こつちだつて只死ぬんぢやない、天下國家の爲に死ぬんだから、その位の事はしても宜からう」

「こつちは自分一人を持って餘して居る位だ」

「元來、君は我儘過ぎるよ。日本と云ふ考が君の頭のなかにあるかい」

今迄は眞面目の上に冗談の雲がかゝつて居た。冗談の雲はこの時漸く晴れて、下から眞面目が浮き上がつて来る。

「君は日本の運命を考へた事があるのか」

と甲野さんは、杖の先に力を入れて、持たした體を少し後へ開いた。

「運命は神の考へるものだ。人間は人間らしく働けば夫で結構だ。日露戦争を見る」

「たま〜風邪がなほれば長命だと思つてる」

「日本が短命だと云ふのかね」

と宗近君は詰め寄せた。

「日本と露西亞の戦争ぢやない。人種と人種の戦争だよ」

「無論さ」

「亞米利加を見ろ、印度を見ろ、亞弗利加を見ろ」

「それは叔父さんが外國で死んだから、おれも外國で死ぬと云ふ論法だよ」

「論より證據誰でも死ぬぢやないか」

「死ぬと殺されるのとは同じものか」

「大概は知らぬ間に殺されてゐるんだ」

凡てを爪弾した甲野さんは杖の先で、とんと石橋を敲いて、慄とした様に肩を縮める。宗近君はぬつと立ち上がる。

「あれ見ろ。おの堂を見ろ。峨山と云ふ坊主は一椀の托鉢だけであの本堂を再建したと云ふぢやないか。しかも死んだのは五十になるか、ならんうちだ。やらうと思はなければ、横に寐た箸を豎にする事も出来ん」

「本堂より、あれを見ろ」

甲野さんは欄干に腰をかけたまゝ、反対の方角を指す。

世界を輪切りに立て切つた、山門の扉を颯と開いた中を、——赤いものが通る、青いものが通る。

女が通る。子供が通る。嵯峨の春を傾けて、京の人は續紛絡繹と嵐山に行く。

「あれだ」

と甲野さんが云ふ。二人は又色の世界に出た。

天龍寺の門前を左へ折れ、ば釋迦堂で右へ曲がれば渡月橋である。京は所の名さへ美しい。二人は名物と銘打つた何やらかやらを矢鱈に竝べ立てた店を兩側に見て、停車場の方へ旅衣七日餘りの足を旅心地に移す。出逢ふは皆京の人である。二條から半時毎に花時を空にするなど仕立てる汽車が、今着いたばかりの好男好女子を悉く嵐山の花に向つて吐き送る。

「美しいな」と宗近君はもう天下の大勢を忘れてゐる。京程に女の綺羅を飾る所はない。天下の大勢

も、京女の色には叶はぬ。

「京都のものは朝夕都踊トヨノリをしてゐる。氣樂なものだ」

「だから小野的だと云ふんだ」

「然し都踊はいゝよ」

「悪くないね。何となく景氣がいゝ」

「いゝえ。あれを見ると殆ど異性の感がない。女もあれ程に飾ると、飾りまけがして人間の分子が少なくなる」

「さうさ其の理想の極端は京人形だ。人形は器械だけに厭味がない」

「どうも淡粧アツサリして、活動する奴が一番人間の分子が多かつて危険だ」

「ハ、ハ、如何な哲學者でも危険だらうな。ところで都踊となると、外交官にも危険はない。至極御同感だ。御互に無事な所へ遊びに来てまあよかつたよ」

「人間の分子も、第一義が活動するとよいが、どうも普通は第十義位が無暗に活動するから厭になつちまふ」

「御互に第何義位だらう」

「御互になると、是でも人間が上等だから、第二、第三義以下には出ないね」

「是でかい」

「云ふ事はたわいがなくつても、そこに面白味がある」

「難有いな。第一義となると、どんな活動だね」

「第一義か。第一義は血を見ないと出て来ない」

「それこそ危険だ」

「血で以てふざけた了見を洗つた時に、第一義が躍然とあらはれる。人間はそれ程輕薄なものなんだよ」

「自分の血か、人の血か」

甲野さんは返事をする代りに、賣店に陳べてある、抹茶茶碗を見始めた。土を捏ねて手造りにしたものか、棚三段を盡くして、あるものは悉くとほけて居る。

「そんなとほけた奴は、いくら血で洗つたつて駄目だらう」と宗近君は猶まつはつて来る。

「是は……」と甲野さんが茶碗の一つを取り上げて眺めて居る袖を、宗近君は斷りもなく、力任せにぐいと引く。茶碗は土間の上で散々に壊れた。

「斯うだ」と甲野さんが壊れた片を土の上に眺めて居る。

「おい、壊れたか。壊れたつて、そんなものは構はん。一寸こつちを見る。早く」

甲野さんは土間の敷居を跨ぐ。「何だ」と天龍寺の方を振り返る。向うは例の京人形の後姿がぞろぞろ行くばかりである。

「何だ」と甲野さんは聞き直す。

「もう行つてしまつた。惜しい事をした」

「何が行つてしまつたんだ」

「あの女がさ」

「あの女とは」

「隣りのさ」

「隣り？」

「あの琴の主さ。君が大いに見たがつた娘さ。折角見せてやらうと思つたのに、下らない茶碗なんかさぐくつてゐるもんだから」

「そりや惜しい事をした。どれだい」

「どれだか、もう見えるものかね」

「娘も惜しいがこの茶碗は無茶な事をした。罪は君にある」

「有つて澤山だ。そんな茶碗は洗つた位ぢや追つ付かない。壊してしまはなけりや直らない厄介物だ。全體茶人の持つてる道具程氣に食はないものはない。みんな、ひねくれてゐる。天下の茶器をあとめて悉く敲き壊してやりたい氣がする。何なら序だからもう一つ二つ茶碗を壊して行かうぢやないか」

「ふうん、一個何錢位かな」

二人は茶碗の代を拂つて、停車場へ来る。浮かれた人を花に送る京の汽車は……(と本文に続く)

二、徳富蘆花著「死の蔭に」の一節に、保津川の急流を保津の船乗場から嵐山まで下つた時の記事があるから文の對照上参考せられたい。

修善寺病中吟

漱石

菊の雨われに聞ある病かな
菊の色縁に未だし此の晨
月を亘るわがいたつきや旅に菊
起きもならぬわが枕邊や菊を待つ
生き返へるわれ嬉しさよ菊の秋

八 晩春の別離

作者

【島崎藤村】 明治五年二月十七日長野縣西筑摩郡神坂村木曾路が街道であつた時代の馬籠驛(今は中央線の落合川停車場から一里ばかり奥に當る)に生れた。十三年、東京京橋區泰明小學校に入學、(九歳)二十年、明治學院入學、(十六歳)二十七年、雑誌「文學界」の創刊にあづかり、初めて文學生活に入つて行くやうになつた。(二十三歳)二十九年、北村透谷の一周年忌を迎へ、亡友の爲に「透谷集」を編んだ。東北學院の教師として仙臺に赴くやうになつたのもこの年であつた。(二十五歳)三十年、「若菜集」を出した。この最初の詩集は仙臺名影町の三浦屋といふ宿屋で書いた。雑誌「文學界」廢刊。仙臺には滿一年程居た。東北學院を辭して、この年のうちに東京へ歸つた。(二十六歳)三十一年、詩文集「一葉舟」を出した。郷里にある姉の家に一夏を送つて詩集「夏草」を書いた。(二十七歳)三十二年、小諸塾の教師として信州小諸に赴いた。動搖して常のなかつた生活も過ぐる仙臺の一年でいくらか落ちつくこ

八 晩春の別離

とが出来、小諸へ行つてから更に大いに心を安んずることが出来た。この年、函館の秦冬子と結婚した。(二十八歳)三十三年、詩集「落梅集」を出した。「千曲川のスケッチ」の稿を作りはじめた。長女緑生る。(二十九歳)三十四年、小説として試作「舊主人」を雑誌「新小説」に寄せたが、發賣を禁止された。短篇「藁草履」もそれと前後して出来た試作の一であつた。(三十歳)三十五年「藤村詩集」の全本が出た。次女孝子生る。(三十一歳)三十六年、「水彩畫家」を書いた。この兩三年の間には六つほどの短篇を公にした。(三十二歳)三十七年、「破戒」の稿を起した。日露戦争に際會し、當時の出版界と著作者との關係に安んじられないものがあつて、自費出版を思ひ立ちその資を得るに苦しんで、函館の秦慶治氏を訪ふため不安な戦時の空氣の中を北海道へ旅した。三女縫子生る。(三十三歳)三十八年、七年の小諸を辭し、東京の郊外西大久保に移つた。「破戒」脱稿。長女緑死去。次女孝子死去。三女縫子死去。この年長男楠男生る。(三十四歳)三十九年、「綠蔭叢書」第一篇を出版した。最初の短篇集「綠葉集」を編んだ。郊外生活の記念としては短篇「家畜」を残して置いて、西大久保から淺草新片町に移す。(三十五歳)四十年、「春」を東京朝日新聞に連載した。これは新聞のために日々創作の筆を執つて見た最初の時であつた。次男鶏二生る。(三十六歳)四十一年、「綠蔭叢書」第二篇を出版した。田山・蒲原・武林氏と共に修善寺から天城山を越え、伊豆地を旅行し、「伊豆の旅」を書いた。この年第二の

短篇集「藤村集」と、感想集「新片町より」とを單行本にまとめた。三男翁助生る。(三十七歳)四十二年「家」上卷に着手した。四十三年、四女柳子生る。妻冬子死去。「家」下卷を脱稿した。(三十九歳)四十四年、「綠蔭叢書」第三篇を出版した。この年、「千曲川のスケッチ」を發表し、第三の短篇集「食後」をも單行本にまとめた。(四十歳)大正元年、父正樹の遺稿歌集「松が枝」を編んだ。第四の短篇集「微風」と、感想集「後の新片町より」とに發表したものは多くこの年に書いた。(四十一歳)二年、神戸からフランスの旅に上つた。佛國マルセイユ港着。リオンを経て、パリに入つた。パリーのポオルロワイアルの旅窓にあつて、東京朝日新聞宛にフランスだよりを送りはじめた。(四十二歳)三年、パリーの旅客で「櫻の實の熟する時」に着手した。最後のフランスだより「平和の巴里」を一冊にまとめた。歐洲大戰に際會し、しばらくパリーの動亂を佛國中部オート・ヴェンヌ洲、リモオジュの田舎町に避けた。パリへの歸途西部を旅した。(四十三歳)四年、第二のフランスだより「戦争と巴里」を一冊にまとめた。(四十四歳)五年、三ヶ年の巴里を辭し、英國ロンドンより歸來の途に上つた。歸國後東京芝二本榎の假寓にゐて、「故國に歸りて」一篇を東京朝日紙上に寄せた。童謡集「幼きものに」を書いた。(四十五歳)六年、芝櫻川町に移つて、航海記「海へ」を書いた。「櫻の實の熟する時」の稿をついで漸く完成した。(四十六歳)七年、「新生」上卷に着手した。この年、飯倉片町の家に移つた。(四十七歳)

八年、「新生」下巻を脱稿した。童話集「ふるさと」を書いた。(四十八歳)九年、「佛蘭西紀行」、別名「エトランゼエ」起稿。短篇「貧しい理學士」を草した。(四十九歳)十年、「佛蘭西紀行」の稿をつぎ、短篇「ある女の生涯」を草した。長いこと思ひ立つてゐた「透谷全集」の編直しを果して、それを遺族に贈つた。この四五五年の間、母なき子供等の養育のために多くの時と精力とを費した。(五十歳)十一年、「佛蘭西紀行」を完成した。感想集「飯倉だより」を編んだ。長兒楠男は既に十八歳の中學生であるが、中學を辭して、農業見習ひのために神坂村へ赴かうとした。この都會から田園に歸つて行く子を送るため、相携へて木曾へ旅した。この行は亡き妻子等の遺骨を父母が永眠の地なる神坂村永昌寺の墓地に改葬するためでもあつた。この年有島生馬氏等の厚意により、「藤村全集」十二巻を出版した。雑誌「處女地」を編んだ。(五十一歳)十二年正月初、重病にかゝりそれより八ヶ月の間、靜養した、その間には病後の身を養ふために小田原の海濱に赴いたこともあつた。童話集「をさなものがたり」はこの靜養中に書いたものであつた。九月初、東京の大地震。飯倉の小さき住居は幸に大火の災を免れたが、著書の原版の多くをそのため焼失した。神坂村にある長兒に宛て、震災記「子に送る手紙」を書いた。病に、震災に、この年は多事な月日を送つた。(五十二歳)十三年正月、「藤村パンフレット」第一輯を出した。震災記「子に送る手紙」の稿をつぎ、短篇「三人」をも書いた。六月、

「藤村パンフレット」第二輯を出した。末女を伴ひ熱海へ旅し、「熱海土産」を書いた。短篇「伸び支度」を書いたのもこの年の冬であつた。(五十三歳)十四年、感想集「春を待ちつゝ」を一巻にまとめた。短篇「明日」を草した。靜養のため國府津の海岸に赴いた。七月、「藤村パンフレット」第三輯を出した。健康がまだ十分でなかつたので、この後半期はおもに「藤村讀本」六巻の準備に暮した。(五十四歳)十五年、靜養のために千葉の海岸に赴いた。三月に入つて漸く健康の回復を覺えた。發病以來この状態に復するまでに三年餘の月日を要した。四月には末女を伴ひ、郷里神坂村へ旅し、長男楠男の新しい農家を訪ねた。この年、「嵐」「食堂」を草した。(五十五歳)昭和二年、小説「嵐」を一巻にまとめた。(五十六歳)(現代日本文學全集、島崎藤村集、年譜)

高須芳次郎氏曰く、

藤村の「若菜集」は實に詩界の混沌を破つて、若き日本の詩の向ふところを知らしめた劃期的の一産物であつた。内容、詩形、詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は「若菜集」によつて濃度を加へた。氏がこれを出して、新體詩人としての顯著な成功を得たわけは、(一)惠念、ヨロツバの詩に讀み耽つて、スキンバアン・ロセツチ等のラフェロ前派の影響を受けたこと、(二)詩形、用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと、(三)藝術的氣稟が

豊かで新時代の感情を代表的に歌ひ出た事、(四)一叙事、叙情両面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學・支那文學の素養が相當にあつた事などによるであらう。氏の戀愛詩は勿論氏の個性の色彩、匂ひはあるが、戀愛詩人として奔放な情想を披瀝したロセツチヤ、「バイロンの再生」と稱せられたスピンバアの肉感的、官能的な叙情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに氏自身、あり餘るほどの情熱を抱いて、孤獨の境、漂泊の旅などに戀を思ひ、美女を思ひ、自然の美を思ひ、憧憬愛慕の感に身を浸したのである。それ等の體驗を透して、氏は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく「若菜集」に歌ひ出たのである。而も氏には、藝術的に細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、その詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして「若菜集」が劃期的なあとを詩壇に印したのは當然のことだ。

氏は更にその翌年初夏には「一葉集」を出し、冬には「夏草」を出して、氏の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には、氏の情熱に一味の沈靜を加へたあとが見える。「夏草」には、氏が、ロマンスの世界から現實の世界へ移つて行かうとした心持が見える。この傾向は、三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化されたことがわかる。センチメンタリズムの殻を破ることは、可なりに困難であつたが、氏はつとめてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築き上げようとしたのであ

る。「一葉舟」では、曾て熱烈に戀を歌つた氏が、「百磁花瓶賦」で、失戀の藝術家が心的苦悶のうちから創造した純白の花瓶に現はれた美の心を歌つた。その他「晩春の別離」「月光」などに於ても、氏の沈靜に赴き始めて詩情の閃きを見せた。「夏草」になると「農夫」「新潮」など、現實生活を歌つたものが新しく眼に着く。戀の夢から次第に醒めて、現實に眼をうつした氏の心境が漸く鮮かにならうとして居た。「落梅集」になると、労働や事業を愛して、根強く現實に生きて行かうとする正直な人々を心から嘆美して居る姿が、はつきり出て來てゐる。勿論、それには教訓的な調子が加はつて、詩趣を稍減する嫌ひはあるが、プロレタリアに早く同感した氏の博い愛の心がわかる。氏の詩人としての生涯は茲に至つて轉機に起つて、詩に執するか或は散文の方へ行くかとなつた。が、氏は思ひ切つて、散文の方へいつたのである。(日本現代文學十二講)

出 所

「藤村詩集」 全一冊。明治三十七年九月四日、春陽堂發行、定價貳圓。「若菜集」「夏草」「落梅集」の合本である。本課は、「夏草」の中から採擇した。合本詩集初版の序に曰く、

遂に新しき詩歌の時は來りぬ。そは美しき曙のごとくなりき。あるものは古の豫言者の如く呼び、あるものは西の人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新聲と空想とに酔へるがごとくなりき。う

らわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。傳説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壯大と衰頹とを照せり。新しきうたびとの群の多くは、ただ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき。されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを、われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる。なげきとわづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無

草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはすなり。

とあるので、本詩集の主意は明かである。

要 旨

晩春の頃、京畿に名勝古蹟を探らうとする友と別離する情を叙し、その行程を思ひ遣つて、三千年來の夢を包める彼地の様を、憧憬的な典雅な詞で詠じた長篇の抒情詩である。一聯一聯と場所が變つて行くに隨つて想も變つて行くが、唯作者の自然と藝術との美に憧れる心持は一貫してゐる。

1、形式のよく整つた明治時代の所謂新體詩（七五調）の一例を朗讀させて、その妙趣を鑑賞させた。

2、惜春と分袂の情の美しき表はれをこの詩に味ふと共に、畿内の古へと、残つた藝術と、その風光に對するあこがれとが、この詩の基調となつてゐることは特に注意したい。

梗 概

全體は七聯から成つてゐる。

第一聯では、初の四句に於て晩春の哀情と別離の恨とを述べ、先づ全詩の結構を豫想させ、後の六句

に於て送別會場に於ける四圍の風物を描いて光彩を添へ、
第二・三・四・五・六聯に於ては友がいよ／＼名残を惜しんで袂を別ち、都を出立してから、諸方をさまよひ歩く旅中の情景を想像して詠み、
終りの第七聯では初の八句に於ていつか時の移つて行つた送別會場の四圍の光景を重ねて寫し、中の五句に於て別離の情懷を抒へ、最後の二句に於て將來の希望をこめて結んである。

解 釋

【また短きは云々】 春の暮れるのを惜しんで、極めて短く感じるといふのである。

【花ちかき】 花の近く咲いてゐる。

【高樓】 タカドノ。(一) 高く造りたる家。

又、二階造り以上の家。(二) 高き壇。壇。廣辭
こゝは(一)

【緑に迷ふ云々】 晩春のことであるから、木々が新緑をつけてゐる。その間に行き迷ふ

鶯が、立ちこめた霞の中に空しく鳴いてゐるといふのである。「鳴きかへる」は、しばしば鳴く意。

【白き光は云々】 「白き光」は、きら／＼と白く見える光。晩春の日光が、今去らうとする春の女神の車駕を照らすのが、何となく白く感ぜられるといふのである。

【佐保姫】 サホヒメ。佐保は奈良の都の東に

ある地。東は春を掌るといふ義によりていふ。春の神の稱。天國 春の女神。春を掌るとされる想像上の神。この名は奈良朝の時から起り、奈良市の東に佐保山があるのに因るといふ。古來この女神を春を染める神とし、霞又は花をその服飾になぞらへて佐保姫の衣といふ。秋の女神とされる立田も亦、山の名で、奈良縣平群郡にある。兩山は奈良市の東西にあつて、四方を四季に配すると東は春、西は秋にあたるからいふのである。

【第一聯通釋】 暮れて行く春ほど、速かに過ぎ去る「時」が又とあらうか。去り行く友との離別ほど、深い恨が又とあらうか。君を送つて花近く咲けるこの高樓に別れの盃を酌め

ある地。東は春を掌るといふ義によりていふ。春の神の稱。天國 春の女神。春を掌るとされる想像上の神。この名は奈良朝の時から起り、奈良市の東に佐保山があるのに因るといふ。古來この女神を春を染める神とし、霞又は花をその服飾になぞらへて佐保姫の衣といふ。秋の女神とされる立田も亦、山の名で、奈良縣平群郡にある。兩山は奈良市の東西にあつて、四方を四季に配すると東は春、西は秋にあたるからいふのである。

ば、晩春新緑の樹の間にはたちこめた霞の中に鶯が空しく鳴き、早くも夏らしい日光はまぶしく春の終らうとするのを知らせ顔にきら／＼と輝いてをる。

【東膽吹】 ヒガシイブキ。東方に聳える膽吹山。近江國坂田郡にある山。近江・美濃の境に聳立し、海拔四三〇〇尺。山中に有名な伊吹艾が多い。日本武尊が御東征の歸途、この山の悪神を退治しようとして病を得られてから、史上にあらはれた。平安朝には七高山の一と呼ばれ、江北の嶺山とされた。

【比叡】 ヒエ。京都市の東北に峙ち、山城、近江の二國に跨つてゐる。高さ二七〇〇尺。近江國坂本村から五十町で頂に達する。絶頂

を四明嶽といふ 山中に日吉神社、延暦寺及びこれに附屬した天台宗の諸寺院が散在してゐる。比叡山は二峰に分れ南峰は高く、こゝに東塔・西塔がある。北峰は稍低くて、こゝに横川がある。高いのを大比叡といひ、低いのを小比叡といふ。京都から望むと、前即ち南の大比叡が兀然として聳え、小比叡はその陰になり、北上するに従つて二峰の別が明かになる。地名

【君は行く雲と】「君は行く」を、「行く雲と」にかけてある。

【比良】 ヒラ。近江國滋賀郡木戸小松二村の西に横互し、山勢雄偉、海拔二九〇〇尺。膽吹と相對して最も高いので雪の降るのが早

【日は行きかよふ云々】 奥深い山々ではあるが、日光は行き通ふ深山幽邃な光景を仰ぎ、またこの沈靜した湖上の波に對すると、妙想は、譬へば水の湛へるやうに充ち溢れることであらうといふのである。「想を湛ふ」は、湛へるやうな豊富な想を波に寄せて言つたのである。第三句の「懐へば」は、文法上「湛ふらん」にかゝる。

【第二聯通釋】 君はこれからあの雲と同じやうに身も心も軽く、帝都を辭して京畿地方に旅行するのであるが、おもへばその旅程には琵琶湖も通るが、君がその湖畔をさまよふ時、東には高く聳える膽吹山、西の方には比叡や

比良の諸峰、日の出で入るそれらの山々が、靜かに聳えて湖水に投影する幽寂な眺に對しては、いかに優れた詩想が君の胸奥深く醸されることであらうか。

【流は空し云々】 法皇は、白河法皇である。

第七十二代の天皇、後落飾せらる。法皇は嘗て、「天下の意の如くならざるもの、賀茂川の水・すぐろくのさい・山法師なり。」(平家物語卷一、願立の條)と歎ぜられた。しかもその流は今もなほ空しく流れて、法皇の御代は、既に夢のやうに幽かな遠い昔になつた。

【鴨の水】 賀茂川とも鴨川とも書く。水源は一は愛宕郡雲が畑村岩屋から發し、一は鞍馬山の山中に發する。貴船川を併せ、下賀茂

に至つて高野川を合せ、南流して京都市を貫き、西南に走つて下鳥羽に至り桂川に注ぐ。流域凡そ七里、水は甚だ清冽である。

【うつろふ】 光又は影など映る。天國

【みやびの都】 風雅な都、京都のこと。

【鈴鹿の山】 スズカのヤマ。伊勢國鈴鹿郷の西北を擁塞する山嶺の總稱。古は伊賀路加太村の方だけを鈴鹿山と呼んだが、後、近江路を公道としたので、鈴鹿山の稱は、坂下村に移つた。

【波遠く】 山脉の廻々と連なるさま。

【海に落つるを】 山脉が伸びて海に及んでゐるのを、前に「波」と云つたから、「落つる」と云つたのである。

【よろづの恨をば云々】「恨」とは、法皇の御遺恨に思召したといふ縁話で、「想」を「恨」といつたのである。種々の想を、空行く鶯の行方に托するであらうといふ意。

【第三聯通釋】次に京に入ると、鴨川の流は空しく流れて、嘗て白河法皇が、鴨の流について云はれたことなども、徒らに遙かなる昔の夢となつてしまひ、その水に映る山城の、典雅な舊都の、晩春の、霞につままれた姿を見つくして、幾内に近く接してゐる伊賀や伊勢に横はる鈴鹿の蛇々たる山が北より南にのびて、海際に到つて盡きるのを望む時、君はいかにいろ／＼の想を、かの空行く鶯のやうに、それからそれへと馳せることであらう。

う。

【青によし】青丹吉。奈良につづくる枕詞。數説あり。「あをに」は彌百土、「よし」は感動詞にて、「よ」は呼びかけの辭。家を建つるには、先づ土を幾重も積みてならずものなるより、「あをによし、なら」とつづく。(冠辭考)「あをに」は青土、「よし」は冠辭考と同義。(古事記傳)「青土」は黏して用ふれば、「青土ねやし」の約。(古義)この青土は、奈良に産する繪の具なるより、奈良につづけていふ。(古事記傳・古義)

【御堂】ミダウ。東大寺、三月堂などを始め、奈良朝時代の美術の遺つてゐる古寺を指す。

【古き藝術】フルキタクミ。奈良には、佛像・彫刻・建築など古美術が多いから云つたのである。芭蕉の句に、「菊の香や奈良には多き佛たち。」

【伽藍】ガラン。梵語、僧伽藍摩。衆園と譯す。佛道を修する處。寺。(天國)法堂・佛殿・山門・浴室などの具備したのを七堂伽藍或は悉堂伽藍といふ。芭蕉の句に、「奈良七重七堂伽藍八重櫻。」といふのがある。こゝは主として法隆寺金堂の壁畫を云つたのであらう。それは印度アヂヤンターの壁畫などと並んで天下の絶品である。

【遺りなげ】遺つてゐるのを見たならば、の意。韻文の一種の省略法。

【韻】ニホヒ。(一)にほふこと。色に染まること。(二)花やかなること。つやつやしきこと。艶麗なること。(三)香。かをり。香氣。(四)ひかり。威光。(五)おもむき。氣韻。こは(五)(天國)

【第四聯通釋】かくていよ／＼春の去る頃、奈良の舊都を訪れて、日頃から君が憧憬してゐた、古都の堂塔に遊ぶ時、そこにのこつた壁畫など、千年の古色を湛へた古代藝術を見たならば、その氣高い懐しい風韻が君の身にしみじみと沁みわたつて、どれほど深い印象をとどめることであらう。

【秋津の鳥が根】神武天皇が、國見し給うた時、「蜻蛉の臂帖せるがごとし。」(神武紀)と

詔はせられてから秋津の名は起つた。もと大和國葛城室の地にこの名があつた。孝安天皇の皇居以來、秋津島夜麻登の稱があり、後遂に日本の異稱として用ひられるに至つた。「島が根」は「島」といふに同じ。〔天國〕

【黒潮】 クロシホ。日本南海の海流にて、暖流の一。暗藍色を帯び、一見附近の清水と區別せらるゝが故にこの名あり。フィリッピン群島の邊より發し、臺灣に觸れて、東北の方向をとり、四國・本州等の東南岸を洗ひ、東北に向ひて後、東へ折れ、北アメリカの方に流るゝもの。黒瀬川。日本海流。〔天國〕

【鳴門】 ナルト。阿波國の東北端と淡路島との間、海水が盤渦をなす所にある。大鳴門、

小鳴門といひ、舟航が甚だ危険である。これは内海と紀伊水道との潮汐の不平均から生ずるので、その音は數里の外に聞える。

【天際】 アマギハ。大空と同じ。

【第五聯通釋】 さてまた我が國の、南翼ともいひつべき紀州の南岸を、めぐつて流れる黒潮が鳴門に沸り落ちようとするあたりに立つて、白日の光遠く、雲間を洩れて、閃々と波上に映する、茫洋たる大海の、波が躍る壯觀を望み見た時には、君の胸の鼓動は如何に高くなり、君の血汐は涌き返るに違ない。

【名に負ふ】 (一)名として負ひ持つ。名のる。(二)名高し。有名なり。評判高し。兼ねて聞きたるにたがはず。〔天國〕 こゝは(二)。

【歌枕】 ウタマクラ。歌人の枕言にする義なりとも、又和歌の枕言に詠み入るゝ義とも云ふ。名所。〔天國〕 勝地吐懷篇に、「和歌之有」

名所、猶寢之有枕。因枕夢熟、因名所佳句成、歌枕之稱蓋如是。」

【波に千とせの色映る】 明石は白沙青松の地。故に波に千年の翠うつるといつたのである。

【明石の浦】 播磨國明石郡垂水村の島崎以西の曲浦をいふ。又明石潟とも呼ぶ。或はこの名を廣く明石の海上に推及していふこともある。

【あさばらけ】 朝、ほのぼのと明るくなりたる時。夜あけがた。〔天國〕

【舞子の濱】 播磨國明石郡垂水村大字西垂水から宇山田に至る海濱の稱。明石海峡の北側で白沙青松の勝地である。

【狭霧】 サギリ。狭は接頭語、霧に同じ。

【千鳥の聲を云々】 金葉集に、「關路千鳥といふことをよめる」といふ題で、源兼昌の歌に、「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲にいくよねざめの須磨の關守。」とあるなどを思ひ出して遠い昔を偲ぶであらうといふのである。「千鳥」體は鶺鴒に似て小さく、嘴は蒼黒色にて、背は青黒く、腹白し。尾は短く、脚は細長くして後趾を缺く。〔天國〕

【さすらふ】 流離。よるべなくてさまよふ。さまよひありく。流浪す。漂泊す。流寓す。

〔天國〕

【第五聯通釋】 更に進んで名高い歌名所、

波の色も昔ながらの色を湛へてゐる明石の浦の朝景色や、松に千古の響を傳へる舞子の濱の夕暮の景色や、もしくは海上雲斂り、對岸淡路の島影暗く、狹霧立ちこめた中を鳴きつれて行く千鳥の聲を聞いたならば、旅情そぞろに動いて、濱邊を歩きつ戻りつ、遠き過去の追想も、ひし／＼と迫つて來るであらう。

この次に

げに君がため山々は
雲を停めん浦々は
磯に流るゝ白波を
揚げんとすらんよしさらば

旅路はるかに野邊行かば

野邊のひめぐと森行かば

森のひめぐとさぐりもて

高きに登り天地の

もなかに遊び大川の

流れを窮め山々の

神をも呼ばひ谷々の

鬼をも起し歌人の

魂をも遠く返しつゝ

清しき聲をうちあげて

朽ちせぬ琴をかき鳴らせ

あゝ歌神の吹く氣息は

絶えてさびしくなりにけり

ひびき空しき天籟は

いづくにかある九つの

藝術の神のかんづまり

かんさびませしとづくにの

阿典の宮殿の玉垣も

今はうつろひかはりけり

草の緑グリースの

牧場を今も覆ふとも

みやびつくせしいにしへの

笛のしらべはいづくぞや

かのバビロンの水青く

千歳の色をうつすとも

柳に懸けしいにしへの

琴は空しく流れけり

とあるが、こゝには省いた。

【欄干】 オバシマ。てすり、らんかんの古

名。和名類聚抄に、「軒檻。漢書註云、軒檻上

板也、殿上欄也と。」ある。

【契】 チギリ。(一)ちぎること。互にいひか

たむること。契約。約束。(二)前世よりの約

束。宿縁。(三)縁。因縁。ゆかり。〔天國〕

【家苞】 イヘット。吾が家に持ち歸るみや

げ、**〔大國〕**「苞」は和訓栞に、「萬葉集に、裏の字をよめり。裏むの義なるべし。山づと、濱づと、道行づと、田舎づとなどは、その土産をいひ、手向のつと、家づと、都のつとなどは、その土産をもてこんずる所をいへば、共に通へり。」とある。

【第七聯通釋】さらば、名残は盡きないが、今は袂を分たう。見よ欄干には夕暮の影深く藤の花もほのかに垂れてゐる。大空の霞の中

鑑賞

作者の詩は、優婉な情緒と、上臈の如くなよやかな詞句に其の美しさがある。本課はその代表的の一詩であつて、晩春に際して春の世からうつりゆく恨みと名残を惜しむ情とが、親しい友との別れの情と相織り相纏うて、この優婉な麗辭をなしてゐる。この詩を読むも〇は必ずやこの豊かな情緒の中に、春の逝くをなげく心と、友を送る悲しみとが、錯綜して限りない面白味となつて心の琴線にふれ

を、北へ歸る雁の音も、夕榮の雲の色も怒を帯びて君を送らんとしてゐるやうに見える一旦別れては、あゝ再び君と逢つて、昔の友情を温めるのはいつのことであらう。梅も櫻も散つて、柳の緑も深い晩春の名残を、誰とて留めることの出来ないやうに、君をも留めるわけには行かない。唯私への土産として花の色香にも似た美しい君の詩文をもたらせよ。

るに相違ない。又送らるゝ友は山河に歴史に、藝術と風光の粹を集めた畿内の地をめぐる人であるが爲に、兩者は共鳴合奏して、この詩の優しさと美しさ、それは古來我が國民の特性であり、國民文學の特質である。みやびな情趣をうたひ出してゐるのである。この詩の底に、わが國民性にながれた美しさが脈うつてゐることは、どの詞句にも古の詩人の面影のふくまれてゐるのもわかる。修辭の法に著しく工夫をこらしてゐることは例へば、

1、對句

時は暮れゆく春よりも また短きは無かるらん
恨は友のわかれより さらに長きは無かるらん

緑にまよふ 巡りて進む黒潮の
白き光は 天際遠き日き日の 島の影くらく

2、雅語

佐保姫の春の車駕、みやびの都ゆく春の、

青丹よし奈良の都、古き藝術の、韻を身にしめて、

3、譬喩

藝術の花の香、秋津の島が根の南のつばさ

4、特に苦心の痕を見るのは詞句の變化である。旅情をおもふ句だけで見ても

いかにすぐれし想をか 沈める波に湛ふらん。 いかによろづの恨をば 空行く鶯に窮むらん。
 いかに韻を身にしめて 深き思に沈むらん。 いかに胸うつ音高く 君が血潮の騒ぐらん。
 いかに浦邊をさすらひて 遠き昔を偲ぶらん。

等、名匠の手法の鮮かさは今更である。

備考

岩城準太郎氏曰く、

「文學界」の詩人は、由來詩風の清高を以て知らる。情操清婉、詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨海を憧憬するが如きは、即ち其の特色なり。星野天知・島崎藤村・平田禿木・戸川秋骨・樋口一葉・田山花袋・松岡國男・馬場孤蝶・太田玉茗等、皆悲痛哀絶の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村・花袋・國男・孤蝶・玉茗等にして、花袋・國男・玉茗は「國民の友」にも出で「抒情詩」に收めらる。其の中にも國男は詞藻穩健にして想像亦溫藉、「抒情詩」の白眉なり。孤蝶は未だ

特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

藤村の詩を「文學界」に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其の名を斯壇に現せしは、二十九年後半に屬し、「一葉舟」「秋の夢」と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かし、よりなり。就中詩人中野逍遙を悼める「哀歌」、朝と暮とを詠じたる「二つの聲」戀さまさまの姿を歌ひし「こひぐさ」、星影水の如き夏の朝、匂ふあやめの邊りに、妻鳥を得んと闘ふ二の雄鷄を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇嘗て見しことなき清新の格調思想なりき。爾來「薄氷」等の諸篇を経て、三十年春「天馬」の傑作を「文學界」に出しぬ。「天馬」は序、雄馬、雌馬の三章、二百三十句に亘る長詩にして、星影夜なく動き、奇瑞箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤が屋の片廂をかりて人の世に生れ出でし雌雄の天馬を詠ざる者。序に於て此の由來を叙し、「雄馬」の章に於ては、朝に富士の雪を踏み夕に御嶽の岩を超え、青雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身を以て、暫く槽檻に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橋の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、青毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて、頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を思ふ。想像雄偉、詞章清新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脫し、理想幽遠、詩境高潔、抒情詩壇の一大運動を劃せり。しかも彼は更に進んで、「深林の道

遙」を「帝國文學」に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃、斧鉞未だ入らざる深林の緑を分け、悠遊自適、靜に自然懷裡に同化し去るが如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の徳を頌し、春の意を語る。一誦先づ幽韻人を襲ふ。……蓋し新體詩以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。云々。(明治文學史)

行春に和歌の浦にて追ひ付たり	芭	蕉
行春や遠巡として遅さくら	燕	村
行春やおもたき琵琶の抱心	同	
春雨の今日ばかりとて降にけり	鬼	貫
紙あます日記も春のなごりかな	子	規
如何にして春惜むやと御狀かな	虚	子

九 新緑のかけ

作者

【近松秋江】 チカマツシウカウ。本名は徳田浩司。近松門左衛門崇拜のあまり自らその姓を冒したといふ。明治九年五月岡山縣和氣郡藤野村に生れ、明治二十七年上京、慶應義塾に學び、後早稻田大學に轉じ英文科を卒業した。明治四十一年讀賣新聞日曜附録に「文壇無駄話」を發表して文名をあげた。その後又「別れた妻におくる手紙」の一篇を公にして小説家としての地位を認められた。

この作は一種悲痛なる氏の實感にもとづく愛慾の悩みを描いた長篇ものである。續いて「疑惑」「舞鶴心中」「葛城太夫」等の作を出したが、深刻なる内部經驗と繊細な情味ある筆で描き出した潤のある文である。長田幹彦氏等と共に情話文學熱を煽つたものといへよう。氏は曾て高野山に上り佛敎の研究に力を用ひたこともある。名を成すべくして成さないやうな作者である。近頃の作としては小説「狂亂」「霜凍る宵」「返らぬ日」「嫌はれた女」「屈辱」等を「改造」「新小説」「女性」等

に出した。批評家中には氏の作品に對し徳田秋聲式と長田幹彦式との表現法を兼ね用ひる態度を非難してゐるものもある。氏は家庭の關係で政治に興味を有し、又歴史の愛讀者で「日本外史」や「十八史略」などの中のロマンチックな所の影響を多分に受けてゐるやうである。尙評論隨筆に、「秋江隨筆」「煙霞」「都會と田園」等がある。

出 所

全一冊。「小品文作法及文範」後藤末雄著。大正七年九月十八日。新潮社發行。定價四十五錢。その序に曰く、

本書は、初學の人々の爲めに小品文の作法を説くと共に、東西諸名家の作品中から、小品文の範とす可きものを抜き來り、これに簡単な評釋を加へた。作法文範相俟つて、小品文のこつといふやうなもの、説き得られる限り説いた。もとより文章の至境は、作法とか説明とかを絶した所にある。併しこの一卷を忠實に讀んだならば、「小品文はいかにして書く可きか」は、十分に會得出来るであらう。それと共に、すべての文章を書く根本的用意といふやうなものをも、會得する事が出来るであらう。作法と文範とは必ず相俟つ可きである。……

本課は文範篇から採擇した。

要 旨

自由な氣分で書かれた隨筆的のものを味はせたい。作者の態度は偽りが無い、従つて地味であるが、その中に生きた地方色と季節の特色とが描かれてゐる點を玩味させたいと思ふ。

段 落

- 一、赤城の森蔭……新緑に照輝いてきた。(四六頁の二行目まで)
また新緑の候になつた、作者鳥兎匆々の歎辭で、この文の前提である。
- 二、去年の十月の初つ方……「あれが直また芽が出てくる。」といつて通つた。(四八頁の八行目まで)
二節から四節までは作年の回想で分節すべき性質のものでないが、便宜上わけしておく。
十月上旬から十一月頃にかけて散る櫛の落葉を秋雨の降る時と秋晴の時との二方面から觀た叙景と感想である。
- 三、境内にはまた銀杏の老樹が……黄色な實がまたぼたぼたと落ちる。(五〇頁の四行目まで)
十月半ばすぎから木枯が吹き出す、それにつれて散る銀杏の葉と實の叙景である。
- 四、その午後の三時と……防害の長城を築いてゐるかの様に思はれるのである。(五一頁の六行目まで)
 - 1、十月半ばすぎの午後三・四時頃の秋晴の野末の叙景である。

2、落葉したから、富士が見えるといふのである。それが十一月・十二月となると、連山雪を頂くといふのだ。

五、私はつい昨日まで……(終りまで)

つい昨日までそんな景色を見てゐたと思うたのに、最早新緑の時節になつたのだと第一節に應じるのである。

解 釋

【赤城の森蔭】 アカギのモリカゲ。東京市牛込區にある赤城神社の森蔭。自分の家の位置を示したのである。

【凭つて】 ヨつて。凭は、音ヒヤウ。ヘイ。よる。もたたる。體をもたせかける。よりかかる。【大國】

【際涯】 サイガイ。かぎり。はて。きは。【大國】

【哀愁】 アイシウ。かなしみうれふ。【大宇】
【唧つ】 カコつ。歎きいふ。わび言いふ。うらみ思ふ。【大國】
【新緑】 初夏の頃の若葉のみどり。新らしき緑葉。【大國】
【初つ方】 ハジメつかた。「つ」助詞。その所屬の意を表はす語。の。「天つ神」「沖つ風」記上「には都とり、かけは鳴く。」同「へ都波、

そにぬぎうて」神代紀下「あまさかるひな菟めの、い渡らすせと。」【大國】こゝは初め頃、上句の意。

【秋雨】 アキサメ。

【屋宇】 オクウ。屋根。

【櫛】 ケヤキ。楓。楡科の落葉喬木、山野に自生し、又、庭園にも栽培せらる。幹の高さ數丈周圍丈餘に達するものあり。葉は互生し、長卵形にして先端尖り鋸齒あり、四五月頃、新葉と共に花を開く。花は淡黄綠色の小形花にして雌雄同株なり、核果を結ぶ。材質極めて強堅にして木理置しく且香氣を有し黄褐色を帯ぶ、建築・器具その他種々の材料に重用せらる。【廣辭】

【仕切なく】 シキリなく。「仕切」は、へだて。かぎり。【廣辭】こゝはひつきりなく。たへずの意。

【縁に傲つてゐた葉】 青々と茂つてゐた葉。

【思ふばかりに】 思ふくらゐに、思ふ程に。

【あてもなく】 こゝでは「むやみに」位の意。

【廂】 ヒサン。庇。(一)上古、母屋の四面にありし狭き室。(二)後世、家の軒に別に差出したる小屋根。(三)軍帽又は學生帽などの額上に差出でたる部分。こゝは(二)【廣辭】

【木立】 コダチ。たちき。はやし。【廣辭】

【心して】 注意して。

【境内】 ケイダイ。(一)さかひうち。區域

内。(二)神社又は佛閣などの境内。〔廣辭〕

【枝頭】 シトウ。枝の先。

【金色の風】 秋風。秋は五行の金に配す、故にいふ。張協の雜詩に、「金風扇素節」、丹露啓陰期。〔成語〕

【心なしに】 無心に。考なしに。無感覺に。

【ノート】 英語 Note Book ノート・ブックの略。手帳。

【わたり】 あたり。邊。

【郷社】 ガウシヤ。神社社格の一。郷邑の産土神にして、府縣社に亞ぐ。地方長官の指定によりて、その例祭並に祈年・新嘗にその郡・市より幣帛・神饌料を供進す。全國郷社員數は二千四百七十一社(大正十一年六月調)な

りとす。明治四年五月、大小神社の社格を設定し、同七月、その定則を制して、調査標準を立てられしことあり。元來神社はその性質よりすれば、氏社神・産土神社・鎮守神社等の別あり。社格よりすれば、官幣社・國幣社、又は府・縣・郷・村社等の差あり。構造よりすれば、大社造・神明造・住吉造・春日造・神明流造・權現造・八棟造・淺間造等の稱あり。(神祇辭典)

【近在】 キンザイ。近き在郷。〔廣辭〕

【鎮守の神】 チンジユのカミ。地方を鎮める神。〔廣辭〕

【老銀杏】 ラウイテフ。樹齡の古い銀杏。「銀杏」、公孫樹・鴨脚樹。公孫樹科の落葉喬木、

た劍舞、當時新に流行したものであらうが未詳。

社寺の境内又は人家の庭園に栽培せらる、幹の高さ六七丈、周圍二丈に達するものあり。葉は扇形にして葉柄を具し、秋日黄變して美觀を呈す。四月頃、新葉と共に花を開く。種子はギンナンといひ食すべし。〔廣辭〕

【例祭】 レイサイ。きまりのまつり。〔廣辭〕

【見せ物小屋】 珍らしき物又は演藝などを人に觀せて、見料を取る小屋。〔廣辭〕

【木枯】 コガラシ。風。木風の轉、風は木風の合字。秋・冬吹く疾き風の稱。〔言海〕

【恒例】 コウレイ。つねの儀式。きまりの行事。常例・定例に同じ。〔廣辭〕

【空罐】 アキカン。からつぽになつた罐。

【改良劍舞】 従來行はれたものに改良を加へ

【端唄】 ハウタ。近世の俗謡の稱。二種あり。(一)上方唄中の長唄にあらざるものを總稱していふ。貞享・元祿頃に三味線の新曲多く出で来て、その長篇を長唄と稱したるに對して、短きものを端唄と唱へたりしが、後、三味線の宗家たる檢校・勾當の輩が、その本曲のみを長唄と稱するに及びては、宗家以外にて出來たる新曲、例へば芝居唄の如きもの、或は宗家の手になりたりとも一時の戲作といふべきものは、悉くこれを端唄物と稱することゝなりぬ。端唄の名の書に見えしは元祿の「松の葉」を初めとすべく、同書には既

にこれを分ちて、普通の端唄を本調子・二上り・三下りの三種とし、その外に騒ぎ唄の目を立て、すべて四種類に分てり。そのうち本調子の端唄は大抵短篇なれど、二上り以下には長唄よりも長きもの頗る多し。元祿・享保の頃には近松新左衛門・紀海音・松田文耕堂・江島其積・柳里恭・英一蝶、稍降りては近松播磨・流石庵羽積・茶ト等の作あり。短篇の洒脱輕妙なるもの尠なからず、蓋し近世の俗謡中小唄に次で最も注意すべきものは、上方唄の端唄なるべし。(二)歌澤節の歌曲をいふ。文化・文政以降の新作もあれど、主として在來の端唄又は「めりやす」の唱歌をとりて新に節附をなしたるものなり。その歌曲は多く

時代思潮に伴はれて、輕薄にして淫靡なる傾向を帯びたれど、往々佳作なきにもあらず。

〔百科〕

【吹撓め】 フキダワめ。

【扇の葉】 銀杏の葉。

【生のまゝ】 ナマのまゝ。生きたそのまゝ。

【小さい枝ごと】 葉のみでなく小さい枝も

一緒に。

【礫】 ツブテ。飛礫。投げやる小石。〔廣辭〕

【一圓に】 一面に。

【末枯れて】 ウラガれて。草木の梢又うら葉

枯れること。「末」は、梢。〔天國〕

【亭々】 テイテイ。(一)高く聳え立つ貌。

(二)物の適度なるに云ふ。〔天字〕 こゝは(一)

【穂尖】 ホサキ。(一)穂のさき。穂のはし。

(二)刃のさき。きつさき。〔廣辭〕 こゝは(二)

【野の末】 野の端。〔廣辭〕

【矢來】 ヤライ。牛込區矢來町。

【家並】 ヤナミ。

【半天】 中天。中空。

【沖す】 沖は沖に同じ。(一)幼し。(二)涌

鑑賞

これは稍、長いもの、そこはかたなく書きすさぶといふやうな、自由な氣分で書かれたものであるが、併し、よく、地方色と、季節の特色とを描き出してゐる。

「見せ物小屋の柱を立てた穴の跡などが、漸次薄れてゆく」

といふやうな、面白い見つけどころが、この文章を活かしてゐる。一種の、物馴れた、情味のある文章である。大體に於ては地味である、地味ではあるが物の見方が正確である。獨斷や、よい加減な空想的な比喩は少しも使つてゐない。綺麗な言葉のあやよりも、自然をしつかり眺め、中心を握つて書

いてゐる作者の心の態度がゆかしいと思ふ。

砂糖の語原

上古は日本・朝鮮・支那に於て、今の如き砂の様な形状をして居る砂糖は無く、蜂蜜から甘味を取つて居た。漢字の「糖」は即ち飴のことである。佛教の傳來後サカラと呼ぶ砂の如くにして糖（あめ）の如き甘いものが印度から泊來した。字を作るに巧妙であり而も梵音を保持するに最も忠實であつた當時の學者は之を沙糖と命名した。その後次第に砂糖と書くやうになつた。何となればサンスクリットのサツカラも巴利語のサカラも共に砂糖のことであり、同時に甘蔗糖のことであるからである。又古今の歐羅巴語にて砂糖の意味を表明する言葉は大體この梵語の變形したるものを使用して居る。加之饒近サカラは砂糖の學術上の術語となり、しかも一千有餘百年の星霜を経て、サカラなる梵語が世界を一週して再び我國語中に輸入せられ、茲にサカリンといふ名詞が一つ殖えた。

——上田恭輔、國語中の梵語の研究による——

一〇 大河禮讚

作者

【白鳥省吾】 シラトリシヤウゴ。宮城縣築館町の人、明治二十三年二月二十七日の出生である。早稲田大學英文科出身、嘗て象徴詩を主張してゐたこともあるが、第一詩集「世界の一人」を出すと共にその詩に民主的色彩を多分に帯ぶるに至り、爾後わが國民主詩派の有力な主導者の一人として活躍した。最近大地舎を自ら經營して詩集の自費出版を企て、又雜誌「地上樂園」を出して、新しき農民詩及び農民文學を主唱してゐる。

氏の作詩にはその郷土の東北の田舎に材を取つたものが多く、また民謡風の作もある。又氏も自由詩の熱心な主張者の一人であるが、その主張はむしろ思想的、内容的見地から來てゐるものが多く、直接詩術的には特に根據のある語法といふものは無い、又さういふものを認めず、ひたすら詩の内容と云ふことを重んじるのがその主張である。

大正三年六月、「世界の一人」を象徴詩社より、八年六月、「大地の愛」を抒情詩社より、同五月、「ホイットマン詩集」を新潮社より、同七月、「民主的文藝の先驅」を新潮社より、九年三月、「幻の日に」を新潮社より、十年二月、「樂園の途上」を叢文閣より、同九月、「憧憬の丘」を金星社より、同十一月、「詩に徹する道」を日本評論社より、十一年六月、「共生の旗」を新潮社より、同八月、「若き郷愁」を大鏡閣より、同十二月、「愛慕」を新潮社より、十二年九月、「日時計」を抒情詩社より、十三年九月、「現代詩の研究」を新潮社より、十五年、「野茨の道」等の詩集、翻譯、散文詩集の外、童謡集等多くの著書がある。

作者は、富田碎花、福田正夫氏等と共に民主派の詩人と云はれてゐる。然らば民主派の詩にはどんな特色があるか、これを白鳥氏の言に聽けば、

民衆詩の起原に於てホイットマン、カアペンター、トラウベルの詩に啓發される所多かつたには違ひないが、これらの民衆詩人の詩を讀む時、却つてその類似するところが殆んどないことに驚くであらう。ホイットマンの「草の葉」なり、カアペンターの「民主々義の方へ」なり、トラウベルの「オプテモス」なりに、日本の民衆詩人の詩はその表現の平明と自由とは學んだかも知れないが、内容は極めて郷土的、若しくは性格的なものである。民衆詩人といふと私製何々といふ者あるが如きは、自他の孰れの詩をも熟讀しない結果からの獨斷に過ぎない。

日本の民衆詩人に共通して考へられることは、

- 一、現代に對する情熱を持ち同時に未來へ飛躍する肯定的な精神
- 二、着實なる現實味、ひいてはこれまでの詩人が氣づかなかつたあらゆる人間、あらゆる事物に詩を見出す取材の廣汎
- 三、言葉の自由で平明であること

要するに民主派（民衆派なる語と同意義に解してもいいが、民主々義思想に胚胎した詩派であるから、やはり民主派と呼んだ方が正當に近いであらう）の詩の主張は思想的にはホイットマン、カアペンター等のデモクラシイの精神から出發し、從來の「象牙の塔」風の狭小な抒情的詩歌の埒外に立つて、新しい現實肯定的な立場から、特有の人類愛平等愛の世界を詩の上に打ち樹てようとするところにあり、自然にその用語、詩術等も自由で平明なものを選ぶやうになつて來たものと解していいだらうと思ふ。（百田宗治——詩の鑑賞）

要 旨

大河は實に男性生活の象徴たる眞に背かない。それは單に力強い意志の表現に止まらぬ、そこには優雅な感情が横たはつてゐる。包容力がある、詩趣がある、人間文化の發達には離るべからざる關係

がある事等に就て知らせたい。又この文に於て、作者が経験したものに生命を吹き込んだといふ事と吾々の修養上に深い暗示を與へてゐるといふ、この二點を特に注意したいと思ふ。

段落

- 一、大河は……吾々に無限に畏敬の念を湧かし、力を與へるものなのである。(五三頁の四行目まで) 本課の冒頭である。
- 1、大河は男性生活の象徴である。(五二頁の二行目まで)
- 2、吾々は強健なる意志、優雅なる感情の持主である大河に學ぶべき點がある。(五二頁の一〇行目まで)
- 3、包容力のある大河は吾々に無限の畏敬心を起させ、力を與へる。(五三頁の四行目まで)
- 二、私が東北第一の大河……私は新潟を去つたのであつた。(五九頁の八行目まで)
- 過去の經驗をよみがへらせ、具體的にしたのである。
- 1、自然の力の偉大さと人間の力の偉大さとを嘆賞したと同時に大河が史蹟を聯想させる時は、そこに無限の興趣と哀愁とが起る。(五五頁の八行目まで)——北上川。
- 2、大河の美觀舟遊の氣分——船頭の腕の力に輝いた男性の美。(五六頁の三行目まで)——利根川。

- 3、大河の力強い意志に驚嘆した。(五八頁の六行目まで)——天龍川。
- 4、北國の大河として詩趣を感じた。(五九頁の八行目まで)——信濃川。
- 三、水は低きに就き……(終りまで)

本課の結尾。

人間文化の發達と大河の關係に就いて。

解釋

【禮讚】 ライサン。(一)書名、一卷。具には往生禮讚偈といふ。唐の善導の撰なり。開卷に「勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讚偈」とあり。六時即ち日沒時・初夜時・中夜時・後夜時・晨朝時・午時の禮拜の讚文を撰したるものなり。我が國に淨土教興隆するに方り、漸く流敷し、法然の善導を祖述するに至り、大に流敷し、一門の徒盛に六時禮讚

を唱誦し、一種哀婉の聲調をなし、人心を動搖したりと云ふ。〔百科〕

(二)佛語。三法を禮拜しその功德を讚嘆すること又、その文。盛衰記十七、祇王・祇女・佛前「六時の禮讚聲澄みて、朝暮の念佛いと貴し。〔天國〕こゝは。あがめほめる、敬つてほめたゝへる意。

【大河は力強い思想云々】 大河は力強い主

義主張を有し、固き意志を有するやうに見える。數十百里の山間からその目的へと萬難を排して赴く如き行爲はこの思想意志あるが故であると思ふのである。

【渺茫】 ベウバウ。渺渺に同じ。ひろくして見きはめがたき貌。天字

【ひたすら】 ただそればかりなるにいふ語。

ひとむき。ひたぶる。ひたもの。切に。一途。一概。天國

【象徴】 シヤウチヨウ。英語 Symbol. 象徴とは比喻の最も進んだものである。比喻には聯想作用に由つて成立つ、直喩・暗喩・諷喩の三階級がある。直喩とは例へば、「彼女の眼は魔女の眼のやうだ」の如く、二つのものを比較

して「やうだ」といふ様な言葉で結びつける。暗喩とは、唯「魔女の眼だ」と云つて、譬へらるゝものはその裏に隠して示すもの。諷喩とは、暗喩の一層組織的になつたものである。即ち象徴とは、この比喻から一步を進めて、喩へるものと、喩へられるものゝ區別がなくなり、有機的に混合されたもので、例へば花を以て美人を、筆を以て言論を、劍を以て武を表はすなど、皆象徴である。又無形のものゝ象を以て現はす場合、例へば白を以て純潔清淨を、黒を以て悲哀を表はすなども象徴である。更に複雑なものになると、ダンテの神曲が中世紀の基督教思想を表はし、沙翁の「ハムレット」が懷疑苦悶を表はす等も象

徴である。如斯一思想を象徴するを、高級象徴と稱す。イブセンの「鴨」など好適例である。又普通の云ひ方では、表はし難い氣分とか情調とかを、或る象に借りて表はすものを、高級象徴に對して、氣分象徴、情緒象徴など云ふ。序に象徴主義に就て附言する。

「象徴主義」 Symbolism. 神祕的な、普通言葉で現はし難い深い意義を、具體的な象徴に由つて現はさんとする、主義、傾向、及び其作風を云ふ。その起原は象形文字を用ひ、又人と動物を寄せて奇異な形で神を象徴したエジプトであつたと云ふ。象徴主義は先づ宗教に現はれた。宗教はその對照が精神的、神祕的なもの故、その思想及び感情を表はすに、

象徴によらねばならぬ。基督教の洗禮聖餐式、又は十字架等は一種の象徴である。宗教上の象徴主義と並んで古代よりあるのは藝術上のそれである。中世紀になつて神祕劇、宗教劇が起つたのも、宗教的思想・感情を、象徴的に現はしたものに過ぎぬ。その後科學的精神の勃興と共に、一時この主義は衰へたが、近代に至り再び神祕的、象徴的傾向が起り、これが近代人の官能的、神經的な現象に伴ひ近代文藝特色の一傾向を來した。

「文學上の象徴主義」 象徴とは形の無い、作者の思想・心地・氣分などを、形を具へてゐる客觀の事象に由つて表現する事であるが、この主義は表現に象徴を用ひることを旨とす

る主義である。故に客觀的事象の描寫に重きを置かず、専ら情調を象徴化して表はすに努む。即ち情調はこの中心を形づくるもので、情調藝術と云つてもよい。近來は神祕的傾向が著しい。一體神祕世界を表はすには描寫では駄目で、漠とした情調の中に、暗示されねばならぬ。故に神祕主義とこの主義は相結合して、神祕的になるといふ特點を有してゐる。又著しく技巧的な特徴を有してゐる。これを詩作上の主張としたのはマラルメ、エルレイヌに始まり代表的な作家として前記二詩人及メーテルリンクなどである。デカタン派はこの主義である。デカタンとは墮落した人々の意で、最初はローマ文明が爛熟した末期の

墮落時代の人々を云つたものであるが、近代十九世紀の半ば過ぎ、フランスの若き文學者の群を稱する名となつた。(一)斯派の藝術は情調を重んずる所の神經の藝術で、思想感情の藝術ではない。(二)非常に人工的で自然から飽くまで遠ざかる。(三)神祕的である。(四)異常・驚異を求める、等である。斯派は後年デカタン派とシンボリスト(象徴派)とに別れた。此等を總稱してデカタン象徴派と稱す。併し二派とも殆ど同一である。この感化は英・獨・伊等に入り何れの國にも波及した。

「美術上の象徴主義」繪畫上の象徴主義は、古くエジプトの藝術にもあつた。古代基督教藝術は、象徴に由つて表現され、ゴシック建

築にありては、人物及怪異な動物に由つて、美術、惡徳が表はされた。最近佛國の寫實主義より轉じて、マネーの印象主義が起り、事象の精神を捕へんとした結果、象徴的傾向を帯びて來た。モローやシャヴァンヌは、正義を權衡に、詩を月桂樹又は七絃琴に、その他人生自然の意義を、象徴に由つて表はさんとした。ヘックリンは奇異な畫題に由つて、自然人生の神祕を象徴的に暗示した。その傑作「波の戯れ」は自然の絶大なる威力を、「死の島」は死の幽幻なる神祕を象徴してゐる。歐洲に於ける近代の象徴派畫家として、佛國のギユスターヴ・モロー。オシロン・ルドレ。白耳義のフェルナン・タノツフ。フェリシアン・

ロット。壞國のグスターフ・ワリムト。英國のバーン・ジョンス。瑞西のヘックリン等が有名である。

「音樂上の象徴主義」音樂自身がすでに象徴的のものなるが、近代人の氣分・經驗・思想を表はして、一種の象徴主義的音樂を創始したのは、獨逸のワグネルである。彼は「綜合藝術は、詩歌と音樂とを調はしたオペラに由つて實現さる。」と説き、そのオペラに由つて、シヨベンハウエルの人生觀を象徴してゐる。

「情緒象徴」氣分象徴と同じ。象徴主義文學に用ひらるゝ言葉である。普通の方法では表現し難い、氣分・情緒等を、或る象徴をかりて現はすものである。一例を示せば、葉舟(水

野盈太郎の文中に月夜の凄い情緒を書いたところがある。「……歩きながら、もうこの世界中に生きたものが、凡て目を閉ぢてしまつたと思つた……と思ふと眼前の景色は瞬く間に變つてゐる。冷たい灰色をして見えたのは、累々と横はつてゐる裸體の死骸であつた。自分はその死體の上を歩いてゐたんだ。そして現にその死骸の上に立つてゐる。」文中の裸の死骸は、勿論あつたのではなく、冷たい月光の下に、物凄く現はれた自然の姿から、作者の感じた氣分を象徴したのである。

「象徴詩 Symbolic Poetry」これを略言せば、思想や感情は、詩の根本的な内容でなく、感覺より生じたその瞬間の情調を表現するのが

本質である。これを得るために音樂の與へる神經の刺戟を必要とする。詩とは即ち神經に與ふる言葉の刺戟である。故に詩と音樂とは密接な關係を有し、よし詞句が意味をなさなくとも、官能を刺戟する言葉・響さへ、作者の情緒を表現して居れば、それは象徴詩である、といふ。故に象徴詩は官能の藝術である。

「象徴的藝術 Symbolic Art」獨逸のヘーゲルは藝術を別けて次の如くにした。(一)象徴的藝術—建築。(二)古典的藝術—彫刻。(三)浪漫的藝術—繪畫・音樂・詩。これによれば象徴的藝術は、外形的方面・感覺的方面に勝れた建築の如きものである。

「象徴的色彩 Symbolic Colour」種々な精神

状態の象徴に用ひられる色彩、例へば赤は熱情、青は沈靜、白は純潔を象徴するが如きものである。〔文辭〕

【粗剛】 ソガウ。この熟語諸種の辭書に見えず、「粗豪」の意であらう。「粗豪」ソガウ。あらくして放埒なること。〔大宇〕あらかつぽく強いこと。〔詳漢〕

【悠々】 イウイウ。(一)遙かなさま。遠いさま。(二)憂へるさま。(三)行くさま。(四)間暇あるさま。ゆつくりするさま。(五)はてのないさま。無限に遠いさま。〔詳漢〕こゝは(四)【岸にさゝやく云々】 岸に打寄せては返す波の音を微妙な音樂と解したのである。

【優雅】 イウガ。やさしくみやびやかなり。〔大宇〕

【包含】 ハウガン。つゝみふくむ。くるめもつ。併せ有する。包有・包容・含有。〔詳漢〕

【千古斧鉞を知らざる深山】 センコフエツをシラざるシンザン。「千古」大昔。「斧鉞」をのとまさかりと。〔詳漢〕こゝは、大古以來斧も鉞も入れたことのない、即ち大古以來伐木したことのない深山の意。

【せいらぎ】 浅き瀬などに水の流るゝ音。又、その處。〔大國〕

【水清ければ、魚棲まず】 「水至清 則無_レ魚、人至 察 則 無_レ徒。」文選の東方朔の答客難「文及び孔子家語にある。人至りて明察なれば、人に疾畏せらる、故に孤立して徒侶黨援無きに至るに喩ふ。「水清 無_レ大魚。」

水至りて清ければ、魚の隠るゝ場なきため、大魚すまず、以て人明察なれば、他に畏懼せられて友なきに至るに喩ふ。後漢書班超傳に、「任尙代爲都護請教、超曰、君性嚴急、水清無大魚、宜蕩佚簡易。」(威語人は清濁合せ呑むの寛度を要する意。)

【畏敬】 キケイ。おそれうやまふこと。〔詳漢〕

【北上川】 キタカミガハ。(北神川・來神川)奥羽を縦走する奥羽・北上兩山脈によりて形成せる縦谷を流るゝ大河にして、流域巖手・宮城兩縣の一市十郡に亙る。源は巖手縣巖手郡の北境御堂村北上山に發し、兩山脈間の斜面を流下する諸川を合せ、漸く水量を増し、南下して宮城縣に入り、桃生郡鹿又・小船越間

にて追波川(四里二十八町)を東方の追波灣に分流し、石卷に至りて仙臺灣に注ぐ、全長六十二里十七町。

北上川は古來屢流路を變ず。現在の流路は、所々に大堤防を築きて人爲にこれを規定すれど、未だかゝる設備なかりし時代に在りては、洪水の氾濫にまかせて時々その流路を變ぜしを疑はず。晉に口碑のこれを傳ふるあるのみならず、地形の明かにこれを證するもの甚だ多し。伊達氏その下流地方を領するに及びて、屢大工事を起して漫流を防ぎ、河身を改修して運輸の便を圖りたること少なからず。中に就きて元和・寛永年間鹿又、石卷間に新河道を開き、從來追波川によりて東北に

注ぎしものを改め、直に南流して仙臺灣に注がしめたるが如きは、最も重要なものなりとす。北上川の名は平安朝以前の古書に見えず。そのこれあるは鎌倉時代吾妻鏡を初となす北上の名は日高見の轉訛なるべし。古へ蝦夷の國に日高見の稱あり。北上川の東方桃生郡に延喜式内日高神社あるはその舊地を傳ふるなり云々。〔百科〕

【般賑】 インシン。甚だ賑やかなこと、富み足りること。〔詳漢〕

【石卷】 イシノマキ。北上川の河口に跨り、仙臺灣に臨む。錨地の深さ三尺に過ぎず。大船の出入に適せざれど、北上川の水運及野隸東名の二運河を経て松島灣に至る水運の起點

なるを以て、商船・漁舟多く輻輳す。寛永年間伊達政宗北上川下流をこゝに轉流せしめて錨地を開き、領内唯一の米穀輸出港と定めたりし以來、奥羽第一の要津なりしが、近時鐵道開通の影響を蒙り、市況の發達著しからず〔百科〕人口約二十萬。

【幟】 ノボリ。音 シ。

【磯節】 イソブシ。俗曲の一種。常陸の磯濱町より起れる故にこの名あり。磯濱は水戸へ三里十八町、那珂へ二十六町、市街の東、丘阜海水に突出す。これを大洗岬と稱し、丘上に國幣中社大洗磯前神社あり。左に現今最も行はるゝものゝ二三を示す。

磯で名所は大洗様よ、松が見えますほのぼ

のと。

船はちやんころでも炭薪スヒマキは積みぬ、積んだ荷物は米と酒。

磯で曲り松湊で女松、中の祝町や男松、百科の類である。「男松」は「男待つ」で、この曲がかゝる地に生れたことを示すものである。但、本課に擧げた「三十五反の」は、實に男性的な痛快味が多い。「反」は帆の大きさをいふ。

【伊達政宗】ダテマサムネ。伊達氏十七代の主にして、父は輝宗、母は最上義守の女なり。永祿十年八月米澤城に生る。幼名を梵天丸といふ。天正六年十三歳の時元服して政宗と稱す。寛永十三年五月二十四日薨す。年七十。百科

【嘆賞】 タンシャウ。嘆譽に同じ。感心してほめること。嘆美・嘆稱。百科

に在る村。東北地方第一の古墟にして、南北約一里。東西二里餘、陸羽街道及鐵道東北本線通過す。驛の地を平泉といひ、鐵路一ノ關へ四、四哩（一里二十九町）、東京上野驛より二七八、三哩、今は寒村なれど、藤原氏四代居館の當時は奥羽五十餘郡、一萬餘村の首邑として結構京都に擬し、頗る壯麗を極めたりと云ふ。平泉城址は驛北に在り。嘉保元年藤原清衡、居を江刺郡豊田（今藤里村餅田）よりこゝに移し、奥御館オクミカドと號す。基衡・秀衡・泰衡相繼いで居る。

中尊寺は驛の西北一三町、宇中尊寺に在り、長治年中清衡の勅命を奉じて建立せしものにして、金色堂あり、里人光堂ヒカドと稱す。

【日和山】 ヒヨリヤマ。石卷町の西方にある小丘。海拔僅に一八六尺に過ぎざれど、平野の間に在るを以て一眸豁然、眺望の勝を縦にし、東方遙に牡鹿半島、西に相馬の岬を望む。山頭稍廣き所は、往昔葛西氏居城の趾にして、今鹿島御兒神社を安んず。舟子船を三さんとするときは、必ず山上に登りて潮勢を視、又陰晴を卜するを常とす。百科

【豊かな恵】 北上川がその流域に與へる具體的な恩恵は、河中に多くの鮭・鱒・鮎・鰻等の魚族を産すること。沿岸は平野廣からざれど、概ねこの川の成せる沖積層地にして、地味膏腹、嚴手・宮城兩縣の主要生産地であること。且東奥の水運に便宜を與へること。百科

【平泉】 ヒライヅミ。嚴手縣陸中國西磐井郡

清衡・基衡・秀衡の遺骸を收む。又その經藏は三代寄進の一切經を藏す。毛越寺は驛の西北約四町に在り、鳥羽天皇の勅願所にして、基衡の建立に係り、今は常行・法華の二堂僅に名跡を傳へ、域内高館（一名判官館）に義經廟あり、天台宗に屬す。百科

【中尊寺】 チュウソンジ。天台宗の寺、平泉郡衣關に在り。關山弘臺壽院と號す。寺傳に嘉祥三年圓仁（慈覺大師）開山し、陸奥守藤原興世資財を投じて堂宇を興造し、後、下野大慈寺榮信來りて住持となり、益、寺基を擴張し、貞觀元年勅して中尊寺の號を賜はり四至を定められ、天喜・康平の交源頼義崇敬して寺領を寄附したりと云ふ。されど實は長治二年藤

原清衡の本願に依り建立せられたるものなり。同年に最初院を造立し、嘉承二年に大長壽院を造立し、天仁元年に金堂・塔婆・鐘樓・經藏・大門・金色堂及諸院を造立し、ついで鎮守の諸祠を造立して、結構壯麗を極め、同三年落慶供養の法會を修す。基衡・秀衡相次で寺基を擴張し、堂塔四十餘宇、禪房三百餘宇に及ぶ。後鳥羽天皇勅願の御祈禱所とせられ、僧正慶源別當となり一山を統轄し、大に隆盛を致し、奥羽第一の大伽藍として知らる。文治五年泰衡滅亡の後、源頼朝、寺領を安堵せしめ、殊に命じて諸堂宇を修理せしめたるも、後、漸く衰頹し、建武四年に野火のため堂塔禪房みね焼失し、僅に金色堂・經藏を残すのみ。

文明年間葛西滿信寺領十二箇村を改めて七箇村となす。天正年間豊臣秀吉寺領を安堵せしめ、朱印地七箇村を與ふ。寛永の初、後水尾天皇勅して金色堂の破損を修理せしめたまふ。同七年伊達政宗更に寺領を寄附し、忠宗境内地を定め、更に寺領を寄附し、伊達氏世々保護を加ふ。明治九年七月四日明治天皇御巡幸あり、古堂及寶物を觀覽したまふ。二十年保存費を下賜せらる。現今境内東西十七町三十間・南北十三町餘、古堂二宇・再建堂舎十九宇・坊僧十八箇寺あり。〔百科〕

の蹟今平泉中尊寺の東八町餘にあり。平泉雜記によれば、東西四百六十間餘南北百三十間餘、高さ五十間とあれば、今は地勢變遷して館趾十間より二十間ばかりにて、東南西北は八十間ばかり、高低三段にて、西北の高地に義經堂、東南に新山社あり。堂頭は老樹茂生し、裏面は斷崖絶壁にて北上川その麓を流れ、形勢甚だ雄麗なり。北上川その麓を流るゝに至りしは凡そ二百餘年來のことにて、以前はこれより遙に東方を流れ、こゝは衣川の流れし所なり。北上川その後瀾漫して館下に流れ來り、遂にその流域を變ずるに至りしなり。〔百科〕

【義經】 小字牛若、左馬頭義朝の第九子なり。

母を常磐といふ。人となり軀幹短小にして、白哲反齒、神采秀發にして、趨捷人に軼ぐ。平治の亂幼を以て死を宥められ、鞍馬寺覺日に預けられて名を遮那王と改む。十一歳の頃諸家の譜を閲して、平氏を滅ぼし父祖の仇を復せんと欲し、晝は書を読み、夜は武を講ず。覺日これに剃髮を勸むれども聽かず。十六歳の時、陸奥に往き、藤原秀衡に依り、その力を藉り、宿志を成さんと欲し、金商吉次、下總の人深栖頼重と俱に關東に赴く。近江鏡宿に至りて首服し、名を義經と稱す。尋で陸奥に着して、秀衡に依る。秀衡平泉館にむかへて厚くこれを遇す。治承四年兄頼朝兵を伊豆に起すと聞きてこれに赴く。……頼朝、義經の功

を嫉み、梶原景時の讒を信じていよくこれを悪む。義經、大江廣元に依りて情を陳すれども聽かず。遂に義經の采地二十四所を収む。時に叔父行家、頼朝と協はず、頼朝これを除かんと欲す。行家匿れて京師に居り、義經と密に相往來す。頼朝、梶原景季を遣はし、義經をしてこれを討たしむ。義經たま／＼病を以てこれを辭し、病癒ゆるを待ちて徐にこれを圖らんことを請ふ。頼朝以て行家に黨すとなし、益、これを怒り、遂に土佐坊昌俊をしてこれを圖らしむ。昌俊、義經を六條堀川の第に襲ふ。利あらずして敗走し、後、捕へられて殺さる。頼朝これを聞き、親ら諸將を率ゐて將に義經・行家を撃たんとし、進

んで黄瀬川に至る。義經法皇に奏して頼朝追討の院宣を賜はり、鎮西に走る。海上大風俄に起りて舟漂蕩し、西海に赴くを得ず。大和に走りて吉野に匿れ、遂に多武峯に走り、また京師に還る。文治三年二月、修驗者となり、北陸道を経て陸奥に至り。また秀衡による。秀衡これを衣川に館す。その冬、秀衡卒せしが、終に臨み、子泰衡等に遺言して義經を推戴せしむ。五年四月、泰衡、頼朝の命を奉じて、衣川を襲ふ。義經妻子を刺殺して自殺す。時に年三十一。泰衡首を鎌倉に傳ふ。後世義經の末路に就て異説を傳ふる者あり。或は遁れて蝦夷に至ると云ひ、或は支那に赴きて金國に仕へたりと云ひ、或は清朝の始祖となす

ものあり。されどいづれも確證なければ信ずるに足らず。〔百科〕

【斷巖】 ダンガン。きりたちたるいは。〔大宇〕

【絶壁】 ゼツベキ。けはしきがけ。絶崖。〔大宇〕

【史蹟】 シセキ。時代中にあつた事實、歴史にのこつてゐることから。〔譯漢〕

【聯想】 レンサウ。心理學上の語、或考から他の事を考へ起すはたらき。英語 Association の譯。〔譯漢〕

【芭蕉】 バセヲ。徳川初期の俳人。俳諧正風の建設者たり。世には寧ろ俳諧そのものゝ建設者として仰がる。正保元年伊賀國阿拜郡柘植莊(現今阿山郡柘植村)に生る。父は儀左衛門、芭蕉幼名金作・半七郎・甚七郎等と傳ふ。後

に忠左衛門宗房と改む。十歳前後より伊賀上野の城主藤堂新七郎良精の嫡子主計良忠の小扈從を勤む。良忠俳諧を好み、北村季吟の門人にして蟬吟と號す。芭蕉この感化を受けて十四歳の時の「犬と猿の世の中よかれ酉の年」は傳へられたる彼の句の最古のものなり。寛文六年四月蟬吟歿す。芭蕉その六月蟬吟の遺髪を奉じて高野山に行き供養を了して歸る。その秋に至り「雲と隔つ友かや雁の生別れ」といふ句を同僚城孫太夫方の門に貼して主家を脱奔す。時に二十三歳。まづ京都に行き、季吟の門人に入りて和學俳諧を、又伊藤坦庵に就て詩を學ぶ。その頃號を泊船堂桃青・釣月軒宗茂といへり。寛文十二年九月江戸に下り、

小澤卜尺・杉山杉風等の家に寄寓す。後、人の周旋にて關口水道工事の小吏となり、一年ほど勤む。延寶二年三十一歳にて薙髮して風羅坊といひ、又杖錦子・棚々齋と號し、杉風所有の深川の別墅に入りてこゝに定居す。杉風・卜尺既に芭蕉の門人となり、この年其角十四歳にて入門す。延寶五年素堂と連句し、又「桃青二十歌仙」を出だして、名漸く高し。延寶九年（この十月に天和と改元）「枯枝に鳥のとまりたる哉秋の暮」の句を作る。この頃より閑寂の方向に進む傾向あり。又佛頂和尚に就きて禪を知る。天和二年自ら芭蕉と呼ぶ。この冬急火に圍まれ、辛く命を助かり、それより無所住の心切に起りて甲州に遊び、半年ほ

ど經て歸る。この年千春編「武藏曲」出で、翌年其角編「虚栗」出づ、共に芭蕉門の俳諧集なり。正風の勢漸く盛なり。貞享元年伊勢・伊賀・芳野・近江・美濃・尾張・甲斐を旅行す。紀行を「野晒紀行」といふ。この旅行中木因・荊口・如行・荷兮・杜國・野水・千那・尙白等入門す。貞享三年の春「春の日」成る。この書中にある「古池や蛙飛込む水の音」は最も著名の句なり。この句を吐きて芭蕉は明に我進路を自覺したるものゝ如し。正風の基礎實にこゝに定まる。貞享四年去來・破笠・曾良等入門す。この年八月鹿島に遊ぶ。紀行を「鹿島紀行」といふ。同じく十月東海道を經、伊賀に赴き、翌春芳野・美濃・尾張を巡り、木曾街道

を經て江戸に歸る。紀行を「笈の小文」及「更科紀行」といふ。この頃越人・路通・智月等入門す。元祿二年春奥羽街道を經て日光山・那須野・白川・仙臺・松島・平泉を經、莊内に遊び三山詣をなし、越後・越中・加賀・越前を經て美濃に至る。この時の紀行即ち「奥の細道」なり。名文なるを以て最も著る。尙引續き美濃より伊勢・京都・近江に遊び、翌三年また伊勢に行き、伊賀に行き、江州に歸る。この四月より石山の幻住庵に住みて半歳を經、「幻住庵記」はこの時の作なり。この頃支考入門す。元祿四年「猿蓑」成る。この年の四月嵯峨に遊び、去來の落柿舎に一月ほど閑居す。この折の日記を「嵯峨日記」といふ。同年冬江戸に歸

る。許六入門す。元祿七年「炭俵」成る。この年五月名古屋・京都・大津等に遊び、九月浪華に入り、その二十八日園女の饗應を受け、胃腸を害し、御堂前の花屋仁左衛門方の裏座敷を借りて臥す。諸門人變を聞いて集まる。十月九日「旅に病んで夢は枯野を駈け廻る」と吟じたるは彼が最後の句にして、元祿七年十月十二日申刻觀音經を誦しつゝ、眠るが如く逝く、年五十一。十四日江州義仲寺に葬る。會葬者帳に控へたるのみにても三百人に上れり。芭蕉性清く、風月を友として絶えて名利の心なく、全く世外に遊びてしかもなほ禮節をよく守れり。その門人を教ふる、手を執りて教へずして自ら悟らしむ。後人の編したる